

96
16

徒步旅行



徒歩旅行を讀む

子

規

子

紀行文を何う書いたかといふ事は紀行の目的によつて違ふ
併し天概な紀行は純粹の美文的に書くもので無くても矢張出来る
だけ面白く書かうとする即美文的に書かうとする、故に先づ面白
く書くといふ事は其紀行全部の目的で無くても少くも目的の五分
は必ずこれであると極めて置いて、扱て其外の五分は人によつて
種々雑多に書かれて居る事である。一二の例をいふて見ると、山
水の景勝を書くのを目的としたものや、地理地形を書くことを目
的としたものや、風俗習慣を書くことを目的としたものや、或は

其地の政治經濟教育の有様より物産に至る迄細かに記する事を目的としたもの、或は個人的に旅行の里程、車馬の賃、宿泊料などの事を一々に記したものの、或は記事の方は極めて簡略に書いて、唯文章を飾る事を務めたもの、などいろくある。然るに樂天の徒歩旅行といふのは或は政治經濟の事より教育の事、工業の事を記し、或は旅行里程宿泊料等個人的のものをも記し、或は衣服飲食などを論じて菓子の評さへする事もある。其目的は實に複雑であつて、さうして一日の記事を凡そ新聞の一欄位に書きつめて仕舞はねばならぬので、普通の者ならば迎も此目的を達する事は困難であるべきのを樂天は平氣で遣つてのけて居る。よし辛うじて此目的を達したところで最早其上に面白く書くといふ餘地は無

い筈であるが、樂天の紀行は毎日必ず面白い處が二三個處は存じて居る。これが始めに徒歩旅行を見た時に余が驚嘆して措かなかつた所以である。つまり徒歩旅行は必要と面白味とを兼ね備へたもので、新聞記者の紀行としては理想の極點に達したといふても善い位であると思ふ。

去年此紀行が二六新報に出た時は炎天の候であつて、余は病牀に在つて病氣と暑さとの夾み撃ちに遇ふて唯煩悶を極めて居る時であつたが、毎日此紀行を讀む事は樂しみの一つであつた。或は山を踰え谿に沿ひ或は吹き通しの涼しき酒亭に御馳走を食べたなどゝ書いてあるのを見ると、幾らか自分も暑さを忘れると同時に又其羨ましさはいふ迄も無い。殊に此紀行を見ると毎日西瓜何錢と

いふ記事があるのを見て此記者の西瓜好きなるに驚いたといふよりも寧ろ西瓜好きなる余自身は三尺の垂涎を禁ずる事が出来無かつた。毎日西瓜の切賣を食ふ様な樂みは行脚的旅行の一大利得である。

夏時の旅行は余も屢やつた事があるが、旅行し乍ら毎日文書を書いて新聞社に送るといふ事は餘程苦しい事である。一日の炎天を草鞋の埃りにまぶれ乍ら歩いてやうく宿屋に着いた時は唯勞れに勞れて何も仕事などの出来る者では無い。風呂に入つて汗を流し座敷に歸つて足を延べた時は生き返つた様であるが、同時に草臥れが出て仕舞ふて最早筆を採る勇氣は無い。其處で其夜は寐て仕舞ふて翌朝になつて文章を書いて新聞社に送つて置く。さうし

て宿屋を出る時は最早九時にも十時にもなつて居る事があつて詰り朝の涼い間を却て宿屋で費し暑い盛りを歩かねばならぬ様な事になる。其は恐らく實驗の無い人には氣の附かぬ事である。

余は行脚的旅行は多少の經驗があるが、併し此紀行に在る様に各地で歓迎などを受ける旅行はまだした事が無い。毎日く歓迎を受けるのは楽しい者であるか苦しい者であるか余にはわからぬが時としてはうるさい事もあるであらう。けれ共一日の旅行を終りて草臥れ直しの晩酌に美酒佳肴山の如く、或は赤襟赤裾の人さへも交りてもてなされるのは滿更悪い事もあるまい。併し此記者の目的は美人に非ず、酒に非ず、談話に非ず、唯一意大食に在る事は甚だ余の賛成を表する所である。

此紀行が二六新報に出た時には三種の紀行が同時に同新報の上に載せられた。其内で世間の評判を聞くと血達磨の九州旅行が最も受けが善くて、此徒歩旅行は最も受けが悪いやうであつた。併しそんな評は固より當てにならぬ。寧ろ排斥せられたのが此紀行の旨い所以ではあるまいか。血達磨の紀行には時として人を驚かす様な奇語奇文奇行が無いでは無いが、惜しい事には文字に不穩當な處が多い。殊に其豪傑志士を氣取る處は俗受けのする處であつて其實其紀行の大缺點である。某の東北徒歩旅行は始めより此徒歩旅行と兩々相對して載せられた者であつたが、其文章は全く幼稚で別に評する程のものでは無かつた。獨り樂天の文は既に老熟の境に達して居てことさらに人を驚かす様な新文字も無いけれど

其でありながら又人を倦まさないやうに處々に多少諧謔を弄して山を作つて居る。實に輕妙の筆、老練の文といふべきである。固より他の紀行と同日に論ずべきもて無いのみならず、凡そ此程の紀行は一寸此頃見た事が無いやうに思ふ。唯傍人より見れば新聞取次店又は地方歡迎者の名前を一々列記したる丈けは稍々うるさい感があるが、其は此の紀行の目的の一部であるから固より記者を責むべきものではない。寧ろ斯る紀行の中へ斯る世俗的な目的をも加へ而も充分に成功したる樂天の手腕には驚かざるを得ない。

徒步旅行

目次

七月一日	武州府中	一
七月二日	相州與瀨	二
七月三日	甲州猿橋	三
七月四日	甲州勝沼	五
七月五日	甲府	六
七月六日	甲州葦崎	七
七月七日	信州葛木	八
七月八日	信州上諏訪	九
七月九日	信州松本	一一
七月十日	信州洗馬	一三
七月十一日	信州宮ノ越	一四
七月十二日	信州須原	一五

七月十三日	信州山口	一七
七月十四日	濃州大井	一八
七月十五日	濃州多治見	一九
七月十六日	濃州鵜沼	二一
七月十七日	濃州岐阜	二二
七月十八日	濃州大垣	二四
七月十九日	濃州養老山	二六
七月二十日	濃州養老山	二七
七月廿一日	濃州關ヶ原	二八
七月廿二日	江州彦根	三〇
七月廿三日	江州八幡	三二
七月廿四日	江州瀬田	三五
七月廿五日	京都	三七
七月廿六日	京都	三八
七月廿七日	城州嵐山	四〇

七月廿八日	丹波王子	四一
七月廿九日	京都	四四
七月三十日	城州玉水	四五
七月卅一日	城州笠置	四八
八月一日	伊賀上野	四九
八月二日	城州有市	五二
八月三日	和州奈良	五四
八月四日	和州奈良	五七
八月五日	和州長柄	五九
八月六日	和州長柄	六一
八月七日	和州葛	六三
八月八日	和州五條	六五
八月九日	紀州岩田	六八
八月十日	紀州和歌山	七〇
八月十一日	紀州和歌山	七一

八月十二日……紀州貝塚……………七二
 八月十三日……泉州堺……………七四
 八月十四日……大阪……………七六
 八月十五日……大阪……………七九
 八月十六日……攝州西ノ宮……………八一
 八月十七日……攝州神戸……………八三
 八月十八日……播州明石……………八六
 八月十九日……播州高砂……………八八
 八月二十日……播州姫路……………九〇
 八月廿一日……播州姫路……………九二
 八月廿二日……播州安室……………九五
 八月廿三日……播州龍野……………九七
 八月廿四日……備前三石……………一〇〇
 八月廿五日……備前岡山……………一〇二
 八月廿六日……備前岡山……………一〇四

八月廿七日……備中倉敷……………一〇七
 八月廿八日……備中笠岡……………一〇八
 八月廿九日……備後松山……………一一一
 八月三十日……備後尾道……………一一三
 八月卅一日……備後尾道……………一一六
 九月一日……安藝忠海……………一一八
 九月二日……安藝竹原……………一二〇
 九月三日……安藝川尻……………一二一
 九月四日……安藝吳……………一二三
 九月五日……安藝廣島……………一二六
 九月六日……安藝廣島……………一二八
 九月七日……安藝嚴島……………一二九
 九月八日……周防岩國……………一三一
 九月九日……周防呼坂……………一三四
 九月十日……周防宮海……………一三六

九月十一日.....周防三田尻.....一三七
 九月十二日.....周防山口.....一三九
 九月十三日.....長州車地.....一四一
 九月十四日.....長州小月.....一四三
 九月十五日.....長州馬關.....一四五
 九月十六日.....長州馬關.....一四七
 九月十七日.....長州川棚.....一四九
 九月十八日.....長州粟野.....一五〇
 九月十九日.....長州深川.....一五二
 九月二十日.....長州萩.....一五四
 九月廿一日.....長州地福.....一五六
 九月廿二日.....石州津和野.....一五八
 九月廿三日.....石州益田.....一六〇
 九月廿四日.....石州濱田.....一六二
 九月廿五日.....石州濱田.....一六三

九月廿六日.....石州江津.....一六五
 九月廿七日.....石州溫泉津.....一六七
 九月廿八日.....石州太田.....一七〇
 九月廿九日.....雲州今市.....一七二
 九月三十日.....雲州平田.....一七五
 十月一日.....雲州松江.....一七六
 十月二日.....雲州松江.....一七八
 十月三日.....伯州米子.....一八一
 十月四日.....伯州淀江.....一八三
 十月五日.....伯州赤崎.....一八五
 十月六日.....伯州橋津.....一八七
 十月七日.....因州濱村.....一八九
 十月八日.....因州鳥取.....一九二
 十月九日.....因州鳥取.....一九四
 十月十日.....因州智頭.....一九六

十月十一日.....作州古町.....一九八
 十月十二日.....播州三日月.....二〇〇
 十月十三日.....播州安室.....二〇二
 十月十四日.....播州甘地.....二〇四
 十月十五日.....但馬生野.....二〇七
 十月十六日.....但馬八鹿.....二一一
 十月十七日.....但馬豐岡.....二二三
 十月十八日.....丹後久美濱.....二二六
 十月十九日.....丹後峰山.....二二八
 十月二十日.....丹後宮津.....二三一
 十月廿一日.....丹後舞鶴.....二二三
 十月廿二日.....丹波綾部.....二二六
 十月廿三日.....丹波園部.....二二七
 十月廿四日.....丹波龜岡.....二三〇
 十月廿五日.....城州伏見.....二三三

十月廿六日.....京都.....二三四
 十月廿七日.....江州瀬田.....二三七
 十月廿八日.....江州水口.....二四〇
 十月廿九日.....勢州關.....二四三
 十月三十日.....勢州津.....二四七
 十一月一日.....勢州松阪.....二五二
 十一月二日.....勢州山田.....二五四
 十一月三日.....勢州山田.....二五六
 十一月四日.....志州鳥羽.....二五九
 十一月五日.....勢州山田.....二六一
 十一月六日.....勢州松阪.....二六三
 十一月七日.....勢州津.....二六五
 十一月八日.....勢州四日市.....二六八
 十一月九日.....勢州四日市.....二七〇

十一月十日	勢州四日市	二七二
十一月十一日	勢州桑名	二七四
十一月十二日	勢州桑名	二七六
十一月十三日	尾張名古屋	二七八
十一月十四日	尾張名古屋	二八〇
十一月十五日	參州岡崎	二八二
十一月十六日	參州岡崎	二八四
十一月十七日	參州豊橋	二八七
十一月十八日	遠州白須賀	二九〇
十一月十九日	遠州入出	二九二
十一月二十日	遠州濱松	二九四
十一月廿一日	遠州濱松	二九七
十一月廿二日	遠州見付	二九九
十一月廿三日	遠州見付	三〇三
十一月廿四日	遠州掛川	三〇六

十一月廿五日	遠州金谷	三一〇
十一月廿六日	遠州藤枝	三一二
十一月廿七日	駿州静岡	三一四
十一月廿八日	駿州静岡	三一六
十一月廿九日	駿州富士川	三一七
十一月三十日	駿州吉原	三一〇
十二月一日	豆州三島	三二三
十二月二日	豆州三島	三二五
十二月三日	駿州沼津	三二七
十二月四日	豆州修善寺	三二九
十二月五日	豆州湯ヶ島	三三一
十二月六日	豆州三島	三三三
十二月七日	相州宮ノ下	三三五
十二月八日	相州小田原	三三八
十二月九日	相州平塚	三三九

十二

十二月十日……相州鎌倉……………三四一

十二月十一日……相州横須賀……………三四二

十二月十二日……相州鎌倉……………三四五

十二月十三日……武州金澤……………三四六

十二月十四日……武州横濱……………三四八

十二月十五日……武州横濱……………三五一

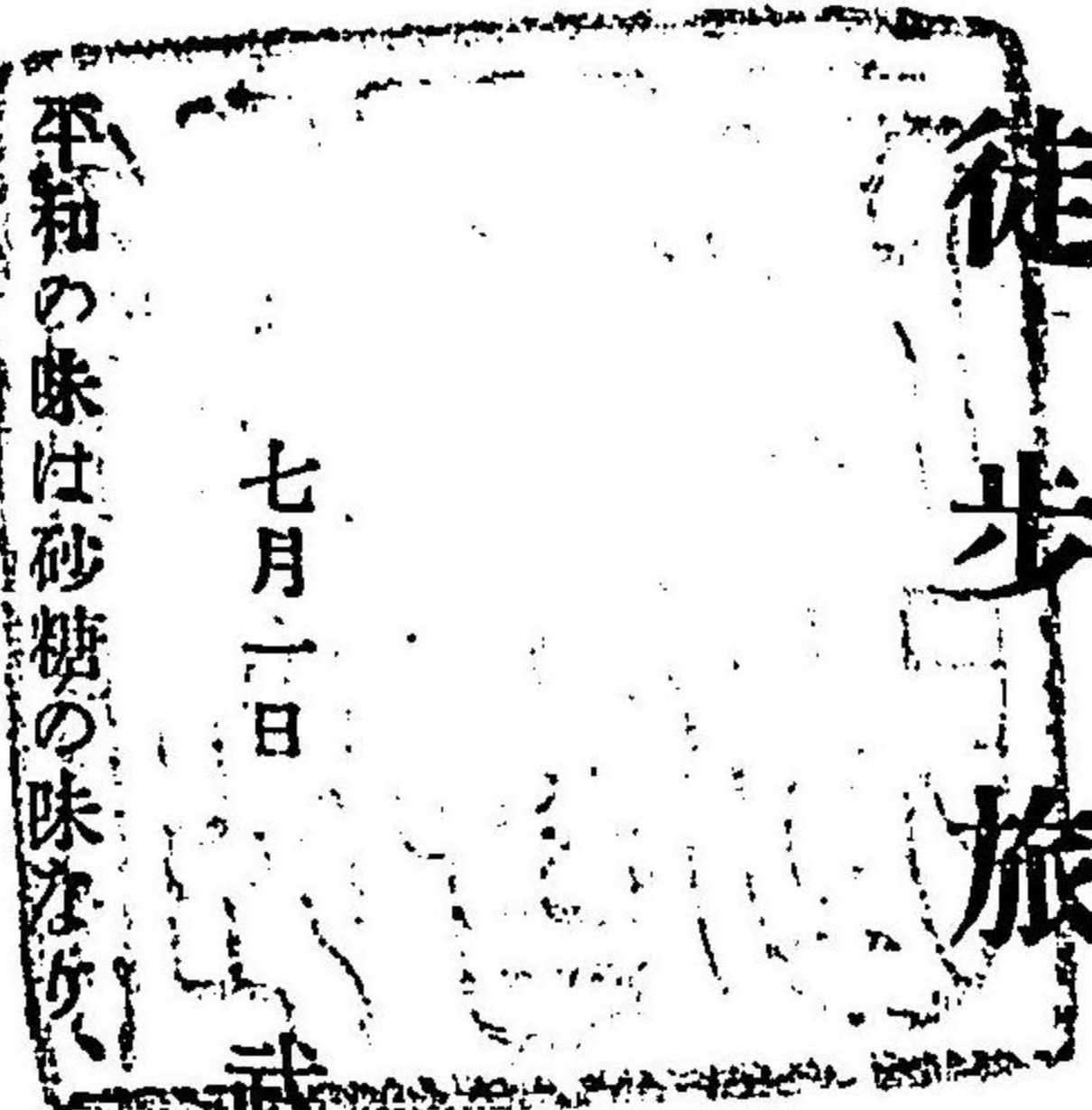
十二月十六日……武州品川……………三五二

十二月十七日……歸京……………三五五

徒歩旅行

中村樂天著

七月一日 武州府中 松本屋にて



平和の味は砂糖の味なり、家庭のにはひは襪襟の臭ひなり、などは誰やらの口眞似の
 様で可笑しくも無いが、兎に角九方里か十方里の地に百万の家を建て、馬糞の埃り
 を呼吸してる様では平和も家庭も愛想の盡きたものぢや▲交通機關とやらも大分整備
 した世の中に徒歩旅行は好奇過ぎる様ぢやが、記者は豫て斯る好奇心に充されて居る
 のぢや、所が貧乏暇なして此好奇心を満足させるのが出来ざつた、併し記者が金を有
 つて居たならば、徒歩旅行しやうと企つた所で、迎も遂行し得ないであらう▲幸ひ社
 の先輩が條件を規定して、徒歩旅行させると云ふので、好機逸すべからずと出掛ける

二
とになつた▲記者は社中に於て最劣等の体格なので、社の先輩中には保養させて呉れやうとの慈悲心から記者を憐れた向もある様ぢやが、世間には此徒歩旅行を稀有の壯舉のやうに言はるゝ向もあるとやら、實以て氣耻かしい次第である▲今日歩いた道は、村園門巻多相似たりて、緑樹茅屋衡門竹垣イクラ歩いても同じ事ぢやつた、唯だ路の兩側に杉丸太が多く雨ざらしにしてあるのと桶屋竹細工屋の澤山あるのが目立つた▲田の方は已に一番草を取つて居るのに、畑には小麦を刈らずに腐らしてゐるのを四五ヶ所見受けた、

七月二日

相模國與瀨驛

角屋にて

昨夜泊つた府中の松木屋は面白い旅館であつた、自由廢業反對と云ふ譯でもあるまいが、下女までが頻りに同地娼妓の溫柔しくて自由廢業せぬのを褒めて居た▲女郎屋は調布町に九軒、府中町に七軒ある限り、迎も八王子のお尻にも追付ないと慨歎したのは此家の主婦ぢやつた▲今日五時半に起きて同地の大國魂神社境内を散歩したが、

其境内の廣くて杉木立の立派などは上野公園も三舎を避ける程ぢやつた▲斯くて七時過徐々出掛けだが、立川や日野やこれと言つて記すべきとは無く、多摩川の橋を渡る手前に濠があつたので、道連れの肩に扶けられただけの事ぢや▲八王子は汽車に乗つた紳士が何れも先刻御承知の土地だから、徒歩旅行記者が紹介致すまでも無からう▲小佛峠は今やガタ馬車が通過する程の處ぢやと云ふので輕蔑して舊道を取て見たが、却々の難關で、一夫關に當れば萬夫進む能はずとも謂つべき箇所が多く、特に頃日の暴雨で阪路半ば崩れ、一步を誤れば深谷に陥るべき處が往々ある▲小佛嶺上の破屋に休憩したが、山賊の住居かとも思はるる家ながら、其夫婦は養蠶に専心従事し、六歳ぐらゐの女子に其親父さんが、團扇、ランプ、犬ツころ、など教へて居つたのは一種の興味があつた、

七月三日

甲州猿橋

大黒屋にて

與瀨より猿橋へ來る路は、四日間の雨天に泥田の如くなつたので、旅客の困難は一通

りでない、困難不困難、そんなとは如何でも可いが、泥汁が高く飛び上つて着換のな
い制服を汚すには閉口した▲今夜は如何なる珍事が湧き起るだらうか、神ならぬ記者
の豫言し得る所では無いが、昨夜は宿屋の老爺に養蠶談及び鐵道談を聴かせられて身
体の疲勞を忘れて居つた▲今夜泊つた宿屋の前は、有名なる猿橋を控へて居る、猿橋
の架つて居る崖は、陳腐ながら鬼斧神工と評するの外ないが、何しろ水が味噌汁の様
に濁つて居ては如何に清奇の景もサツパリ面白くないのである▲關野と云ふ處で休ん
だが、大きな饅頭が駄菓子箱に列べてあるのを見て、チョット旨さうに思ひ、四ツだ
け菓子盆へ取つた、けれども此饅頭は見懸倒して、食へる譯の物でなかつた、ソコで
傍に居た馬追小僧に食へと勧めたが、遠慮して手を出さぬから、摘んで渡した、小僧
さんムシャ／＼遣付けて仕舞つた、爾うして彼は纏て馬を追つて出掛けたが、境橋(甲
相の界)を渡つて二丁ほど行つた處で、暫く佇んで待つて居た、何の爲めかと思つた
ら、記者に徑路ちかみちを教へん爲てあつた、實に可愛らしいものぢや、

七月四日

甲州勝沼

池田屋にて

出發以來三日打續いての雨天に氣を腐らして居た記者は、今朝の晴天にイソ／＼して
早目に立つた、所が三日間軟泥を踏んだ足が俄に硬地を踏んだ故か、左の足に一ツの
豆が出来た、併し歩行に難む程では無い▲與瀬でも猿橋でも、宿屋と云へば一軒か二
軒より無いので、自然專賣的習氣を生じ、茶代など遣らぬ客を冷遇する傾きがある、
處によつては宿屋で料理をも兼ねて居るから、隣室で騒がれて大に迷惑するところがある
▲黒野田で晝飯を食つて有名な笹子峠にかゝつたが、小佛峠の舊道に較べて見れば、
路幅が廣くて勾配が緩て馬や駕籠で越す人達の氣が知れない位ぢや▲當町の東端に柏
尾山と云ふのがある、此山は赤土で雌松が多く、如何見ても上方邊の山に似て居る、
果然、立札ありて『松茸發生中は入林を禁ず』と記されてある、この柏尾山は維新の
際、幕軍が西軍を拒いた地ぢや▲五人連の旅客に出會つたが、其一人は記者に向つて、
何日東京を立たれたか雨天續きでお困りでしたらう、と挨拶した▲大月花咲の間に芭
蕉の句碑ありて、『しばらくは花の上なる月夜哉』と刻されてある、大月の月の字、花

咲の花の字があるから、土地の人には頗る氣に入つた句だらう、

六

七月五日 甲府 米倉方にて

勝沼より甲府までの間は餘り記すべきこともない、甲府にて山梨日々新聞の主筆山本節氏を訪問したが、同氏は當地の五新聞、即ち山梨日々新聞、山梨時報、峡中日報、山梨民報、甲斐新聞、にて足下を歓迎する筈なりと言はれた▲縣廳の證明と云ふとを等閑に附する譯では無いが、一休みして縣廳へ參らうと思ひ、宿屋米倉善八方へ投じたる所が、四日間の疲れが一時に出たのか、三時間ばかりは一寢入りに寝て仕舞つた▲ソコで纏て湯に浴し太田公園の望仙閣（歡迎會の場所）へ出掛けたが、山本節氏開會の辭を述べ、記者は謝辭を述べた、斯る場所に慣れない記者のマツサ加減は言はずとももの事ぢや▲あとで二次會があつたか、三次會があつたか、左様な事は如何でも可い、明日午前四時から、記者を御嶽山へ引つ張つて行かうと云ふ剛の者が三人ばかりあるのは豪氣なものぢや、

七月六日 甲州韭崎町 清水屋方にて

今早朝、山梨時報社の保科萬次郎氏が昨夜の約を履んで、御嶽行誘引に來られた、所が記者は昨夜チト頂戴し過ぎた結果、少々頭痛の氣味で、如何しても御嶽まで行かうと云ふ勇氣が無つた、ソコで保科氏に二時間ばかり猶豫を請ふたが、同氏は任重く路遠き御身が勉めて行かるゝは宜からず、此企てを中止せんとて歸られた▲それで記者は、寶丹を嘗めたり頭を冷したりして、九時頃氣分快く爲り、十時より縣廳へ行き、五新聞社の歡迎記者へ禮に廻り、それより徐々信州街道を歩いた▲書記官西久保弘道氏は、整劔家ぢやさうで、昧格が自然に備つて居る、のみならず粗服を着て古ぼけた袴を穿き、言葉もイクラカ薩摩隼人に近いと思つたが、後で聞けば佐賀人さうナ▲書記官は記者が道路に就ての批評に對して、本縣は堤防修築を主とする故に、道路の方に用ゐる經費を減ずるに至る傾きありと辯じた▲堤防と云へば、中巨摩郡の信玄堤は却々堅固に出來てるので、今日の學理的設計も遠く及ばぬとの話ぢや、機山將軍が民政に意

七

を用ゐたるとは此一斑を見ても判る、

七月七日

信濃國蔦木驛

大阪屋にて

甲州韭崎から信州諏訪へ出るには、臺ヶ原、教來石などを經過するのが普通ぢやが、頃日の出水で穴山橋と云ふのが落ちたから、七里岩の方を歩いた▲七里岩と云ふのは、七里の坂路であるが、坂路としては登降の少い方で、七里岩と云ふ様なキツイ名を付けるよりは、七里岡とても言つた方が穩當だらうと思はれる▲此坂路に當る村は、穴山、日野春、清春、篠尾、小淵澤であるが、日野春の一里ほど手前を右へ二里餘り入れば、頃日ベストで有名になつた甲村である▲日野春で正午ぢやつたから晝食しやうと思つたが飲食店がない、村役場と小學校と同一建築物中に在るが日曜で闕然寂然、其前に理髮店と何でも屋（萬屋と書くべきか此一句は斧正を願ひたい）があつて、何でも屋には荒物、小間物、菓子、煙草より鱈魚干魚まで賣つて居る、立寄つて此邊に晝食すべき處があるかと問ふたが、其處（右へ行く細道を指して）を十丁程行けばあると

の事、十丁の往復二十丁の冗歩は、クラ徒步記者でも避易せざるを得ない、ソコで眞直に此路をドノくらゐ行けば飲食店があるかと問ふたが、一里餘り行けば清春に飯だけにはあらうとの事▲斯くて空腹を抱へて歩き出したが、ナカ／＼遠く覺えた、路傍の梅や櫻の實を食つて一時半に清春へ着いたが、おとまり宿の看板出した百姓家へ入つたけれども飯は無いと雙の老爺が斷つた、ソコで記者は駄菓子でも食はんと入口の何ても屋へ入つた、これは百姓家より一軒置いて手前▲記者は先ブコチラで仕度が出来やうかと問ふた、主婦は御飯は無いが素麵があると答へた、ソコで素麵をユデて貰つた、シッピた茄子を悪い醬油の汁に入れて粗い物ぢやつたが、腹一パイ食つた▲甲信の界なる谷川に橋が落ちて居るが二間ばかりの水幅で厚板が横へてある、

七月八日

信州上諏訪

牡丹屋にて

出發以來最早八日、雨の降らざつたのが四、五の兩日だけぢやつた、併し雨天に勞れた身軀が、一浴して一合の酒に陶然たる如き快味は、此境を實驗した者でなければ解るま

い、記者は昨夜も此快味を喫し、今夜も此快味を喫しつゝあるのぢや、特に此地には温泉があつて、此牡丹屋の座敷が清潔であるから、一浴一飲頗る快適である、讀者諸君羨ましくは無いか▲斯う云ふと記者は酔つぱらつて出鱈目を書くやうに思はれるかも知らぬが、記者の頭脳は一合や二合の酒に鈍る頭脳でなく却て益々明快になつて来る、若し記者の文中に不明快の個所あらば、酒の爲めに不明快となつたので無く、先天的不明快なのである▲今日の途上、平凡で無事であつたから、種々な事を考へた、一の名案は甲府に旅團を置くが可からうとの事ぢや、昨日通過した穴山、日野春の邊は、高低一樣ならぬ曠原で、牧畜場にも適するが、最も演習地に適して居る、聽て甲府までの鐵道が出来れば、五時間にして海魚、牛肉其他旅團に必要な物品を送るとが出来ると云ふのである▲今日金澤村で晝食に入つた所が、馭者だか馬丁だか頻りに馬車を勧めた、記者は歩くのが仕事だからと言つたが、彼は解らないからクワン顔して笑つて居た▲永明村の百姓家の庭に菜莢が熟してゐるのを見て欲しく爲り、其老爺に少し賣らないかと言つて見たが、枝を切ると急に伸びない、一粒づつ採るのは時間が費

へると言つて居たが、五錢の白銅を渡した所が、鎌を持つて来て二三枝切つて呉れた上に、斯う澤山貰つては濟まぬと五錢を一圓とても思つた様な挨拶であつた、人情の淳朴なるにも因らうが農民の貧弱實に憐むべしぢや▲昨夜宿泊した葛木にも蚊が居らざつたが、今夜も蚊が居らない、昨夜は浴衣の上にフテラを重ねて貸して呉れたが、今夜は浴衣だけ出して呉れたから、袴を貸して呉れと請求した、

七月九日

信州松本町

本町千歳館にて

今朝、上諏訪の牡丹屋を出立して、諏訪湖の好景を眺めつゝ徐歩した、小川ありて富士見橋と云ふのが架つてゐるのを見たから、途上行き逢つた人に此邊から富士山が見ゆるかと尋ねた、其人答へて晴天なら遙に富士の巔を見得るとの事、憾むらくは宿雲漠々として、富士どころか諏訪湖畔の山すら半腹以上が見えないのである▲今井と云ふ處から鹽尻峠へかゝつたが、新道は廣くて平坦な代りに、ガタ馬車や人力車が路を悪くしてゐるので、徒歩旅行者には困難なるのみならず、里程が一里餘も遠くなるのぢや、

ソコで記者は舊道を取つたが、此の峠の舊道は小佛ほどの難所でない、とは言ふものゝ今井からの登り道は角のある石がトント川底の石の様に満ち／＼て居る▲峠を越ゆれば鹽尻村ぢや、此處に小松と云ふ飲食店があつて、チヨット^{チヨット}書餉^{シヨウ}の膳にも徳利を倒して、赤い顔してる先生を見受ける、記者は浴後の一杯を面白く感ずるけれども、書食に酒の欲しい程の上戸でないから、直に飯を食つた、魚は鯉と鱒^{マス}があつて、今日までの書食(甲府米倉は例外)場所に較ぶれば大に優つて居る▲甲府を出てからと云ふものは、何處にも東京の新聞賣捌所が無い、上諏訪にはあるだらうと楽しんで来たが、牡丹屋の主人から無いと聞いて失望落膽一方ならず、これでは松本へ行かねば迎も見られないと思ひ、敵の勢力範圍へ侵入して来た▲来て見れば、新聞賣捌所へ狐鼠々々が入つて、三四日分の新聞だけ買ふて逃けると云ふ様な意氣地のない窃盜然たるとは出来ない、制服は最早路傍青年等の注目する所と爲り、徒歩旅行記者云々の私語さへ聞ゆるのぢやから▲ソコで直に信濃民報社を訪ひ、石塚三五郎氏に而晤し、小僧の案内にて此千歳館へ来た▲聽て民報社の飯田旭窓氏來訪ありて、旅途の勞を慰められ、

次で石塚氏來訪ありて、今夜花月(料理店)に於て晚餐を催さんとして伴はれた、

七月十日

信州洗馬

近江屋にて

昨夜、料理店花月へ伴はれ、石塚君と浴槽中に雑談し、湯から出ると、記者の通信中に鶏卵云々とあるを生で食ふか煮て食ふかと問はれた、ソコで記者が生で食ふと答ふるや、雞卵は直に注文せられ井鉢に盛られて記者の前に現はれた、記者は忽ち其中三個を平げた▲膳が列んで一同着席すると、二木氏は極無雜作に開會の挨拶をせられ、餘り鹿爪らしきとなく一同打ちくつろいで飲み始めた、杯幾たびか廻り一同の醉顏花より紅なる時、三味線を弾き始めた如何な俚歌を唄つたのか醉中よく記憶もせぬが、屋外の雨聲と頗る調和が宜かつた、放翁とやら云ふ唐人は、憶昔錦城歌吹海、七年夜雨、不會聽とて歌吹海裏に於ては眞に夜雨の趣味が解し得られぬかの様に言つてるが、それは夜雨の趣味を知らぬ前から歌吹海に居たからであらう▲旅籠屋千歳館の主人は、記者と相見るの初、逢ひたい御目に懸りたいと半月も前から騒いだが、御目に懸

ればそれ迄て何も申上げるとは無いとて笑つてるところ實に無邪氣なものぢや、

七月十一日

信州宮越驛

若松屋にて

洗馬には木曾義仲が馬を洗つたと云ふ清水がある、これは紀行文や名勝案内などに詳しく出て居るから、記者は屋上に屋を架するとを止めて置く▲近江屋を立つ時、主婦さんが、記者の貌をツク／＼と見上げ、お前さんはお弱いか大層瘦せて居なされると涙をコボしさうに言ふから、これでも五百里や千里歩くに差支あるまい、とトんだ處で氣焰を吐いた▲此時、新聞を見て居つた息子さんは、貴君の事が出て居りますとて、態々信濃民報を見せて呉れた▲洗馬は木曾路の入口で、漸々爪先上りとなるが、奈良井へ至つて始めて峠にかゝる、峠は言ふ迄もなく鳥居峠ぢやが、評判ほど高い峠では無い、但だ往くが如く復るが如く曲折して進むので、何時の間にか高い處で前峯後嶺を鼻先に眺め得るやうになる▲先づ四五日は晴天だらうと思つたが、鳥居峠を登りかけるとポツ／＼降り出して半腹以上に至れば前峯半ば煙雨に隠れ、變幻百出とまで行

かないが、餘程奇觀を呈した、ソコで半峯是雨半峯烟など拈り始めたが物になりさうも無い▲鳥居峠は木曾の分水嶺で、犀川は北へ木曾川は南へ流れて居るが、何れも奇巖美石と相觸れて天然の音樂を奏してゐるのみならず、其水も亦清く潔いのである▲途で逢つた老爺に、奈良井まで何里あるかと問ふた、彼は二里餘りと答へて、神様へお参りなさるかと問ひ返した、記者が善い加減に頷くと、彼は私も参つて來ました、今年はずい程が多いので困りますからと言つた▲蕨木では浴衣の上へ布子を重ねて出し、松本の花月では裕羽織を貸して呉れ、今夜の宿屋は浴衣二枚重ねて出した、信州が冷かなるとは、これ判る、

七月十二日

信州須原驛

住吉屋にて

宮越には義仲の城趾があるのぢやが、昨夕方は篠を衝く大雨、今朝も風雨であつたから行つて見ない、行つて見た所で之れはと云ふ程の事もなからう▲宮越は旅籠屋の權式の高い處である、其理由と云ふのは外でもない御料局のお役人が泊るからぢや、離

れ座敷が見えるので彼處にして呉れと記者が言ふと、主婦さんが御料局の御方が居な
 ざるのですと答へて澄して居つた▲藪原と云ふ處は、櫛屋が過半を占めて居て、野郎
 が通つても名物のお六櫛を買ひなされと勸めて居る▲上松あげまつで晝飯を食つて十丁ほど進
 むと、家が六七軒あつて浦島太郎の舊跡云々の棒杭があるから、一丁餘り細逕を降り、
 臨川寺の小僧が木曾川を覗して、アレが何岩なにいわと喋舌るのを聞いたが、所謂寢醒床
 は之れかと思へば興が醒めた▲木曾路は洋服の上に「糸だて」を着た人が多く通る、
 記者の見ただけでも三人ある、又「糸だて」を着ないで、洋服草鞋ばきの人を見た、
 此人は松本から名古屋へ鐵道の通じない中に徒歩で行つて見たいと云ふので出掛けた
 との事、記者に向つて二六新報社から徒歩旅行爲すつたのですかと挨拶した▲信州は
 唐松を澤山作る處で、到る處に唐松の林がある、随つて唐松苗を賣る家が多い▲甲州
 信州には刈らないで、雨中に立つてる麥が多い、併し大抵は大麥なので皮が厚いから
 腐らない、若しこれが裸麥ぢやつたら、疾うに腐つて仕舞つただらう、

七月十三日

信州西筑摩郡山口村

吾妻屋にて

御嶽、駒岳見送るが如く、木曾川は名残惜なごりおしさうに濃州へ向つて居る、駒岳は氣味悪
 いやうな山ぢやが、それほど深險なのでも無からう、木曾川が巉巖を衝き巨石を冒し
 て流るゝ勢は、英雄の事を爲すが如く何物も得て之を阻害すべからざる概がある▲信
 州は言ふ迄もなく蠶絲の國である、随分他の産物にも富で居るが、先づ蠶絲を以て重
 なる産物と看做して宜しい、旅籠屋の如きも傍ら養蠶に従事して居ると言ふよりは、
 養蠶を本業として傍ら旅籠屋を營て居ると言ふがホントウだらう、故に養蠶時期に於
 ては旅客を謝絶して居る旅籠屋が往々ある▲人國記とか云ふ本には、無暗に信州人の氣
 質を褒めちぎつて居る、古今人情の變遷にも因らうが、今は爾う褒めちぎる程でも無
 い、併し悪い方では無い、利害の打算には敏い方ぢやが、規模は左程小さくないので、
 爾うこそくして居らぬ、町人でも學者のやうに分析的辯論に長じ、時々哲氣を帶
 びた言を吐くのは、信州人一般の氣風らしい▲三留野みつどまのの小松屋と云ふので、晝飯を食
 つたが、鯉節をコッパの様に削つて醬油かけて呉れた、飯も古米か何かを炊いた變挺

なもので、ヤット二碗だけ食ひ得た、併し其價の廉なとも驚いたもので僅六錢ぢやつた▲この三留野は、僅四十八戸の村ぢやが、役場もあり地方裁判所出張所もあり、殊に面白いのは新聞雜誌縦覽所のあるとぢや、チヨット寄つて見たが、新聞は讀賣と信濃民報だけで、雜誌は新聲、穎才新誌の類ぢやつた▲妻籠、馬籠は舊道に當つてるのぢやが、雨後の舊道は甚だ好くないと云ふので新道を取り、この山口へ泊るやうになつた、此家の前に水車があつて、宛然風雨の聲を作して居る、

七月十四日

美濃大井町

池田屋にて

信州松本から木曾路を通過する間に町らしいものは無かつた、福島町は電信局もあり牛肉店が一軒ある位ぢやが、道幅が一間ほどで陰氣で迎も町と言へない位である▲所が中津川へ来て、始めて町らしい感が生じた、此處に多いのは餅屋ぢや、大山と云ふ書肆があつて、東京の新聞は何々を賣捌いて居るかと問くと、朝日萬朝時事日本ですと答へた、爾うして一枚賣するのがあるかと問と、丁度注文の分だけを取次で居るの

て一枚賣りする餘分はないとの答▲曾我某と云ふ醫者を尋ねて見たが、手術中とて暫く待てとの事ぢやつた、路を急ぐ記者は歸省中の醫科大學生と二三語を交へて去つた、彼曰く私も休暇後は東海道を徒歩で出京する積りですと▲木曾路や美濃東部の人はカルサンと云ふものを穿て居る、袴と股引を折衷した様なもので、脛に入る、所は筒形と爲り上部は袴の如く兩股とも入れるやう作られてある、併し袴の様に後の板がない、大工でも農夫でも善く穿いて居るが、小學生徒は殆ど袴の代りに穿て居るやうぢや▲去る三日の夜、猿橋で牛肉を食つた後、暫く食はざつたので、中津川町の牛肉店を襲ふた、所が牛肉は品切で豚肉ならあるとの事、それで可いとて、直に焙爐に向つて豚鍋をついく身となつた▲信濃から美濃へ入る境に大きな杭があつて例の通り是れより東長野縣、是れより西岐阜縣とあり、二三歩すると一軒家があつて岐阜縣惠那郡落合村二百十九番戸の三、可知金松と煤けた標札に讀まれた、

七月十五日

美濃多治見町

松屋にて

今渡から太田への渡場(木曾川の)を少々心配したので、多治見町へ遣て来た、實は徒歩旅行の別働隊自轉車旅行の那珂博士に逢ひたいと云ふ情が熱したからぢや、▲昨夜大井町に来た時、市川と云ふ旅籠屋に泊る筈であつたが、旅客満員で断られた、スルト直其向側に『傳染病患者あるに付き交通を遮断す』と云ふ貼紙があつた、ソコで断られた方が却て幸ひと出掛けて見たもの、町端れへ行つてから次の宿へまで遠いことを聞いたので、復た引返して餅屋と云ふ家へ入つた、ソコで丁寧に挨拶されて、草鞋の紐を解く間に『お泊りして御座いますか、手前は旅籠屋は……』と遣られた、記者はキマリの悪さを耐へて、それぢや旅籠屋へ案内して呉れとて、池田屋へ案内された▲本日午前釜戸町で中京新聞と云ふのを買つて見ると、那珂博士が自轉車で名古屋を通過されるとが記載してある、今日まで記者の別働隊たる人が誰であつたか知らざつたは實に情け無い譯ぢや、土岐郡肥田村字淺野と云ふ處で、モーション／＼貴君は失禮ながら二六社の御方ですかと呼ぶ者があつたので、喜で十歩餘り引返して其家へ入つた、貴君は二六新報を御覽下さるかと聞いた所が、弟が高崎に居て其讀み殻を送つて呉れ

ますからとの事▲甲信は蠶絲の國なり、尾濃は陶磁器の國なり、と言へば中らずと雖も遠からずぢや、當地は何れも赤土粘土の山で自ら陶器の原料に富んで居る、

七月十六日

美濃鵜沼驛

大島屋にて

那珂博士に名古屋で逢ふ積りぢやつたが、今早朝立つと云ふとを知つた、ソコで一つ剽輕な電報を打つた、『キミニアフテコ、マデキタニ、アスオタチトハドウヨクナ』、届いたか、如何だか▲今朝多治見を立つ時、宿屋の息子さんが、有名な虎溪山は茲から僅か八九丁で御座います、態々遠方から御覽に御出でなさる方も御座います位ですから……と頻りに勧めた、ツイ釣り込まれて行つて見たが、岩に小さな瀑布の懸つて居る幽境で、南禪派の道場がある、佳ならざるに非ざるも規模甚だ小にして泉水的なるは遺憾ぢや▲豊岡、小泉、廣見諸村は乾燥無味、蛇が蛙を追ふ巡查か飲食店で冗談を言ふ位ぢやつた、▲午後三時半頃、今渡から太田へ渡つたが、川の兩岸へ高く電線様の線を懸け、他の線をこれに結付けて舟中へ垂れ、所謂釣り渡しなるものなので毫

も危険は無い▲太田から勝山まで松並木の間に道が通じて居る、此間を二人の若者が馬で驅競して居つた、▲勝山より橋を渡り木曾川に沿へる道が佳い、右は崖や岩窟から清冷なる水がボチャリ／＼と滴り、左は底の見えない碧水で、小舟に白帆張りて夕陽を受けたるが二つ三つ上つて來るところ實に何とも言へない▲更に行けば、一度は松や桑て三丁先きの見えぬ境も通るが、忽ち犬山城が翠微の上に現るゝなどは覺えず快哉を叫ばざるを得ない、

七月十七日

美濃岐阜市

郵便局隣小橋屋にて

本日は岐阜市へ着くと云ふのが愉快で、何日より早起した、岐阜へ着くのが何故爾う愉快かと云ふと、第一、出發以來ロク／＼見るとの出來ざつた二六新報が留置郵便物として岐阜郵便局へ届いて居ると、第二、出發以來甲府、松本などを見なければ、木曾路から以西で都會とも云ふべきものを見ざつたが、此渴を岐阜にて醫し得べきと、第三、岐阜まで來れば先づ全旅行の七分の一を卒業したもので、兎に角一段落を首尾

よく經過したと感ずると、此三つが愉快の原因たるに相違ない▲又天氣も昨日は晴なりしに拘らず、溽暑くして頭痛がして心持悪かりし爲め、歩行餘り抄取ざつたが、本日は曇つて涼しいので甚だ抄取つた、それが爲め鵜沼より岐阜まで四里三十一丁、先づチヨット五里を午前十一時まで歩いて、此勢ひで行けば、十三四里を歩み樂天は馬車か人力車にでも乗りはせぬかとの嫌疑を受けるほどであつたらうに惜いことには岐阜と云ふ美人に袖を引止められて仕舞つた▲十時過ぎからボツリ／＼降り出して岐阜近くの赤土道に薄赤く濁つた潦が出来るまでに降りしきつたが、十一時濃飛日報社を訪問した頃は、雨は小歇であつた▲主筆原真澄氏は記者を西洋料理屋行樂亭へ伴ひ行かれ、此處で晝食を爲しつゝ種々の話があつた、岐阜には餘り人物が出ないが此處の主人と山田てふ菓子屋の主人は洋行して來たものとの話は耳新らしかつた▲晩方より濃飛日報社、岐阜日々新聞社の諸君に伴はれて鵜飼見物に出掛けた、鵜飼は風俗畫報か何かで畫だけ見たとがあるが、ヒュー／＼ヒュー／＼と口笛吹きながら紐を繰る様はナカ／＼壯觀で、漁父の面は篝火に照されて燃えるやうぢや、十幾つの鵜に紐を

付けてあるのぢやから、入り亂れた時にはチョット何の鵜は何の紐であるかを見分け難いのぢやが、熟練と云ふものはエライもので、チャント何の鵜は何の紐と一目して分明なところ杯は流石に一種の技術である▲舟中宴を張り酒三行にして、綾子と云ふが絃を弾じ小房と云ふが歌つたが、水に傳ふ絃歌の聲は又格別で、雨中の絃歌と相持して下らない方ぢや▲岐阜縣の重なる産物は縮緬、提灯、傘で、涼團、油團、團扇なども少しは出る方さうナ、

七月十八日

美濃大垣

郭町新玉屋にて

昨夜鵜飼見物から歸宿し、酒氣紛々の中に紀行を書いたが、今朝は甲府に於ける歓迎會の翌朝と同じく頭痛岑々、又も氷を買つて頭を冷す騒ぎを遣つた▲ソコで十時十分に小橋屋を立ち、岐阜日々新聞社と濃飛日報社へ行つて禮を述べ、日報社の加藤行彦君に送られ、雑談しつゝ何時の間にか合渡がよどの渡場まで來た、出發以來新聞社の人と話しつゝ歩いたのは、これが嚆矢で談話の面白さに頭痛を忘れて居た▲さて本日通過した

のは鏡島、合渡、美江寺、呂久などぢやが、山遠く河緩かに、田圃多く村落密なるは西濃の特色を謂つべく、東濃のやうな花崗岩の屹立した峰嶺、赤土に小松の生えた岡陵は一向見受けない▲岐阜に入らない前は、「御機嫌能う御出てやす」てふ宿屋の挨拶ぢやつたが、岐阜以西は「早う御歸りやす」とて、宛然我家の人を送る如く、歸り來るを期する様な挨拶する、これは京都風に化せられたので、細膩繊穠とても評すべきぢや▲岐阜の女は「ナアモ」と云ふ言葉を頻りに使ふが、これは男子が「チー君」と言ふのと同じ意味ぢや▲美江寺で晝飯を食つたが鯉一皿、午勞一皿、飯二碗で六錢、美江寺より少し東の一軒家（駄菓子、ラムチ、鶏卵など陳べた小店）で、卵三個を食つたが僅四錢五厘、西濃物價の廉なること實に氣の毒の様ぢや▲車夫などが飲食店で話すを聞けば、今日は善御客ぜんごきゃくさんに乗せて合渡から美江寺までに二十錢貰ふた、とて鬼の首でも取つたやうに喜んで居る、飲食店でも、三錢の飲食して五錢拂ひ釣錢はイラぬと云ふ客を神様のやうに言つてる▲美江寺の飲食店で一時間以上晝寝して來たので、頭痛がスツカリ癒えた▲西濃印刷株式會社の河田貞城氏の話に據れば、西濃印刷會社で、東

は茨城縣、西は熊本縣までの仕事があるさうな、^廉て丁寧ならば如何な遠方の顧客をも引着ることが出来るのぢや、

七月十九日

美濃養老山

豆馬亭にて

今日は河田貞城、河野三郎兩氏に誘はれて、養老瀑布見物に來た、養老が歴史付きの瀑布たるとは言ふ迄もない、此養老山を修めて公園にして仕舞つたのは、明治十三年の事で、時の縣令小崎利準氏は人民から頌徳表でも奉らるゝ勢ぢやつた▲午前九時に大垣を出て、午後一時に當亭へ着し、飯を食つて晝寝して、四時頃に瀑へ出掛けた、平生寫眞などで見飽きて居る養老瀑も、來て見れば又格別で、久雨の後とて水勢殊に猛く、崖を崩さんずる勢ひあつて、飛沫濺々として冷霧肌を浸すのである▲河野氏は、記者と河田氏を冷霧中に立たせて、撮影器械を装置し、終に自己も記者の傍へ來り、人をして撮影鏡を一開一閉せしめた▲大垣では記者の來た日を紀念に健脚會を組織した其會員は急用で無い限りは決して車に乗らないで徒步すると云ふ會則である▲原真

澄氏の話に據れば、關ヶ原の役、ハッキリ東方とも付かず西方とも付かさつた菟蓐武士は多く美濃に出た、それで今でも菟蓐人間が多い云々、^阿

七月二十日

美濃養老山

豆馬亭にて

一兩日來、瘧疾を催したが、歩行に差支へる程の事は無かつたので、平氣で歩いて居た所が追々重くなつて來さうなので、昨夜から療治を始めた▲ソコで今日も、幾度か入浴し幾度か脂藥を用ゐて、ゴロ／＼晝寝して居た、チヨット日曜とか公休とか云ふ日の氣になつて▲けれども何か書いて送らぬと、美濃や近江の鐵道に沿ふた郵便局で、爾う郵便物の遅延する筈は無い、徒歩旅行記者何處の山中へ迷つて居るのだらうなどと心配する向があるかも知れない▲今日晝寝から覺めてボンヤリ考へたことを書いて見やう、東濃は交通機關を始め工商上の事九分通りまで名古屋に依頼して居る、大抵の貨物は岐阜から名古屋へ行き、名古屋から多治見へ行き、爾うして東濃に配布されて居る、岐阜の新聞は名古屋を通らなければ、東濃一般へ早く配達することが出来ない、

斯う云ふ有様ぢやから、東濃は早晚愛知縣へ合併すべきものぢや▲爾うして飛驒の國は岐阜縣廳まで遠くて不便な上に、自國は餘り水害に遭はないから、美濃の治水費を分擔するとは大迷惑に相違ない、彼れは長野縣に合併するが得策ぢや▲養老公園に於ける千歳樓は明治十三年に嘉材を擇んで建てたもので、園中最好の位置を占め、濃、尾、參、遠悉く眸中にあり、拭ふか如き秋晴に、富嶽を遠く金城を近く、一抹の白線を畫ける伊勢の海を望むは、快言ふべからすとの事ぢや、

七月廿一日 美濃關ヶ原 瓢箪屋にて

痔疾は未だ全癒しないが、爾う何日までも養老あたりでグズ／＼して居る譯には行かぬソコで先歩けるだけ歩かうと思つて、徐々と關ヶ原まで遣て來た、關ヶ原は言ふまでもなく西が負と云ふ辻占ぢやから、那珂博士の言はるゝ通り御幣擔ぎならば、記者は此處に泊るとを避けたであらう、が記者は左様な事に頓着しない▲本日養老の豆馬亭を出て四五丁來た所で、三人連れの青年に逢つた、此三人は記者を見て、貴君は二

六から御出でになつた中村さんですか、私共は名古屋の者です、先日那珂さんが貴君を待つて居られましたと挨拶した▲垂井町で書肆富田乾氏を訪ふた、氏は二六の愛讀者で、自分が萬朝を愛讀して居た頃は、知人の多くが萬朝を購讀し、自分が二六を愛讀するに至つて、知人の多くが二六を購讀する由を話し、記者を近所の料理店へ連れ行きて、晝食しつゝ教科書其他の雑談をした▲徒歩旅行の二君が、宿屋へ着て疲れて居るか居らぬかは文章上に現れて居る、東の方は強壯な人だけに、其文章に疲勞が現れない、貴君のは疲勞が現れて居ると氏は直言された、成程左様かと思つても何だか面白くない、文体によつて斯く見ゆるのだらう杯と自ら慰めて居るのは意氣地なしの骨頂ぢや▲美濃は一体に鰻鮓を善く食ふ處で、チョット飲食店へ入ると、鰻鮓を上げまじやうか御飯を上げまじやうかと聞く位ぢや、所が近來可笑な訛傳が鰻鮓に大打撃を加へた、訛傳は斯うである、臺灣では鰻鮓を食ふのに鰹節などのダシを用ゐない、而も鰻鮓に味を付ける爲めに蛇を干して粉にして鰻鮓粉に混ぜる、故に臺灣で鰻鮓を食ふのは蛇を食ふのと對(同じてふ方言)ぢや、所が此臺灣鰻鮓粉は近頃内地へも來て

居ると、斯う云ふ馬鹿げた訛傳の爲めに鰻鮓屋の生存問題を惹起し、鰻鮓屋の廢業せしもの一二に止まらずとは實に情け無い次第ぢや、

七月廿二日

江州彦根

樂々園にて

大垣と養老とへ廻つた爲めに、赤坂を通らざつたが、赤坂は大理石の産地で、副産物はセメント、石灰ぢやさうナ▲肥料としての石灰の効用如何と云ふに、石灰は地中に含有してゐる養分を上層に浮ばしむるだけの効用で、石灰其物には養分を有つて居ないと云ふ説もある▲昨日關ヶ原の瓢箪屋へ着いた時、お泊りですかと聞くから、泊つても可い休んで出掛けても可いと答へた、スルト主人がお泊りは生憎……と言ふから記者は兎も角一休みしやうと思つて鞆を卸した、此時恰好川路知事が息子三人及び隨行者と共に外から歸つた、隨行者の一人不破郡書記宮島賢と云ふ仁が記者を見て貴君は二六の記者さんですか、私は二六の愛讀者ですと挨拶した上、店の者に懇々紹介して呉れたので忽ち上客となつて仕舞つた▲美濃近江の境は今朝知らず知らず通り過ぎ行

商人に問ふた時は最早四五丁も過ぎて居たが、態々引返して探討した、從是東、岐阜縣管轄、從是西、滋賀縣管轄と棒杭のある處美濃の畑には里芋が植ゑられて、桐と桑との可なり太いのが茂り、近江の畑には茄子を植ゑて畦に棗が實つて居つた、爾うして近江の入口の家は荒物屋兼駄菓子屋で、坂田郡柏原村大字長久寺大木新六と云ふのぢやが、其壁には筆太に「かめや」と書いてある▲番場ばんばの飲食店で晝飯を食つたが、煤は天井裏にアラ下り、小便壺は入口に溢るゝと云ふ有様で、其穢さ加減は殆んど筆紙に盡されない、鯉と胡瓜揉を菜に二碗の飯を食つたが僅四錢とは、三留野及び美江寺の晝飯も三舍を避けざるを得ない▲此處に多賀へ歸ると云ふ工女らしい者三人が休み半農半商らしき五十男が二人休んだ、五十男の一人は右の耳の上にクリ／＼のある奴で年甲斐もなく娘達にからかひ、多賀へ御歸りか、私等多賀へ行く者ぢやが一緒に行きましやうと誘つたが、娘達は唯だ左様かくとて互に顔見合してニヤ／＼笑ひ、晩までも休んで居りさうなので、五十男は根氣負けて行つた▲記者は傍人の騒々しいに拘らず、仰臥して居る間に何時か華胥の國へ遊んだ、起きて見れば三時なので、ラム子一

個クイと呑んで俄に飛び出した▲磨鍼嶺は近道で眺望も好いさうぢやが、今は人通りが無く路が草深くなつて居るゲナ、記者は米原へ寄つて東京の新聞を観るに及かずと思つて少し廻路した、青天白日堂々と米原停車場へ入つたのは可かつたが、新聞は萬朝、時事などの外は大抵京阪のであつた、失望して餘儀なく萬朝と京都新聞を買ひ、ポケットへ入れ、又堂々として停車場を出て去つた▲流車に乗つた人で米原てふ大停車場を知らぬは無からう、而も米原は入江村の一部分たるとは、江州人の外に知つてゐる人が極めて稀である、

七月廿三日

江州八幡町

木屋萬にて

昨夜泊つた樂々園は、出發以來の宿屋中で一番立派であるが、前町長の送別會と云ふものゝ開かれたので九時半までの騒々しさは一方ひよかたでなく、又十一時過ぎまで第二次會で騒々しかつた、のみならず同志社の學生五六人が、來月のポートレースの練習を遣りに來て、隣室へ泊つて居たのが、今日の午前二時から大聲談笑と來た、旅に慣れた記

者は、此騒動の中にも先づ善く寝た方ぢやが、他の旅客は大に眩いっせやいて居つた▲日外の我二六紙上に聳の話があつたが、同志社の學生も頻りに聳の話をして居た、庄屋が近頃聳を生したさうぢやが、如何な顔になつたか見たいナア、彼の男は如何も穢せない男ぢやつたが、近頃は少々ハイカラらしくなつて存外清潔ぢやさうナ、彼の男が宿屋へ掛合に行くのは面白かつた、シャツ一枚では宿屋が相手にせぬと云ふので、ピクを借せくと幾つもピクを提げて己れはポート遊あそびに來たから斯こ様な服装ぢやが、何も怪しい者ぢやないぞと防禦線を張りよつたナア、とは新聞記者某氏に關する噂ぢやつた▲樂々園は直に前が金龜城で、鬱々蒼々たる中に粉壁の籬せきえて居るのはチョット美觀ぢやが城が餘り高くないので引立たぬ、今朝樂々園を出てチョット右に折れ、橋を渡つて城山へ登つたが、路の勾配は急であるが高くないので間もなく城の下へ着いた、此處に小さな茶店があつて小娘がラム子の饅まんじや水菓子や駄菓子だ菓子を列べた脇へ城を始め名所の寫眞を積んで賣つて居る、彼は記者をして草鞋を脱がしめ草履を穿かしめ、「御天主へ上んなはつたら、窓を開あくとくれやす、開けなはつて其儘まにしとくれやす」とて記

者を窓あけ役に使ふた▲記者は城へ上つて小娘の言ふ通り幾つかの窓を開けて四方を眺める中に、井伊大老が櫻田門外に横死した當時を追憶して無限の感慨を生じた、成程彼は或論者の言ふ通り外國に迫られて餘儀なく開港したのであらう、薩長の志士は政略上から攘夷を唱和した者があつたらうが、國を開いた井伊は横死して彦根の遺老は今に芽が出ないで居るのに、薩長其他の攘夷家及び其子孫は天下に横行闊歩して居るでは無いか、近頃久里濱に建てられたヘルリの記念碑は涙を垂れて居りはせぬか▲感慨の方が先だつたので、磯山以南の入江及び城南遠く開けて、豆人寸馬の好景も臙氣おぼろげであつた、併し城だけはハッキリ頭腦に遺つて居る、三十五万石の城としては小さい我二六新報社より一階高のだけぢや▲本日經過したのは、福満、日夏、稻枝、八幡、安土、金山の諸村で朝鮮人街道と云ふのぢや、能登川停車場は八幡村大字垣見に在る、八幡安土間の小さな坂を越えると、二名の刑事巡査が呼び留めて尋問したが、ア、二六新聞ですか、實は此頃ウロンな者が徘徊するので、君の服装に疑を抱いたので、これは失禮でしたと謝した、

七月廿四日

江州瀬田町

鳥屋にて

昨夜は宿屋二軒で断られて木屋萬は三軒目ぢやつた、禪一つで下男同様に働いてる亭主がス、キ水を汲て来て、洗いでだしたら彼の灯のともつとる座敷へと言ひ捨てに荷物を持って行かうともしない記者は其座敷へ行つたが、先客の荷物があつて薄平な穢ソナバい座布団が二枚ある、ソコで奥の方の座敷へ通らうとしたが、其處にも客が居る、記者がドギマギしていると、亭主が一人別てなうては悪わるぢすかと、臺所から遙かに尋ねた、記者が頷くと、入口の道路の側の最劣等の座敷へ案内した▲家中が烟でケムくて暑くて耐らぬから、道路の方の障子を開けた處が、蚊が來よる困つて暑うても閉めとくれやす』と言つた▲懸て穢らしい湯に入つて來ると、例の禪一つの亭主が膳を持って來た、禪一つで給仕をするだらうかと思つて居たら、すばらしい美人が來た、少くとも板額以上の美人で、禪一つの亭主と相撲を取らせると好い取組ぢやと思はれた▲今日は岡山、此里、祇王、野洲、守山、物部、大寶、草津、老上等の町村を通過したが、物部

村は守屋の後裔にして海舟翁の先祖が代々住んだ所さうな▲野洲から氷店があつて守山、草津には三四丁に一軒の割合に氷店がある、其の旗は中が白で縁が赤で、文字が藍で、氷てふ大文字の下に龍紋氷室、若くは木村氷室としてある、記者は却々の衛生家で容易に氷を食はないが、氷片を手拭に包み頭へ結付けて歩くと、日中でも歩き得らるゝので、爾うして歩くことにした、爾うして歩きつゝ氷囊付帽子を發明して專賣特許を願ひ出やうか杯と考へて居た、ナント暢氣なものぢや無いか▲江州では女が盤盞を擔いて鯉鮒など賣て歩く、これには却々の美人が多い、川魚だけに無鹽以上の美人が多い、この魚賣美人に一人のキ印があつて、或る店先で弄はれて居つた、彼は弄はれるのが嬉しいのか、「醜い女と火のない炬燵誰も手を出す人がない」「醜い女と二階の雨戸何と思ふても縁がない」と唄ひつゝ、アハ、く〜と正躰なく笑つて居た▲江州人は草鞋を穿かないで、紙巻草履を穿いて歩く、これは人の家へ行つて上るに便、時々足袋の埃をハタクに便、草鞋より長く持つので徳用ぢやからとの事▲野洲から草津までの間に藍を干した家が多かつた、干草の臭ひは爾うイヤでもないが干藍の臭ひは耐らない

守山草津間の大寶村に大寶神社と云ふがあつて、杉木立が鬱々として居る、此神社の拜殿で少し晝寝しやうとしたが、少しウトウトしたばかりで善く眠れなかつた▲犬上橋、八幡橋、野洲川橋等何れも嘗て瀛車中で幾度も見て、一度は彼の橋を歩いて見たい杯と思つたところがある、昨今兩日この大希望を遂げた、

七月廿五日

京都

三條小橋吉岡家にて

瀬田の唐橋唐金擬寶珠、水に映るは膳所の城、とは記者が幼時聞き慣れた參宮歌で、楷書的の鐵橋とは違ひ、草書的の長橋か琵琶湖の狭まつて緩かに流れ始めたる碧瑠璃に架られてあるので、曉色も佳く暮色も佳く、月に雪に雨に趣致を添ふるのは、此邊の景である▲瀬田橋の東詰に、宮内省御用瀬田川鱧漁獲取締所と云ふがある、醜の字は何と訓むのであらうかと首を傾けたが、聖上の御幼時より嗜まれた「ひがし」と云ふ魚であると後で聞いた、落合直文氏も此字を讀み得ざつたさうで、落合先生が鱧を能う讀まんでふとがあるかと笑はれたが、併し此字は滋賀縣廳で製つた字なんて、近江

山城二ヶ國の人の外は、讀み得ない人が多からうとの事▲琵琶湖畔は米の産地なると言ふ迄もないが、近江米検査所輸出米検査所などの看板掛けた家を多く見受けた▲草津警察署の立關の向ふ側に標柱があつて、各地への里程が書いてある、其中に「草津警察署へ五間」と書いたのは大笑ひぢや▲河島知事に會ひたいとは思つたが、シヤツ一枚で汗がダラ／＼流れるのに上衣など着られた譯のものでない、残念ながら止めて置いた、從來の知事などは、滅多に演説することもなく新聞に投書して意見を發表すると云ふとも無かつたが、河島知事はこれを遣るので却々評判が好い、▲書記官柳原以徳氏は官吏は威嚴を要す人民と親めば威嚴を損すと云ふ持論ぢやさうな、湯淺參事官は角力が好きぢやゲナ、

七月廿六日 京都 三條小橋龜屋にて

京都へ來ても、まだ少し江州の事を言はねばならぬ、彦根は士族の町で大津は商人の町ぢや、彦根は古い名家の機で頗る詩趣に饒て居るが、大津は生氣潑々として新興の

家の様ぢや、八幡瀬田などは十里以内の人だけが通行する處でもあらう歟、殆んど遠人を理解する腦力が無い、新聞をロク／＼讀まぬから四五里隔たつた處の新事件を知らない▲人國記と云ふ本に近江を評して『是國は半佞國と知るべし、佞人は必ず利根利發利口にして、言舌は賢人にも劣ることなし、吾愚にして賢佞を知るべきやうなし、唯善惡言行を察して之を知るべきなり』と言つてあるが、これは近江の一小部分に當て簾るかも知れぬが、今日の近江は爾うでない▲瀬田の雙橋亭で泊らうとした所が一人ではとて斷つた、それでは何處が善いかと問へば鳥金が宜らうと教へた、仕方なしに鳥金へ泊つたが、昨朝歩きながら見ると可なりの宿屋が二軒あつた、大々の贅澤旅行をしつゝある記者を木賃宿同様の鳥金へ案内するとは氣の利かぬにも程のあつたものぢや、呵々▲八幡や瀬田で悪い宿屋に泊つた代りに、京都へ來て三條小橋吉岡家へ泊つたので、流に沿ふた清涼な座敷へ迎へられて歡待された▲本日は府廳へ出て證明を請ひ京都新聞社諸君に西洋料理店東洋亭へ伴はれて晝餐を喫した▲廳で大森鶴雄氏に伴はれて、糺が森の加茂神社へ参り、鬱蒼たる林中にて清水に足を浸したが、足

に痛みを感じるほどの冷かざであつた▲加茂神社境内の潤葉樹は、何時の間にか狗骨樹と化するとて京都人は皆不思議がつて居る、記者も現に椿の狗骨樹化したと云ふのを見た▲今夜は京都新聞社主堀江純吉氏に招かれて、圓山公園中村家に晚餐を喫した、淺見高達氏、大森鶴雄氏と共に、

七月廿七日

京都嵐山

三軒家にて

今朝は客と話したり、諸方へ出す手紙を書たり、種々な事て手間取で、十一時近くなつて仕舞た、龜屋の主人が晝食をと言ふを顧みず、丹波行を急ぐ記者は早々制服を着け草鞋を穿き、主人に送られて蛸薬師の立志堂へ行つた▲立志堂主人谷口貞次郎氏は、我々徒歩旅行者の爲に態々徒歩旅行記念封筒と云ふものを製つて贈られた人ぢやが洋紙店篠田信作氏と共に、記者を大成館と云ふのへ伴はれた、大成館と云へばチヨツト神田あたりの私塾か書肆の様に聞えるが、西洋料理屋なんてある▲晝餐を食て居る中に、先斗町の美人が遣つて來た、鳴子、一二、鶴子と云ふのぢやさうて、互に競争し

て林檎や巴旦杏の皮を長くく剥いた、我々が徒歩に於ける競争の如く▲應て記者は兩氏に送られて三條通りをズン／＼／＼西へ遣つて來た、太秦村で廣隆寺と云ふのを見たが、聖德太子千三百年祭云々の立札があつた▲山の内であつたか、親鸞聖人御往生の地と云ふ碑が立つてる▲嵐山とは云へ今居る三軒家は桂川の北岸に在つて、嵯峨と云ふ處なんである、桂川が嵐山の麓を流れてるのは、丁度岐阜に於ける長柄川が稻葉山の麓を流れてる様ぢや、爾うして桂川は長柄川と同じく鮎を産するのに、彼に鶺鴒あつて此になきは遺憾である▲半輪の月が嵐山の上から桂川の流を瞰き、中斷したる吐月橋のあたり、渡舟が往來してるなど却々面白い景ぢや▲京都美人の「あす」も「ん」も聞き飽いたさかい、明日は丹波語を研究して來まほ、

七月廿八日

丹波王子

山家屋にて

今朝嵐山の三軒家を出る時丹波山本へ出るべき二筋の路を聞いた、其一筋は桂川の左岸によつて行く路、他の一筋は鐵道線路によつて行く路ぢや▲所が桂川による路は、

滅多に人通りが無いので荒廢して通れない、鐵道線路は隧道があつて通れない、土地の人は隧道の中を通るさうぢやが、我々の如き憶病者には通れない、命を知る者は巖壁の下に立たずの訓言を守つて居る▲ソコで愛宕山の鳥居を左へ取つて、幾つかの坂を越え、愛宕道と云ふ石標を二つまで見た、鳥居が正面の登り口、それから一つの愛宕道は側面の登り口、モ一つの愛宕道は裏面の登り口である▲此裏面の登り口で、「すくあなう道」と云ふ小さな立石を發見した、此處を西南へ下らねば、龜岡へも山本へも行けないと考へて、メン／＼下り始めた、溪流は西南へ流れて居る、今までは溪流に逆つて來た身が、今は溪流に順つて歩くのぢやから、人里へ出るに相違ないと安心した▲安心すると同時に、俄に空腹を感じて來た、苺か何かありさうなものぢやと見廻すけれども、何時も柳の下に鱈の居る譯はなく、何時も路傍に苺のある譯は無い、ソコで江州の稻部で飲み残した白葡萄酒を吸筒から錫盃について三四杯飲んだ、微温くなつて居たが、餘程甘かつた▲「あなう道」てふ立石より一里半も歩くと里へ出た、これは保津村ぢや、寺があつて、丹波國南桑田郡保津村第二百九番戸臨濟宗文覺寺てふ標

札が門の右手の柱に掲げられ、赤十字社正社員桂文切てふ貼紙が左手の柱に見えた、此の村には桂、村上と云ふ苗字が幾つもある▲此邊で飯を食はせる様な家があるかと百姓の息子に尋ねた、スルト彼は首を傾けて考へて居た、「兵隊に出た彼の友さんナ、彼の家の叔母さんなら賣つてやろも知れん」と宛然記者が其友さんを知つてる者かのやうに答へた、ソコで其友さんの家へ行つたが飯はない、龜岡迄最早半里ぢやによつて彼處へ行て御食べやすとの事、記者は腹が減て迎も歩けぬから、炊て貰ひたいと言つたが、お連さんがあれば炊きますが、お一人では炊いた所が……と澁つて居る、ナニ一升ぐらゐの飯は食つて見せると言つたが、アハ、と笑つて居る、仕方なしに茶を飲んで出た▲龜岡へ着いたのは三時半、氷屋と飯屋を兼ねて居る家で、先づ氷を飲んで渴を醫し、蠅厨に並べてある鮎の鹽焼て飯を食つた▲龜岡では、桑酒、櫻酒などの看板を到る處に見る、併し飲んで見やうとは思はない、何だか粗い物のやうに思はれて▲龜岡で少し早いと思つたので、三四里ぐらゐは歩かうとて、出掛けて見たが王子まで來て日が暮れた、是から老坂へかゝるのであるから、破れ宿屋の老婦が「お休みや

すモーお仕舞ひやす」と云ふを相圖に泊るとになつた。

七月廿九日

京都

三條小橋龜屋にて

昨夜泊つた王子は篠村の一部なんて、篠村は姪殺て有名になつた松井敏太郎の郷里である▲山家屋の主人が、唐突に松井騒動云々と語るから何を言ふかと耳を傾けた所が、龜岡で松井夫婦姪殺しの芝居を打つた時の話ぢや、彼が又言ふには、松井は醫者の息子で十五の年に東京へ飛出しました、餘り出世し過ぎたに依て彼様な事になつたのでしやう▲王子には郵便函がないので、記者は昨夜の紀行をポケットへ入れて檜原まで持つて来た、檜原はロク／＼宿屋もないやうな處ぢやが、丹波街道の咽喉に當るので、昔は有名な地であつたさうな▲昨夜、湯に浴してから浴衣を貸して呉れと言つたら、暫く簞笥など搜して居つたが、應て亭主の曠衣はれぎとも謂ふべき紺飛白を出して来た、記者はそれを着て坐るに一個月前の我が服装が懐しく爲り、今の暑苦しい汗臭い服装はまだ二個月以上此の身を離れないかと歎じた、斯う言ふと記者が大層愚痴を言ふ様ぢやが

囚入てさへ五日に一度は洗濯して貰ふのに、徒歩旅行記者は何時までも汗臭い衣物を着て居るのぢや、汗とりシャツとズボン下は二三度洗濯して貰つたが、其他は一度も洗濯しない、餘り我々の境遇を氣樂さうに言つて、まだ此上に木賃宿に泊れ、紀行を精細にせよ杯と注文する向があるから、斯様な愚痴を言ふ様にもなるのぢや▲哲學者や美術家の住むには、京都は實に好い處ぢや、安藤仲太郎氏の如きは京都へ入るとノウ／＼して精神が沈着くと言つてるさうな▲畫家が毎年叡山を畫きに來て失敗する、彼の禿げた處を如何云ふ色で畫けば可いのか、誰が畫いても禿げた處だけが近くなつて他の部分に釣合はないと、京都新聞記者大森君の話、

七月三十日

城州玉水

酒太にて

京都を去るに臨んで、記者が深く感謝するのは京都新聞社、京都日々新聞社の諸君が記者を歡待せられた事、旅館吉岡家(釘拔亭)が一泊せしめ、龜屋が二泊せしめた事ぢや▲龜屋主人は、尚櫻湯てふ京都第一の湯屋と菊水てふ涼棚料理へ記者を連れて行つた、

京都湯屋の規模の大なる、男湯にも女湯にも二個の大浴槽あつて、四方より入れる様に出来、一時に百人の客が来ても綽々として餘裕ある勢ひぢや、而も二階を造らないのは京都人の儉約主義に投じたもので、若し二階を造れば外見の爲めに錢を費ふのを嫌つて、客足が減つて仕舞ふからぢや▲今朝京都を立つて来たが、稻荷神社へ參つて置いた、從來汽車が稻荷停車場へ着く毎に、京都人が拍手して拜て居るのを見て、其境内は如何其靈驗は如何など考へたのがあつたが、今日其境内だけを知り得た、鳥居から樓門まで爪先上りになる二丁ばかりの敷石の立派なと、樓門の大鏡が金毛九尾を映出しさうなと、何れも人を驚かすに足るものぢや、記者は洗淨水盤の上に吸筒を置つて居たが顔洗つてる間に吸筒は落ちて一部破損した、大阪へ着いたら嚮を買はうと思つて居る▲伏見の墨染町、撞木町は言ふまでもなく色町で、撞木町は大星由良之助が通つた以來、遠邇に名を轟かしたが、今は寂れて居る▲伏見の觀月橋は、其名の通り觀月には宜ささうぢや、觀月橋から四五丁歩くと、一老爺が後から、今朝五條でも見かけ申したがと挨拶し、記者の鞆を自分の荷の片荷にして持つて呉れた、彼は獨り者

で旅行が好きで、東海道中山道を踏破したさうで、浦島太郎の寢覺の床を見さつたことを大遺憾として話した▲長池の町外れに、砂利(道普請の爲めに盛つて未だ散布しない)に腰掛け休んでる小間物屋らしい四十女があつた、老爺と面識ありと見えて二三語交へたが、『汽車に乗り後れてケツタ糞が悪いさかい休んでますんや』と言つた▲寺田村と云ふのを右に見て通つたが、此村は京都府下第一の大村さうで、二十万圓の地價を少したりとも借金の抵當などに渡して居らぬは此村だけさうな▲此あたりの村々西の方木津川に至るまで、梨を作ると非常なもので、大森邊の梨畑も三舍を避くるほどぢや、爾うして低地に梨を作ると同時に、山に近き高地には巴旦杏を作つて居る、其赤く美しく熟してる様、果物好をして流涎三尺ならしむるに足るのである▲多賀村で老爺の住てる法華寺眞藏院へ立寄た、茶を出したのは住職の妾で表面雇女となつて居る者と見え、老爺は此處の寺男である、記者は須原の宿屋で買った花漬と寢覺床の繪を老爺に遣つたが、彼は限なく喜んだ▲老爺と別れて半里歩き、此處の宿屋へ着たが、停車場へ電報打ちに行き、歸つて飯食つて居ると電信取扱人が来て、奈良線に故

障あり明日でなければ通じましますまいと言つた、

七月卅一日

城州笠置

笠置館にて

今朝、玉水の宿屋を立つとき、遅くなつたのを咥つばいて居たところへ、草鞋の紐の通してないのが殊更癢に觸つた、ソコで罪もない雇女に向つて、此邊の草鞋は紐が通してないから困ると言つた、所が雇女は『茶代も置かぬ癖に』と言はねばかりの顔色で、へエゐんたの方の草鞋は通しておすかと言つた▲京都に美人が多いか如何かは疑問であるが、京都の女は確に智慧がある、大阪の男子は一體に抜目は無いが、餘り露骨に利害問題を口にする、大阪婦人は幾分か男子化して居るから、男子と同じく露骨な點があるが、京都婦人は利害問題を口にしないで實行するに最も敏なるものぢや、旅館の細君などは殊に智慧が多い▲今日は曇つて微風のあるのに、木津川の岸ばかり歩いたから殊に涼しかった、棚倉、高麗、上狛、瓶原諸村を経て當笠置に来るまで土手傳ひぢやつた、尤も晝飯は上狛から泉橋を越えて木津で食つた▲木津では、住吉祭ぢやと

云ふとて、松の枝を軒に挿み、紅提灯を吊して、魚屋が多勢出入して居た、内ぢや鶯ウを買ふたさかい魚は不用、鶯ウなんか食たら腹が下りよる云々は、亭主と魚屋の押問答▲木津川は軟沙の上を清流がうねつて居るのぢやが、笠置あたりになると巨石が水中に見えて居る▲舟の中からオーイ／＼木津行ぢや無いかなどと叫ぶ、記者は舟に乗らぬのぢやと大聲で答へた▲笠置では笠置館の外に旅館は無と言つて可い位ぢや、温泉があつて、有市ウの源泉を樽で取り寄せるのである、此邊では温泉々々と言つて笠置館と言ふ者は殆んど無い▲此家の座敷に榎嶺（幸野）の額が掛つてゐるが大きな鯰が仰向になつて水上に浮んでゐる、其腹に猫が赤い衣服着て長煙管を啣て居る、二筋の長い髯を犬が笠被つて曳て行く、實に抱腹絶倒に價する奇畫ぢや、

八月一日

伊賀上野

花月にて

今朝早起して笠置山へ登つた、僅か八丁の山ぢやが、勾配は急な方である、寺に就て寶物など見たならば、種々面白い物があらうと思つたが、手間取るのを恐れて見づつ

た▲畿内には名山が多いが、恐らくは此笠置山ほど巨巖大石の多い山はなからう、上州の妙義、甲州の御嶽のやうな石門は無いが、空に盤まつて人の頭上に墜ち來らんとする巨巖、其重量幾萬貫あるかを知らないが、若し彼の巖が墜ち來るとすれば、我は鐵槌で潰さるゝ蟻どころぢや無いと、唯だ驚心駭目の外はなかつた▲日昇つて後、木津川上流の水蒸氣が東風に吹かれ、濛々として笠置に迫り來つたので、其奇觀名狀すべからず、冷然として頬に觸るゝなど一種の快感があつた▲後醍醐天皇行在所の跡は立派な石構へとなつて今は幾多の參詣者を額かしむるのであるが、當年を追懷すれば一として涙の種ならざるは無い▲元弘戦死義士の名を刻してある巨石は、震災の爲めに顛覆して表面が地に伏し、藤葛などが後から纏ふて居る、之を起すには幾百の人夫を要するであらう▲笠置館の雇女は、京都龜屋の主人を善く知つて居る、龜屋の主人が抜目のないと彼は感歎して居たが、笠置館主人の不在ぢやつたに拘らず、記者の宿泊料一圓を奉納して仕舞つたのは、彼が蘇張の辯を揮つて主人筋へ説いたのであらう▲併し記者はこれが爲めに出發以來最も苦しい經驗をした、温泉論を半ば書た所で、宿、

泊料奉納と來たので、硬骨な記者も聊か氣の毒の感なきを得ない、ソコで通信の書直を遣つた▲咄、樂天僅か一回で軟化したかと、例の通り二十四錢の參政權を揮廻して、宛然肥者が温泉破壊黨より温泉隨喜黨とでもなつた様に彈劾する先生があるかも知れない、あつても宜しい、世の中は野次馬で持つたものぢや▲今日十時に立つて出掛けたが、昨日の曇つて涼しかつたに引換へて焦げる様に暑かつた、休憩して二三丁歩く間だけは可いが、それ以上になると最早汗がダラリ／＼▲耐雨帽は時々水に浸して居るが暑さが強いのでビチビチ干割て歪んで來た▲北大河原で晝飯を食つたが、鯉節を鮑屑の様に削つたのと胡瓜揉であつた、飲食店は一體に美濃近江より少し高い▲鳥ヶ原に休憩した所が、其家に三十二三の若者があつて利た風なことを言つて居る、ソコで記者は彼を試験する氣もなかつたが、上野から出た高見照陽の事を問ふた、スルト先生京都へ行かはつた早見さんてしやうと言つて居る、所が傍に居た近所の老爺や母親が、高見さんと云ふ方があつたと辯じた、若者はイヤ高見さんぢや無い早見さんぢやと抗辯して居る、記者は京都では無く大阪ぢやつたと言ふと、老人等左様／＼と應じ、若

者の旗色悪くなつて餘儀なく降参した▲當地へ着て先づ伊賀日報社を訪ふたが、外から錠が卸してある、向ふ隣で問へば今日は休刊との事、

八月二日

城州有市

攝生亭にて

昨夜の宿屋花月の座敷に「坐醉」の二字を大書した扁額があつて、筆者は誰ぞと近り觀れば櫻癡居士源とあつた、これは先年櫻癡居士が月瀬か何處かへ來て此家へ泊つた時書いて貰つたので、此家の主人は教導團出身の軍人ぢやつたが道樂肌で遂に料理屋兼宿屋を開業したのぢやゲナ▲此家で宿泊簿を調べた所が下村爲山、松瀬青々、青木月兎諸氏の名が三月中旬のあたりに付て居る、月瀬觀梅の歸路の宿泊と見えるが、人力車で送り込れたのであらう、炎天を徒歩しつゝある記者の眼からは憐れなものと言ひたいが羨ましいと言ふの外は無い▲東京上野の公園は、伊賀上野の公園を手本にして、其規模を大にしたものさうナが、記者は手本の方を觀る暇がなかつた▲今夜も上野で泊れと勧められたが、明午前中に奈良縣廳へ行かねば、證明を請ふに不都合なので辭

した、明後日は日曜ぢやから▲松尾芭蕉が其主藤堂采女正の爲めに自ら責を引て上野を去る時踏み出した庭は山内氏の裏庭の更に裏に在るので、新七屋敷と謂ふのであるゲナ▲この新七屋敷に芭蕉の盤桓したか自ら植ゑたかした松があつたが近年伐つて仕舞つたさうナ▲伊賀は小國だけに、古來人物の出たのは少いが、決して飛騨や隱岐の比ぢや無い、松尾芭蕉も出た、荒木又右衛門も出た、石川五右衛門も出た、近い所では高見照陽、中内樸堂等は拙堂門下の錚々として著れ、法學博士仁保龜松、農學士加藤末郎諸氏も出て居る▲昨日は仁保法學博士の爲めに、有志者が宴會を催したさうて、餘程盛會であつたらしい▲地僻警官尊も可いが、旅費の出處を疑ふらしい調子で「旅費は社から出すのか」など訊問するのは、月瀬が近いだけに仙人界の警官かとも思はれる▲月瀬と云へば、平生寂寞として客なく、唯だ梅花時節のみ人が出盛るのぢやが、一年の生活費を一時に儲けんとして、殆んど剝取同様の事をする者がある、現に今春東京の華族某の夫人令嬢等が家扶か家令を伴に拉れて梅見に來り宿泊した時は別に大した料理をした譯でもないのに六十圓とか要求したゲナ、伊賀日報の如きは大に筆誅した

さうぢやから、追々改善するであらう▲伊賀には天理教の信者が多いと見えて、上野にも島ヶ原にも神道直轄天理教會分教所と云ふ立派な建築物がある▲建築物と云へば、伊賀の藁家は、側面より見れば正三角形若くは鋭三角形である、

八月三日

大和奈良

對山樓にて

記者の前便を書き了るや、雇女に此家は何と云ふ家かと問ふた、彼は岡本……と答へた、記者は更に屋號を何と云ふかと問ふた、スルト彼は逡巡して、何屋てあすか、あゝセツセーテイとか申します、如何な字を書くかと問へば、彼は笑ひながら能う存じませんとて下つた▲罷り出てたるは、本家の主人にて候、彼は恭しく一禮し、唯今屋號を御尋ねになりましたさうてあすが、私方は攝生亭と申します、記者は通信するのに屋號を書ねばならぬから……彼は新聞に御書きになりますか、抑も私方は炭酸泉の本源いよとして、笠置温泉に御出てになつた方が入り直しに見える位であす、何分宜しうお願ひ申しますとて、例の通り宿泊料奉納と來た▲晩の鮎が少し古かつた様にも思つ

たが、空腹であつた記者には能くも判らざつた、夜半から少し腹痛の氣味で下痢を催した、晝餐の天麩羅が悪かつたか、それにしては時間が経ち過ぎて居る、何にしても日中九十度前後の地を徒歩してゐるのぢやから、暑氣あたり位はあらう、一兩日の中に天が大雨を降して炎塵を鎮めたらば兎も角、此分では一週間以内に白旗を立てねばならぬ哩、敵は名にしおふ強壯の若者、剩へ温度の十度も十五度も低い地を歩いて居るのぢや▲今朝は炭酸泉の湧き出る處を探討した、木津川の中に宛然木曾川の寢覺床の様に、高低起伏一様ならぬ廣い大きい石底の處がある、其の一小部分に絶えず湧出する炭酸水があつて、二疊敷ばかりの石圍ひがしてある、案内者は柄杓にてコップへ汲み取り記者に渡したが、試みに飲んで見ると神戸に於ける平野水と似寄つた味であつた、此近所にラム子製造所があるが、此炭酸泉で製造するラム子ぢやさうな、兎に角便利重寶なものを發見したものである、有市から加茂までの間で、幾度か下痢を催しさうであつたが成るべく辛抱した、一度だけ加茂近くの百姓家へ入り廁を借りた、加茂の中間に長橋が架られて恭仁橋と云ふのぢや、橋の向ふの山に倚つた涼しげに見ゆる旗の

立つた料理屋が見えたので、二三時間休む積りで行つた、幸ひ湯があつたから一浴してラムネ三個を倒して晝飯食つた、仰臥して大阪朝日新聞を見て居るうちに黒甜郷に遊んで、覺めた時丁度三時を聞いた、下痢の氣味が失せたのは誠に難有い仕合である

▲纏て四時を聞いて又ラムネ二個を飲み、涼しい川風に吹かれつゝ土手傳ひに木津へ来て、最早日は暮れたが寂しいながら奈良までは廣い路と信じてるので遣つて來た、東包永町で、大和新聞の小説記者西村無藥氏を尋ねた時は、八時過ぎぢやつたが、同氏は病中なるに拘らず、懇篤に待遇され、妹君をして此家まで送られた、此家には岡倉覺三、小杉楳郎、高村光雲諸氏が先月二十七日から宿泊して居る▲此家の主人は記者が宿泊簿に東京市神田區通新石町二六新報社内とばかり書いたのを見て、雇女をして番地を書いて戴きたいと申込んだ、記者は癢に觸つたから役人は役の名だけ書いてるぢや無いか、東京二六新報と云へば判ると、呑牛が仙臺の電信局で遣つた模型を其儘▲到る處休憩する毎に、神佛に御祈願あつても歩きになりますかと問ふのぢや、記者は五月蠅から左様ですく／＼と押し通した▲瓶原の小店に「口述、一借賣之儀は殿方に

に不限一切御断り申上候」と書いた貼紙があつた、女でも油断は出來ぬと見える哩▲山城伊賀の境には從是西、京都府管轄てふ大きな木標と、從是東、伊賀國（明治十九年三月三重縣と側面に見ゆ）てふ小さな石標がある、上は鐵道が高く通じ、一丁ほど前に小山を控へて青田であるが、一尺ほどの畦が國境である、

八月四日

大和奈良

赤堀自助氏方にて

西村無藥氏の紹介で東南院管長佐保山晋圓師を訪ふたが、師は暑氣に中てられ臥蓐中なので、清水某氏に逢つて東大寺大佛の壇上まで仔細に觀るとが出來た▲大佛の大は今更言ふだけ野暮ぢやが、西藏や蒙古にこれより大きいのがあるか如何かチヨット信じ難い、但だ平國衡及松永久秀の兵燹に罹つて鎔解した後の再製品たるを聞ては、大に興の醒める次第ぢや▲東大寺は元祿年間に松永久秀兵燹後の建築に大修覆を加へたものさうだが、來る明治三十六年より向ふ八九年を期して又々大修覆を加へるとの事である▲正倉院は奏任官以上でなければ見せないと言つて居たが、最早勅任官以上でな

けりや見せないと云ふとする筈とか、何故百圓以上納めなければ見せないと云ふ事にしないだらう▲春日山の鬱々森々として晝尙ほ暗いばかりに茂つて居るのは、笠置山の巨巖大石に充されて居るのと一幅對て、近畿に於て實に稀なものである、笠置の方は地質學者でなければチョット説明が出来ないが、春日山は素人にも説明が出来る▲昔からの言ひ傳へに、春日山へ參つた者が、其歸りに草履の裏へ松葉杉葉などを付け來て、それが籠の中で焚かれたならば、無意識の過誤であらうとも目が潰れると云ふのである、迷信が政略を生んだのか、政略が迷信を生んだのか、チョット判断に苦むのであるが、盗伐など云ふとは思ひも寄らぬので、斯くよでも鬱茂して居るとの話▲春日山を始め、其西麓一體を總て奈良公園の範圍として居るのぢやから、全國第一の大公園と謂つても差支なからう▲三笠山は春日山の一部を云ふので、手向山若草山など何れも春日山の手前を稍北に倚り、青松の影は綠草の上を撫てゝ居ると云ふやうな至極優美な山である、安倍仲麿や菅家の名歌は、無風流な記者が此に引くまでもなく讀者諸君先刻御承知の御事▲先日記者が泊つた玉水村は、大字井手なんて、井手の

玉川とて蛙の名所ぢや、井手左大臣橘諸兄夫婦の墓があるさうナ、其を見ざつたは残念である▲今日は西村無藥氏が晝餐を饗せられ、奈良新聞社主赤堀自助氏か晚餐を饗せられた、奈良の料理を代表すると云なる茉莉亭(松屋利七)から歸つて赤堀氏へ泊つて仕舞つた▲今日は日曜で縣廳も市役所もダメ、明朝「新大和」の社を訪問して、それから縣廳へ行くのぢや、縣廳と云へば、奈良縣廳の高等官は鹿兒島縣人と宮崎縣人ばかりさうナ▲赤堀氏が唐突に『對山樓は親類筋でなけりや泊らぬ、君も親類筋か』と言ふから、何の事かと反問すると、伊藤西郷を始め所謂貴顯紳士の彼家へ泊るのは、皆彼家の娘分おキミ、おツギに關係がある、之を親類筋と云ふのぢやとの答▲對山樓の宿泊簿は絹表紙で立派なものぢやが、所謂親類筋内務大臣西郷從道、内務書記官水野鍊太郎外三名が第一頁を汚して居る、可笑いのは無職業柴田家門と昨年六月あたりの頁に見えてる事ぢや、

八月五日

大和國山邊郡長柄

旅行會にて

片石寸土も歴史を持って居る奈良に於て、所謂名所舊跡を探らうならば、二個月三個月乃至半年かゝつても探り了れない、記者は一日二日の日數で其一斑を探つて見やう杯の客氣を出すやうな大馬鹿でなく、老成着實の君子なんぢや▲名所舊跡どころか新聞記者として一瞥して置いても可い木辻(遊廓)を見せやうと云ふ赤堀君の好意をさへ斥けた、茉莉亭の玄關で女中が「恐いと見えて逃げてだすナ」と笑つたのを覚えて居るが、記者は固より赤堀君が酔に乗じて記者を妓樓へ引張り込む杯の掛念は無かつた、只だ紀行を書かねばならぬと云ふだけが氣掛りて▲遊廓と云へば娼妓の自由廢業は奈良が本家本元である、奈良から名古屋の妓樓へ抱へられた娼妓が自由廢業して、其後奈良にも自由廢業が多かつた▲今朝、奈良縣廳へ山頭して通過證明を請ひ、旅館對山樓へ行つて洗濯物を受取り一昨夜の拂ひをした▲西村無藥氏方へ行つて、病中に拘らず周旋盡力された禮を述べ、赤堀氏方へ歸つて西洋料理を食つた、これは朝食なのぢやが記者が處々方々て手間取つた爲めに十一時近く終に晝餐となつて仕舞つた、此時の記者は脚絆と草鞋を着けて居たので上るとを斷り臺所で椅子に掛けて食つた、赤堀氏曰く「臺

所へも客様を招ずるは開關以來始めてぢや」▲昨日は日曜ぢやつたので逢ひ得ざつた奈良新聞主筆安藤君に逢ひ、藤田君に送られて新大和社へ行つたが岡本西川二氏とも居られないので直に辭し去つた、新大和社のみならず奈良の都をも辭し去つた、▲帶解村で一休したが、暑い家で善く眠れなかつた、氷を頭に結付けて、襟本いすのまもとまで歩き、ラム子を飲んでカバンを褒められた、カバンを褒めるのが江州からコチラへのお定りぢや▲丹波市で丹波市銀行の支配人飯田眞次氏を訪ふたが居られない、此人が長柄旅行會の會長ぢやと聞いて居たから不在と聞いて失望したが、他に長柄の方が居られるかと問ひ守田伴太郎氏に逢つた▲記者が長柄に着いて間もなく守田氏と永會義漢氏歸られ會長飯田眞次氏親類先から歸られた、

八月六日

大和國山邊郡長柄

旅行會にて

昨夜も今夜も宿泊する家は旅行會の集會所なる孤亭である、此處は旅行會長飯田眞次氏の別荘と謂つても可いので、飯田氏方へ電話機が掛つて居る、交換局不用の電話が

ある、飯田氏は毎夜此處に泊るのぢやが、昨夜と今夜は記者が飯田氏の代理を務めるのである▲今朝旅行會の諸君が約を履んで來られ、記者を桃ノ尾瀑布へ伴れて行かれた、婦人が二名雜つたが、何れも健脚で都會婦人の企及し難い所、否都會男子の企及し難い所である▲或は田の畦を通り、或は山の隈を過ぎて十一時頃漸く瀑布へ到着したが、瀑に近けば冷風横に霧を吹き來つて、復た此身の炎塵中に在るとを知らぬ位である、瀑の高さは養老の五分の三、水量も彼に較ぶれば少い▲此瀑は随分古くから聞えた瀑で布留ノ瀧と云ふのが本名ぢやが、桃ノ尾山に在るから桃ノ尾瀧とも云ふのである、後嵯峨院の御製に『いまは又行ても見はや石上いそのかみふるの瀧つせ跡をたつねて』▲瀧のあたりに立派な茶屋などある譯でなく敷物を貸し茶を飲ませる位であるから、見物人(寧ろ瀧に打たれに行く人)は、大抵手辨當を持って行くのぢや、今日は長柄の改正樓と云ふ茶屋から酒肴辨當を取寄せたのぢやが、樓の手後れか辨當持の路に迷ふたか、少々遅くなつたので、一同『如何したんやろ』とて心配ぢやつたが、一時半に辨當持がヨタ／＼と遣つて來たので、一同ア、宜かつたと安心した桃ノ尾山に餓死するのを免れ

た▲槭樹の陰に古筵と御座と簀(言ふ迄もなく竹を編みたるもの)を敷き二重の折と盃を一同に渡したが、上の折は肴で下の折は壽司と來て居る、一同盃を手にした時、婦人が甘い(味淋)のをあがる方は甘いのを上げますと言ふや『拙者は人間が甘い依つて酒も甘いのが宜い』と戯言の中に防禦線を張つて悪諺を避けた先生が二人ばかり、槭樹はまだ青いのに一同の顔は紅くなつて種々な俚歌が出た『後は言いでも知れたと』『テナこと仰しやいましたか子』此二つの調から成立た俚歌が重で、それから『奈良の名所を知らない人に』『京の名所を知らない人に』『長柄の名所を知らない人に』と云ふ俚歌も出た▲一同三四回瀧に打れ、酒肴も壽司も腹へ入れて仕舞ひ、瀧の水に冷した二個の西瓜も食つて仕舞ひ、腹も膨れ身も涼しくなつて、四時半から歸途に就いた▲今夜も改正樓で宴會を開かれ、宴酣にして芳月氏『徒歩旅行——東京出てから一月あまり奈良の都へ來て見れば翠滴る三笠山』と云ふのを三味線に上げさせた、

八月七日

和州南葛城郡葛

生花樓にて

前便に言ひ漏したが、丹波市の大字三島には天理教會の老家本元がある、各分教會の立派なる建築物に不釣合なほど古ぼけた傾いた建築物ぢやが、これはちみき婆の遺訓で、分教會が悉皆盛になつてから八棟御殿を建よ、それまでは改築しちやならぬと言ふのぢやから、建て繼つぎはするが未だ改築はしないのぢやケナ▲昨日布留の瀧に於ては旅行會員と徒歩旅行記者樂天が瀧に打たれて居る様を撮影したが、今朝出立の間際にも、飯田氏宅の前で制服の記者と旅行會員を撮影した▲今朝は旅行會員十餘人に送られて立つたが、其中重なる數氏は都村大字八尾まで送られた、長柄から此處までは一里五丁ある、田原本を経て十時二十分頃八木へ着き、一休みして綏靖天皇御陵を拜し次て神武天皇御陵を拜した、これは道順で神武御陵の方が二丁ばかり南に在るのぢや▲適美なる畝傍山は小山ながらに神々しい氣象が表象されて居る、チヨット神武天皇を祀つてある様に思はれるが、神功皇后を祀つてある、畝傍山の南に岡があつて白木(最早雨に晒されて白くは無い)の鳥居兀立し、檀原神宮自ら他の金碧煌々たる者と其選を異にして居る▲檀原教會本院權大教正奥野陣七氏を訪ふて晝飯の御馳走になつた、

同氏は却々の旅行家で、東北九州何處でも跋渉したさうだが、大和一國は特に詳しい參謀本部から管て派遣された先生が地圖を披閱して居ると、奥野氏が傍から此地圖は違つて居りますナアと直言したので、貴君は失敬なと言ふチエと怒つたが、奥野氏は「私は貴君方のやうに官費で旅行したのでない、自費で各地を歩いた依て地理に於ては貴君方に負けぬ」とて、一々相違の點を指摘し、「私が圖を引てあげませう」かと出たから參謀本部の先生も何分宜しく頼むと降参したケナ▲奥野氏は家人をして湯を沸さしめ肥者をして行水(寧ろ行湯)せしめ、驕陽の傾くまで晝寐せしめたが、仙人然たる中に機鋒往々人に迫る所があつて、近頃の若藏がなど云ふ言を二三度進らした、

八月八日

大和五條

下村櫻郷氏方にて

今朝、葛の宿屋を立ち、奉膳、薬水、重坂、内谷、宇智を経て、十時四十分五條へ着いた、此間の途上ほど乾燥無味なのは、出發以來稀に見る所である▲左右一二間乃至三四丁の處が小山で何等の見るべきものも無い、チヨット腰掛けて休むべき茶店も

ない、宇智まで来て三四軒の茶店があるが、氷やラムネなどは無くて、西瓜、甜瓜、みかん水ぐらゐるを賣て居る▲記者は喉が渴いて困つたが、みかん水は腐敗してゐる心配があるから飲み得ず、甜瓜は虎疫製造の種ぢやから食ひ得ず、西瓜は食はうと言ふとお連がなくて切らぬとの答▲聽て十銭がところ買はしやれば切りますと言ふので少し多過ると思つたけれども、止めると言ふのも厭ぢやから切らせた、西洋西瓜とか云ふので、中は白い所が多いが、水分が多くてナカ／＼甘い、特に畑から取りたてなので蔓も葉も生々してゐる奴ぢやから、七八分平げて精神頗る清爽になつた▲果物の話の序ぢやが、薬水から程近い處に桃園があつて、東西も南北も十丁前後、春は花見の客多く、今頃も實つたのを見に来る人があるゲナ、奥野陣七氏の話に據ると、此桃園は畿内第一のみならず關西第一の桃園であらう、桃の産地は各地に多いが、多くは個人の畑や屋敷に作るから、斯く一個處に澤山あるのは殆んど稀ぢやとの事▲生駒郡は果樹の栽培多く、中にも梨が多いさうて、昨年の收穫高六萬六千二百二十一貫、産地の最たるものは安堵村で、四萬六千二百五十貫の收穫ぢやつたゲナ▲從來の所では、土用金

子大谷金子などの種類が多いが、目下水熊金子おんこの栽培を勉めて居るとの事▲前便に山邊郡桃ノ尾瀑を紹介したが、南葛城郡には五つの瀑布がある、尼か瀧は櫛羅村に在つて櫛羅くじらの瀧とも云ふが、高さ五十八尺幅二十尺、祈瀧は關屋と云ふ處に在つて、高さ五十一尺幅十二尺、黒水の瀧は山口と云ふ處に在つて、高さ五十尺幅十二尺、爾うして葛城村大字伏見に在る一ノ瀧は高さ二十尺、二ノ瀧は高さ十尺に過ぎないとの事▲南葛城郡長三野俊夫と云ふ仁は、地理歴史其他の材料を集めるとが嗜好であるゲナ、それが原因となつて縣下の地理歴史に通じた老人や教師達、産業に通じた官吏商人等が種々の材料を集め終には奈良縣治一斑若くは奈良縣案内と云ふやうな書物が出来るだらうとの事▲記者は五條に着てから直に奈良新聞支局を訪ふた、主人下村穆二郎氏(號櫻郷)は文學哲學の好きな仁で、談話が儒佛を出入してカントにまで涉つた、記者に取つては出發以來の愉快で、葛から五條まで出發以來稀な乾燥無味な途上を來た疲勞を償ふに餘りあるが、之を紹介すれば數日の紙上を塞ぐに足るも、十二萬の讀者諸君には餘り興味なきを奈何せんぢや、

八月九日

紀州岩出

井戸屋にて

大和は一体に暢氣な處で、夜も戸を閉めない家が多い、記者が泊つた長柄の孤亭の如きも、戸や障子を開放して外出し開放して寝に就くのであつた、記者は盜賊よりも蛇の侵入を恐れたが、ナニ入つた所で蚊帳の周圍をのたくる位のものぢやらうと思つて、二夜とて開放して寝た▲長柄で何が食べたいと問はれて、記者は南瓜と茄子を食べたいと答へ、終に此二品を煮て貰つた▲今日は九時過ぎに五條を立ち町端れまで下村氏に送られた、犬飼村に寺があつて犬飼山と云つて居る、昔弘法大師が高野山へ登る時此地の犬が道案内したのぢやケナ、▲待乳越と云ふ小さな坂を越えると、落合川と云ふ小さな川がある、此の川の手前に標柱があつて、從落合川中央以東奈良縣管轄と筆太に書てある▲紀伊へ來ると、垂井、中下、上兵庫、下兵庫、河瀬を経て橋本へ着く、河瀬で素人の家に休んだが、老翁ありて悴が上州前橋で裁判官して居るとの話ぢやつた▲應其村大字名古曾で農會雜誌發行所を訪問したが、主人の妹なる人が、此頃は

廢刊ましてのしとの話、御主人のお名前はと問へば、廣田俊雄と云ふ名刺を呉れた▲名倉、飯降、妙寺、大谷、佐野、笠田、背山、高田で伊都郡は盡きるとのぢやが、妹山背山とて山麓の森が河中(紀の川の)に斗出て居る處は却々景色が好い▲那賀郡に入り名手市場で素麵を食たが、此時は既に四時であつた、實は橋本で正午ぢやつたが、曇つて涼しかつたので、斯様な日にグズ／＼して居るのは惜いと思ひ、西瓜二切食つて直に歩き出した、名倉でも西瓜二切食ひ、大谷では蒸し薯二錢だけ食つた▲妙寺では辯護士の出張所などへ、矢鱈に名刺を投げ込んで置いた▲長田觀音の塔や森へ夕日が射して群鴉の亂れ鳴くなど却々面白かつたが、懸て日は暮れた、日が暮れてから二里餘り歩いて岩出大字清水に着たのは八時二十分ぢやつたのに、一軒の宿屋で家に取込ありとて断はられ、木賃宿同様の井戸屋へ案内されたが、相客が四人あつて一つの蚊帳に寝た上に、一人(鹽魚商)の手籠で蚊帳の裾が刎ね上つて居た爲めに蚊が澤山に入つて一同ロク／＼眠り得なかつた、

八月十日

紀州和歌山

富士屋にて

岩出清水の宿屋で四人の相客があつた爲めに、通信を書くことが出来ざつた、朝起きて書けば可いやうなもの、午前中に和歌山縣廳へ來なければ、翌日が日曜で縣廳の證明を取るに不都合となる、ソコで早起してロク／＼朝飯も食はず、九時に和歌山へ來着した▲であるから八月九日岩出清水井戸屋に於てなど書いてあるもの、前便は今日和歌山風月樓に於て、和歌山新報社主久下豊忠氏に晝飯を食はせられて、坐睡（昨夜蚊に攻められて善く眠らざつたから）しつゝ書いたのぢや、▲今日午後五時から、當地四新聞社諸君が和歌浦に納涼を催された、何れも痛飲家にあらざれば健啖家で、一騎當千の勢ひがあつた、▲種々趣向のあつた中で、一番珍らしかつたのは赤い圓提灯に白く垂と染め抜きたるを屋形船に十二吊したことぢや、これは新報の三木魚心氏の意匠さうナ▲また魚心氏の「二上り」が美人の絲に上つたが、チョット忘れたから次便に讀る▲美人と云へば、一昨年の今頃、處女然と言ふに顔赤めたる雑妓が、今は容貌舉動に大變化大進歩を來して居る、記者は依然たる吳下の阿蒙で、實以て耻かしい次第

ぢや、

八月十一日

紀州和歌山

富士屋にて

和歌山城は本年四月から公園となつて、二錢の下足料を出せば五十五萬五千石の天主閣へ上り得らるゝのぢや、最初この天主閣を公開した際は、毎日三千人ぐらゐ上つたさうナが、此頃は七十人ぐらゐぢやケナ▲記者は一昨年此地に住んで居たとがあるの上で、この天主閣は正面から側面から見飽きるほど見たが、一度上つて見たいと思つて上るとの出来ないのを遺憾として居た▲公園となつた初めに態々來て見たいと思つた位で、今度好機を得たから、八九歳の子供のやうに喜び勇んで上つた▲上つて見れば彦根城や松本城と同じ高さであるが、此天主閣は尙新らしくて彼の二城の様に古びては居らぬ、其理由は今から五十年ほど前に火災に罹つて新築したからぢや▲今日は炎氣が四五里以外を遮つて、明白見えざつたが、東は紀州富士龍門山の兀たるが粉河の南に聳え、北は大阪街道、孝子街道が透迤たる連山の間を通じ、紀の川の水は緩かに西の

海へ注ぎ、川口以南荒濱に打寄する浪は土佐の海岸を洗ふ浪と同じく太平洋から来て居る、南は峰や巒や岡陵や規模は小さいけれども、優美なる和歌浦を畫くに餘りあるの線である▲當地の天災と云へば、水害が第一で、随つて堤防修築や鐵橋架設が急要なる問題である其次は内川浚渫、小浦築港ぢやが、小浦築港は問題が大きいだけにそれほど急要の問題と思はない向が多からう▲當地は男女とも俊敏な方で、シットリした趣が少い、随つて風紀は不嚴肅であるが、近來其反動が餘程見えて來た、と言ふのは外でもない擊劔と柔術が大流行となつて居るのぢや▲俊敏にして變化し易いだけに婦人の好尚が大分變つて來て、青白い色男は婦人に擯斥されると云ふ勢ひぢやゲナ、永く續かせたいものぢや▲三木魚心氏の二上りと云ふのは斯うぢや、あづまの首途も勇ましく鐵もとけなん三伏の暑さを草鞋に踏分けて二六時たゆまぬ徒歩の旅、

八月十二日

泉州貝塚

大和屋にて

夢寐に入りつゝあつた和歌山は、一たび我前に實現したが、復た從來の如く夢寐に入

るべくなつた、秋月村より觀る和歌山城の暮色、西濱村より觀る和歌山城の曉景、何れも油畫と爲して可、輕舟一棹蘆荻を掠めて簾々聲あり、水に近き林巒或は疎に或は密なるに到りては、淡墨畫若くは水彩畫を待たざるを得ない▲若夫れ記者が五ヶ月に近き寢食を爲したる北仲間町の某家の如きは、畫伯の手の描き能ふ所てなく、詩人の手に待つあるものぢや、此家に寡婦ありて記者をして戀愛を雜へざる同情を寄せしめ、寡婦の母なる老婦ありて懷舊談を好み、老婦の姪なる五六歳の養女ありて餘念なく遊んで居たのである▲記者は此家の消息を知りたいので、板塀の中に柘榴の木を認め、門前の小溝に架けた花崗石を踏んだ、標札は新らしく爲つて養女の名前になつて居る、門を入れれば戸尻近く依然として一叢の棕栢竹が茂つて居る、敷石を跨いで呼ぶと一聲應へない、二聲應へない、臺所の障子は例の通り開け放して膳が二つ三つ重ねてある、記者の前に二百回以上置かれた膳も其中にあらう、三聲四聲呼んで尙應へない、「靴ぬぎ」にあるのは二足の薩摩下駄ぢや、五聲にして僅かに奥の方から應へたのは男の聲で、聽て出て來た武骨な人は、記者の風采と言語に怪むかの如く、愛想氣もなく「主

人は不在です』と言つた、記者はソコ／＼に來意を告げて出た、彼の寡婦は嫁したるか死したるか杳として知るべからずぢや▲縣廳へ月曜日に出張すれば出立が遅くなると思つて、破格的に路を急ぎ土曜日の午前に和歌山へ來たのは可かつたが、電信爲替は午後でも取れると思つて居たのは大の不覺で、日曜の午後零時三十分に着いた電信爲替は月曜の午前八時十五分に現金と爲つた▲今日の途上は餘り珍らしくない、九時に宿屋を出て、午前一時山口で晝飯を食つて、二時半まで午睡して、五時半に信達して西瓜を食つて、八時半に貝塚へ着いたので、今日も随分よく歩いた、暑さに慣れたのもあらうが、山城大和よりは風があるだけ幾分か涼しいので、

八月十三日

泉州堺

加茂藤にて

前便に書き漏じたのは、紀伊和泉の境界である、境川と云ふ小川に境橋と云ふのが架つて居て、兩國とも無趣味な山の麓に畝歩の狭い青田がある、併し境界より以南即ち紀伊に屬する境谷越は茂つた佳い山ぢや、其時に茶屋があつたさうだが、風雨の爲に

壊されてから建て、ないである、電信柱に三〇九とあつたのを覚えて居る▲今朝宿屋の受取を見ると四十四錢とあつた、丁度出發してから四十四日目と云ふのに思ひ到つて不思議の感に打たれた、不思議と云へば奈良の對山樓へ向けて社から打つた電報は二六號であつた、二六社に取つては詭向の番に當つたものぢや▲今日は却々蒸暑かつた、兩三日來比較的涼しかったので天候と土地にも世辭を言つたら直に『甘く見るな』との御返報、誠に／＼恐れ入るの外ない▲ソコで今日は、氷屋に休み、水菓子屋に休み、ラム子屋に休み、路傍の松林に休み、貝塚から堺まで歩いたばかりぢや、▲岸和田は岡部長職子の舊封であるが、餘程宗教の盛な處と見えて、和泉佛教會の本部もあり、天理教會の支部もあり、基督教會もあり、聖公會もある、而も西瓜の産地を以て現れてる和泉では、西瓜に似た圓顔の僧侶が勝を占めるであらう▲高石村なる高石神社の前に、高の海墓と云ふがある、高の海とは大阪角力で何の位の地を占て居たものが角力通ならぬ記者には判らない▲堺警察署へ証明を取に寄つたが、警部室には蚊帳が釣つてあつて、中に草枕と毛布があつた、晝寝するの夜のを其儘にして置いたの

か、人民が暑へ出頭して見ると不躰裁ぢやから、晝間は蚊帳を仕舞つて置くが可からう▲堺に多いのは宮と餅屋である、大鳥大神住吉大神を祀れる頓宮あり、天満宮あり、式内開口神社あり、何れも立派な境内で、狛犬などの大きいと他の國には稀な所ぢや、和泉に鳥居の多いのは直に旅人の目に着く、一鉢に甘い物を好むと見えて、餅屋せんざい、(汁粉屋) 餡屋など、目鼻を衝く位にある▲高石南の松林で休んで居た時、不圖女の機織りつゝ唄ふのを聴たが、『心中しましよか水ない川で枯木小枝で首つろか、つろか首、枯木小枝でサマ首つろか』わしの殿御は兵隊さんよ涼し風吹け空曇れ、曇れ空、涼し風吹けサマ空曇れ』幾つ唄つても此通りで、尻取た次に末二句の間へ『サマ』を挿むのぢや、常陸のイン節よりは調子が悪いが、機織るには此調でなくては不可、俚歌の調子は動作につれるもので、田植歌と馬子歌と船頭歌はそれ／＼異つて居る(知らず／＼横道へそれた御免／＼)

八月十四日

大阪

角田浩々歌客方にて

昨夜の宿屋加茂藤は、紀州岩出の井戸屋と同じ程度の宿屋ぢやつた、冷飯を食せるのと飯の給仕しないのとは、更に一層木賃宿に近い方ぢやが客は記者だけぢやつたので八畳の室を占領して仕舞つた▲今日五時に起きて、宿の者に起て呉れ／＼と言ふと、寢惚聲で『まだ早おますドンなりません』と息子が言つた、記者はムツとして『昨夜約束して置いたぢや無いか』と怒鳴つた、所が主婦の聲で『起きます／＼』との答▲六時に立つて、妙國寺の蘇鐵を見た、二三の大きい幹(莖か)かと想像して居たが、數十株叢生したもので、其一株々々は左程大きいと思はない、豫想が大き過ぎたのかも知れぬ▲宗教的建築物の立派な處として、神社の大きいのが三つあると同時に、寺院も大きいのが三つある、妙國寺と南宗寺と西本願寺別院▲知人の宿所を忘れて居たが、天満宮で一千年祭の寄附者を見て、九間町東一丁と判つた、堺市は總て大通りを基礎として、東一丁二丁、西一丁二丁としてある、知人は學校の先生ぢやが、豫想の通り暑中休暇で郷國へ歸つて居つた▲折角早起した所、此處彼處ウロ／＼した爲めに日が高くなつて最早暑い、氷屋へ寄つたが未だ氷は來ない、ラムチを飲んで河内の八尾へ

向つた、日に向つての路ぢやから抄取らない、幾度か休んで正午に到着し、直に警察署を襲ふた、署長さん却々用心深い仁で、證明簿を反指緝閱すると二十幾分にも及び、署の印でなくてはならぬかと質問された、記者は署の印の外に何かありますかと反問したが、種々あるとて卓上に列べてあるのを指示された、記者は何の印でも宜しいと微笑したが、書記は平氣なもので證明を書けと命ぜらるゝや直に書いて直に署の印を捺した▲八尾、平野（これは攝津）など昔は木綿ばかり作つた處で、竹外が西風吹白木綿國と拈つた様に覺えて居る、所が今は滿洲綿印度綿に押されて引合はぬので、稻が多く木綿は頗る少い、河内木綿の名空しく存して其實なきは歎ずべしぢや、併し平野の方は撚絲よひいとの産地と爲つて居る▲此邊一帶に水が乏しいので、桔槔林の如く稻や木綿に井戸から汲み上げて灌ぐの勞實に一通りては無い、又た傘を棒の先へ縛り付けて日よけと爲し、水車を踏んで居る者も多い▲八尾の西端れから、大阪の天王寺五重塔が一桁の算盤珠の様に見えたが、平野へ來ると大きく見え出した、平野から大阪までは灰の如き軟土道を没する路ぢや▲薄暮道修町を通ると、後から樂天君と呼ぶ人

がある、振返ると青木月兎氏で懇に旅情を慰められた、爾うして居る處へ車を驅つて通つたのが魚田浩々歌客で、月兎氏に呼留められ車を下りた、歌客曰く「今佐川君の處へ行く路なんだ」と、三人で暫く話して歌客方へ宿泊する事に決し、月兎氏に別れ二人共に佐川百畝氏方へ向けて歩いて居ると、圖らずも百畝氏が此方こゝへ向つて目を配りつゝ歩いて居るのに出會つた、曰く「住吉まで迎へに行つたのです」と、斯くと知つたら八尾へ廻るとを言ふて置くのであつた、氣の毒な事をした▲百畝氏より家信數通と十日以來の二六新報を受取り、歌客に伴はれ來り一浴して晚餐を饗せられた、應て二人で蚊帳の中へ入つた、歌客は記者に詩を贈らんとて韻書を繕き、記者は酔つて居たので早く眠つた▲四日市の某氏から殿方はドナタと訓むとの御注意感謝々々、借賣は誤寫でなく斯く書いてあつたのぢや、

八月十五日

大阪

築地阪本家にて

今日は廣小路町浩々歌客方を十時四十分には辭して、メンメン／＼久寶寺橋筋を西

區江ノ子島へ急いだ、十一時五十分に府廳へ着き、知事官房へ案内された、官房の戸棚に大阪新報の號外が貼付貼つてあつて、それが桂内閣成立の號外である、とは聊か興の冷める次第ぢや▲大阪毎日新聞社へ行つて、入澤京太郎氏に逢ひ、大阪朝日新聞社へ行つて、折井愚哉、松瀬青々、木崎好尚諸氏に逢ひ、大阪新報社へ行つて、向井藻浦氏に逢つた▲今夜澱江に納涼舟を泛べ、記者を歓迎されたが、青々、鬼史、月兔、井蛙、北渚、瓦全、墨水、愚哉諸君は、俳句の會で知つて居るので、初て晤つたのは、島道素石、水落露石二君ぢや▲それから毎日新聞の入澤京太郎君、朝日新聞交詢會の市川半次郎、三好米吉、池田留三郎諸君、憲政本黨支部の前川虎造君、書肆文淵堂金尾思西君、辻方觀君、佐川百畝君、角田浩々歌客ぢやつた、名刺を頂戴しない爲めに記憶しない方が二名ある、桑木君と申さるゝは、苗字だけ記憶して居る▲大阪人は思慮周密で意志鞏固で、行ふ事が秩序的事務的ぢやから、平和の戦争には必ず勝つ方である、此地で出來た器械は手堅く出來て居る上に最も便利重寶に出來て居る、書籍は一つて萬事に適用し得らるゝ様に出來て居る、衛生上の注意など善く行届く方で、氷屋は葉鐵

や真鍮の匙を廢めて竹の匙を用ゐて居る、辻便所など東京よりは遙に清潔で道行く人に鼻を掩はしむるとが少い、火事の豫防も手堅いもので、勸工場などは火鉢を收容すべき煉瓦室を建て、夜間人散ずる時は火鉢を此室へ密閉して仕舞ふのである▲但だ餘り用心深い爲に、壁は多きに過ぎ、格子は密に過ぎ、夏の暑苦しいと一通りて無い、京都も同様ぢや、

八月十六日

攝州西宮

阪東屋にて

今早朝、金尾文淵堂主が見えて、青木月兔氏が見えて、佐川百畝氏が見えた、暫く話しつつ飯を待て居たが、ナカ／＼持て來ない、待ち兼ねて手を拍つた時は、ヤット持ち來りつゝあつた時ぢや、月兔氏が贈られた句に曰く『酒ふいて足もむ宿の蚊遣哉』▲青木、金尾二氏には阪本屋の前で別れ、佐川氏に送られて西野田大野町荒木井蛙氏方へ立寄り、此處から三人で歩いた▲九條近くの茶屋に休んで西瓜を食つたのが佐川氏との別盃とても謂ふものぢやつた▲傳法村で飯屋に入り、井蛙氏も記者も折詰を食卓

の上に置き、何か菜を買はんとて蠅厨の傍へ行つたが、餘り旨さうな物は無かつた、記者は餘儀なく里芋の皿を取つた、井蛙氏は鳥貝の皿を取つた、斯くて各自折詰を開いたが、記者のは佐川氏から貰つたサンド井ツチ、井蛙氏のは卵形の握飯十個ばかりと湯葉の菜とであつた▲飯屋の直ぐ前が川で碧水決々として居る、向岸は森で小寺がある、順風に帆を揚げて溯り来る船は、人をして覺えず快哉を叫ばしめた、井蛙氏は握飯を食ひ了つた、記者のサンド井ツチは未だ半分残つて居る、井蛙氏に侷めたが、既に満腹と見えて一つ二つしきや食へない、試に犬に遣つて見たが大喜で食つた、して見ると犬は記者に較べると文明主義であらうかとも思はれる、非文明主義の記者にサンド井ツチを呉れた佐川氏の迷惑想ふべしぢや、▲今日は西の風ナカ／＼強く「糸だて」を吹き飛ばさんばかりの勢ひぢやつたので、驕陽の照り付けるに關らず餘程涼しかつた▲西ノ宮へ着いて、惠美酒銀行の島田仁三郎氏に逢つた、氏の話に據れば、釀酒に最も適する水は西ノ宮の海濱近くから湧くので、何の井は正宗釀造用、何の井は白鹿釀造用と云ふ風に定つて居る、爾うして此水を汲むのは冬季ばかりで、其他の

季節には蓋をして鍵を卸して置く、冬季中と雖も世間汲んで夜は鍵を卸す▲此水を需用する者、東は鳴尾、西は播州にまで及ぶので、冬季は水汲人足、運搬人足等が、此水に衣食する者多く、一の釀酒用井水持主は、一冬に三千圓以上の収入があるさうな▲島田氏の案内で、阪東屋へ來たが、島田氏にも井蛙氏にも別れて、寂然孤坐した時、昨夜澗江幾十艘の納涼船中、幾百の紅燈、船に岸に水を照して満天の星斗光を失ふ處に吾我を忘れて畫中の人たりし記者を想ふて、自ら別人のやうに感じた、

八月十七日

神戸

諏訪山中常盤にて

昨夜は一昨夜に引換て静寂ぢやつたので、阪本家出立の際金尾思西氏が呉れやうとした小天地、ほと／＼ぎす兩雜誌を受けざつたのを残念に思つた、▲阪東屋に近藤松野と云ふ老婢が居て、「妾は舊沼津藩主水野出羽守様の家來近藤直記と申す者の娘で御座います、世の變革と申すものは恐ろしいもので、斯様に零落して仕舞ひました、妾が明治十九年の十月に東京へ參つた時、出羽守様のお邸を尋ねましたが、本郷に居られる

との判りましたのは、丁度妾が大阪へ歸ることになりました前日て御座いました、それ出羽守様の邸へ参らずに歸つて仕舞ひました、貴君は本郷に近い新聞社にお勤め成さると承り、且つ新聞の方で種々の事をお聞き成さる御便宜も御座いませうから、何卒近藤新七の子供達が如何様になりましたかをお探り成さつて戴きたう御座います』と涙片手に掻口説れたには、記者も同情の涙を催した▲彼は聴て一葉の端書を持つて来て、『何卒お探り下さつて一人でも判りましたら、これに町所をお認め下さつて……』と懇ろに頼んだ▲記者は斯う云ふ話を聴いた爲め、雑誌を見たいと思つた慾は消滅したが、紀行を書くのが今朝になつた、所が今日午前に兵庫縣廳へ來なければ明日は日曜ぢや、毎々日曜の妨害を受るとよと呟きつゝ紀行も書かずに飛出した、故に前便は西ノ宮阪東屋に於てと記してあるが、實は神戸諏訪山中常盤に於てなんである▲西ノ宮から神戸へ來る道は、北に六甲、摩耶の峻嶒を仰ぎ、南に茅渚灣を望むので快活ではあるが、山陽が路傍に摩耶二十往還と言つた通り、今の人は汽車で百回も二百も往還するのぢやから、陳々腐々、小學生徒の作文ぢやあるまいし、西ノ宮より神戸

へ行く記、御影より摩耶山を觀る記には恐れ入ると罵倒するに相違ない、記者は其罵倒に辟易する譯でもないが、西瓜を食ひラム子を飲んだ外に書くべき事がない、西ノ宮、御影が日本酒の本場たるとは讀者諸君先刻御承知で細説するのは野暮である▲神戸へ着いたのは正午で縣廳へ出頭した時は二十分も過ぎて居た、實は縣廳は普請中の事だから假縣廳は何處に在ると魚屋の主人に問くと、物知り顔に阪本村におます杯と教へたので縣廳より六七丁も西へ行つたのぢや、車宿て又た問くと、縣廳の後の警察部の裏との事である、最早空腹で足が進まない、縣廳の役人らしきがゾロ／＼歸つて來る、勇氣は挫折したが引返へして假縣廳へ行つた、幸ひ知事官房に未だ役人が残つて居て證明を書いて呉れた▲晝飯食つて神戸新聞社へ行き、岩崎、寺島、國木田、根本の諸氏に逢ひ、五洲社(神戸又新日報)へ行き、山本、齋藤諸氏に逢つた、二社の周旋で、宿泊も此家、晚餐の場所も此家と定り、四時半頃、寺島山本二君に送られて此家へ來た、善談の岩崎氏、善歌の山本氏、善飲の寺島、國木田二氏何れも興趣百出の上、詩と俳句を呉れた、水哉岩崎君のは『置酒池亭夜話闌、面生如舊坐來安、慰君三

伏旅情熱、拂々荷香透箔寒』、峽雨山本君のは『察俗飄然入攝州、兼君不料醉高樓、神陽港上何多淚、話自新愁及舊愁』で、其後に與樂天君曾逢我郷峽州第四故及と註してある▲溪舟齋藤君のは『扇置いて贈に及ぶ風涼し』、桃舟井口君のは『涼しさや更る咄も餘念なき』

八月十八日

播州明石

長春樓にて

昨夜旅館中常盤の宿泊簿を三四枚繙閱したが、最近の所では、國分青厓(夫婦)、半井桃水、幸堂得知諸氏が泊つて居る▲今日國木田北斗氏方へ立寄つて、數日來此處へ見えて居る氏の嚴君に逢つた、それから楠社へ參つたが白裝束に緋の袴を穿いた巫女が二人しづ／＼拜殿に舞ふて居つた▲須磨寺と云ふ名高い處を記者は郷里に近いに拘らず、未だ見ざつたが、今度始めて入つて見た▲攝津播磨の境は、殆んど目にも着かぬ程の細溪が流れて居て、之を境川と名けて居る、チョット飛び越らるゝ程の石橋が架つて境橋と刻してある▲淡路は一抹の雲として我眼に入り透迤たる連山として我眼に

入つたものぢやが、今は嚙响として我前に横つて居る、垂水村から淡路の岩屋へ渡船があつて、渡賃七錢と書いてある▲今日は西の風強く「糸だて」を吹き飛ばさんとし、帽子を三四度飛ばして、明石へ着て警察署の前を通ると、天氣豫報にしのかぜはれ七月二十八日と書いてあつた、二十日以上も天氣豫報を打棄て、置くとは暢氣のんきにも程のあつたものぢや▲郵便電信局へ寄て打電しようとしたが、聞として人が居らない、日曜に休業する郵便局かとも思はれた▲神戸又新日報の通信員石井源二郎氏(松陽)を訪ひ此家へ案内された、纏て石井泰二郎(滴翠)、横山榮藏(杣人)、横山新藏(辰樓)、山田爲次郎(快哉)、山本鼎一(如松)、梅林吉兵衛(半子)諸子が訪はれて、人物評や俳話を始められた▲當地の龍谷寺と云ふ禪寺に近頃まで日種天然師と云ふ和尚があつた、今茲七十三歳の老僧ぢやが、圭角未だ消磨せず、五十六銀行の頭取をしてる米澤長衛と衝突して去つた、米澤はあらゆる艱苦を嘗め盡した一代身上の老人で、有力な檀家であるから、從來の僧侶は皆彼に向つて媚を呈した、所が天然師獨り昂然として屈せず、長衛に向つて『法は曲げる譯に行かぬ、お前の方から倭めて來い』てふ筆法で御した

ので、流石の長術も俯首屈從して居たが、何時か犬養的復讐を爲さんと企ツて居つた、ソコで天然師の後継問題に就き、表面正議に賛同しながら、裏面は正議を覆へした、天然師慚憤に堪へざる折柄、筑後の久留糸から懇ろに迎へたので、トゥトゥ久留米在浮羽村大生寺へ行つて仕舞つたゲナ、

八月十九日

播州高砂

志方屋にて

須磨舞子の青松白砂に淡路の一角を睨みつゝ、明石町へ入り、入丸社頭に立た「糸だて」姿の記者は、松風村雨の昔を忍ぶべき細雨に遭はず、朝霧に行く舟の奇觀に接せずと雖も、日種天然師外三四の談柄を得た▲某町長の事も詳しく聞いたが、一般讀者に興味なき上に、直筆すれば誹毀罪を構成するかも知れない、炎天を徒歩して黒くなつた顔を監獄に青くするなどは、好奇過ぎるから書かずに置く▲明石郡で収入の最多額なるは海産物で、年々三十萬圓以上ぢやさうナ、寸燐製造は兵庫縣中第一で、これも二三十萬圓の間を昇降して居るゲナ、江井島村には醸酒家が多く、御影、西ノ宮には

及ばないが、東京や京阪に輸送するの額決して尠からぬのである▲今朝、石井松陽氏が見えなければ、記者が共に同氏方まで行つた時は一兩日來病氣の細君が益々悪いとて混雑中ぢやつた、記者はロク／＼見舞を述るとも禮を述るとも爲し得ずに匆々辭し去る事に爲つて誠に不本意であつた▲昨日まで前庭見て居つた淡路を横に見るやうになつた、碧波萬頃軟沙の岸に接吻して、帆船白鷗の如く／＼する有様など、陳腐と云へば陳腐であるが、人をして倦ましめない陳腐である▲谷八木村で郷友と親族に端書を寄せ、魚住村二見村などで休み、別府の手枕松、尾上の鐘など、幼時よりロク／＼見ざつたので今日一々丁寧に見た▲高砂の松の浦風吹き暮れて尾上の鐘も響くなり、とは今時分よりは晩秋の頃に相應して居る、全體記者の様な粗末な頭腦には、謠曲と云へば何れも秋の心持がするので、文盲先生が漢文は何れも雄健、和文は何れも優美と感ずるのと、大に擇ぶ所なしぢや▲高砂の相生橋は、六年前妻見と共に見たとがあるのて、今日其橋を渡るのを楽しんで居たが、それが先月の出水で落ちて假橋になつて居るので、大に失望した、

八月二十日

播州姫路

櫻壽院にて

昨夜泊つた志方屋は、記者が二十年前に泊つたとのある宿屋ぢや、忘れはしない、明治十三年十一月二日、學校の先生に誘はれ、四個所(會根、高砂、石の寶殿、尾上)巡りに來て此家に泊つたので、これが記者に取て宿屋の初經驗ぢやつた▲泊つた室は、二階の一番奥で北側で十疊の座敷ぢやつた、仁山知水の四字を書いた扁額を見て、先生は知の字が違ふと言つた、記者は襖にある詩句の中に扉と云ふ字を讀み得て褒られたと覚えて居る▲同行者は、先生と我の外に我より二歳長じた人があつた、夜半から目を覺して種々話す中に、先生が恐い話を始めて我は小便に行きたいのを辛抱して居つた、年上の一人が一緒に行つて遣らうかと言つたが、マサカ一緒に行つて呉れとも言へない、恐々一人で便所へ行つた▲昨夜高砂に着いた記者は本町通りの東側に注目しつゝズン／＼南へ下つた、果然手柄山志方屋と云ふ大看板に出會した、明治十三年十一月二日の午後四時半頃に見た看板ぢや、躊躇せずに入つた、五十二三の老媪(主婦か)が丁寧に辭儀した、餘り丁寧に辭儀するから斷りはしないかと心配したが、何卒お泊り……と挨拶した、記者は二十年前の座敷へ案内するだらうと思つたが、三番と云ふ座敷へ案内した、此座敷は六疊で二階の西南隅になる、例の座敷は東北隅ぢや▲記者は湯に入る時、例の座敷の横を通つたが、三人の當世客が居つた、湯を出てから通つた時、客は皆他出して居た、仁山知水の扁額が見えたので、記者は人の座敷なるを忘れて入らうとしたが、心附いて椽側へ廻り襖を諦視した、掩扉風雨聲……落葉深何尺などの文字が確かに見えた、襖は案外古びて居らぬ、扉と云ふ字だけ暗合した別の襖ぢやなからうかと怪むほどぢや、併し風雨云々とあつたとは臆ながらに記憶してるから間違はなからう、老婢に種々話し掛けて見たが、一向無神経で『二十年目に泊るやうな客は頼母しくない、毎月泊るなら有り難いが』と云ふ二句を顔へ出した▲昨夜原田牛乳店主人(記者の友人の友人)を訪ひ、今朝松村竹夫(介石氏の兄上)笹倉源一郎(高砂町役場助役で新聞賣捌業)兩氏を訪ふた、松村氏は三種の農具と一種の烏網を發明して專賣特許權を得て居るので、獨創社でふ看板を懸けて居る、笹倉氏は『私

九十一

方では東京の新聞は少いのですが、二六新報は其中が一番多いのです、當地に通信者を置かれては如何です』と話した▲笹倉氏を辭してから、寶瓶山と云ふ寺の墓を調べたが、天竺徳兵衛の墓が見當らざつた、白華菅野先生の墓は篆額も碑銘もないサツパリしたものぢや▲曾根へ来て、菅公の社へ参り、龜田俊夫氏に晝餐を饗されて、龜田精一、入江重隆二氏にも逢つた、俊夫氏に「誕生日」を出されて『故郷近く涼しき風や曾根の松』てふ月並的の句を書いた、これが出發以來作句の皮切では無い、宿屋の主人などに請求されてモット月並的のを幾つも書いた、最も甚しいのは、甲州韭崎清水屋主人の扇面に書た句ぢや、曰く『酒よりも清水うれしき旅路哉』▲龜田氏が一泊せよと勧められたる好意に負き、五時頃同氏方を辭して七時半に姫路へ着いた、故郷安室村へは二十丁餘りぢやが、湯がないと困るから、龜田氏に教へられた櫻壽院(寺では無い)に泊つた、

八月廿一日

播州姫路

紺庄方にて

蜀黍の皮を剥く如く、一皮々々剥き來つて、我故郷安室村は最早薄皮一枚に透いて見える、此薄皮を容易に剥かないのが、却々の樂みである▲記者は郷里の親族朋友から早の歎を聞くを好まない、早の歎を掩蔽して儀式的歓迎さるるとをば更に好まない、成るとあら天甘雨を降して郷人皆喜雨の情に満たされて居る所へ行たいと希ふて居つた▲幸なる哉、記者の念願は届いた、昨日曾根の龜田氏に居る時、白雨一過庭前の樹石沐浴の觀を呈したが、これは忽ち霽れ、昨夜書肆矢内正夫氏を訪ふて宿屋に歸る途で、ポツリ／＼落ち初めたるに遭つたが、これは白雨でなくシットリと夜明まで降つた、爾うして晝間は晴れたが、先刻から又降り始めた、實に我郷人に取つて眺向の天氣、即ち記者に取つて眺向の天氣である▲今朝十時、姫路新聞社を訪ひ、藤川長次氏に案内されて白鷺城の天主閣へ登つた、此天主閣は五層であるから、記者の從來登つた和歌山、彦根、松本三城に較ぶれば二層高い、方敷里間は記者が幾回幾十回幾百回踏んだ地で、大概熟識の處だけに興味が多し、記者の出生地は生矢神社の松林を帯びて鬱々蒼々氣佳哉の趣がある、村の東に當る赤土山は記者が十二歳の頃殆んど毎日(秋冬

春の三季)のやうに落葉掻きに行つた山で最も懐しい、田寺、御立は此山に隠れて見えない▲記者が六七歳の頃、春季皇靈祭か秋季皇靈祭に、天主閣へ始て上らせた事があつた、其時の登城者は五万もあつたらう、我は親族の者に拉れられて行つたが幾個處の入口は押し合ひ、し合ひ、守衛者の叱咤も其効なく、我は押潰されやうとして大に叫び従兄弟従姉妹等の袖を引て背進せしめた、ソコで彼等は大不平、一汝が居なんだら御城へ上れたのや』と只管我を怨んで居たのは今でも一つ話ぢや▲懸て天主閣から姫路新聞社へ歸つて、今大阪から此社へ應援に來たと云ふ袋民三郎氏と三人で停車場前のヒルヤホールへ行き、此處で晝餐を饗せられ、袋氏に別れて藤川氏と姫路警察署へ行つた、此署では他の警察署の様に溢らずにスラ／＼證明を書いた上に、警部某氏手から茶を入られた、これは無論藤川氏と同行したからでもあるが、此署は他の小さな町などの警察署と違ふて進歩して居るのである▲本徳寺境内を散歩したが、龜居松は依然として鬱々、横／＼と廣がつて年々歳々杖の数を増すと參詣爺媪の杖が増すと同じぢや、鐘樓の下の古池に浮沈して居る龜は、記者が幼時祖母と寺參に來て見たもので、其頃の龜も多く生存してゐるに相違ない▲今夜紺屋方に晚餐會を催されて、松尾袁藏、松野九助、井上庄兵衛、藤川長次、深瀬富二、森新次郎、尾高守、袋民三郎八氏が寄られた、尾高氏は驚城新聞主筆で、井上氏は此家の主人で新聞賣捌業を兼て居る、松野氏も新聞賣捌を遣て居る、二六新報の姫路市へ入るのは總ての賣捌店を合せて百枚位との話、大に勉めねばならぬ▲播但鐵道會社に坪内甲子雄氏があつて、頗る二六最負との事であるが、折悪しく但馬に要事が出來て今夜見えなひのは遺憾千万である、

八月廿二日

播州安室村

字六本松一間方にて

今朝、十時までに昨日の紀行を書て、十時過ぎから井上庄兵衛氏と藤川長次氏に送られ、宇岩鼻と云ふ處の端れて二氏に別れた、記者は面を知つて心を知らぬ人に異装を怪まれるのが厭なので成るべく斯種の人に逢はぬやう希ふた▲二三人斯る人に逢ふたが、先方で氣附かぬのを幸ひとして記者も知らぬ振りして通り過ぎた、村近くなつ

て言葉懸けた人があつたので吃驚したが、此人は近頃東京へ遊學に出懸けた人の弟で兄の身上を依頼する外に言葉は無かつた▲記者が郷里へ入つて第一に訪ふたのは二十年来の友人中山壽氏で晝餐の間に新談舊話雜出した、それから同氏と村の東南より西へ向つて築きたる砲兵射撃場を見物し、墓場に至りて祖母と母の墓を掃ひ、六本松に來つて叔父と話しつゝ晚餐となつた、叔父はユツツリ盆を送つて立つ事と豫想して居つたので聊か失望の躰である▲故郷の出來事で、最も記者を傷ましめたのは我東隣の池内某が今茲五月三十四歳で死んだ事である、彼は眼に一丁字なき男ぢやつたが、我幼時は川に泳ぐも山に落葉搔くも木に登るも皆彼と共にしたので、記者が幼時を追憶する時は、必ず彼を聯想するのぢや、今や彼を見んと欲して能はず、覺えず暗涙を催すのである▲此外に中山壽、矢内正夫二氏が父を喪ひたる何れも悼むべき事である▲死と云へば總て不祥の様に聞えるが、昨夜の宿屋紺庄は先祖代々の位牌が十五あるさうで、四百年來宿屋營業を繼續し、姫路市では最も古い宿屋であるゲナ、此等は不祥でなく目出たいのぢや▲昔し蜀山人が紺庄方に泊つて女をつれて來いと注文した、主

人は女は無いと斷つた、ソコで蜀山人例の調子で、行燈に「姫路とて姫ある里と思ひしに姫なき今夜(紺屋)何と庄兵衛」と落書したゲナ、

八月廿三日

播州龍野

初音にて

目を閉つれば直に我腦中に書き出さるゝのは、故郷の風物である、故郷の或一人を思ひ出せば、方數里の山川城郭村園門巷悉くこれが背景となつて仕舞ふ、書寫山や白鷺城や宿雲を帯び、朱霞を貫いて遠景と爲り、赤土の東山や、山畑多く樹木少き向山や、老松多き生矢神社や、緩く流るゝ西川や、或は中景と爲り或は近景となるのである、記者は此地をば夢寐に入りつゝあつた我故郷と言はないで、目を閉つれば實現しつゝあつた我故郷と言ふが妥當と考へる、ソコで目を閉つれば實現しつゝあつた我故郷は復た從來の通り目を閉ぢなければ我前に實現せぬ様になつて仕舞つた▲叔父は數年前まで數絲の黒髪を存して居たが、今は悉皆白くなつて居る、元來酒を飲み得ぬ躰質で、一盃の味淋に酔ひ、平生の赤い顔が益々赤くな

つた、『成程同じ處に逗留すると紀行の材料がないだらうが、拙者事郷里へ着したに依つて一日逗留致候。』と書て遣れば社の方でも道理と思ふ哩、爾うして一日休まんかい』との叔父の言は至情に満ちて居るけれども、叔父は或事を姫路の某々氏に教へに行くので休むとが出来ない、婿は仕事が忙しい、我從姉は衛生不衛生の考へなく食物を我前に雑陳して多く食はぬ我を喜ばない、曰く『東京で旨い物食べ付け(慣れるの意味)とつてやさかい斯様な物食べられんやろけど』と▲食物などは如何でも可いが、記者は談敵なくして一日をボンヤリ送るとが出来ぬ、ソコで今日は如何しても龍野まで行かねばならぬとて無理に出立した、叔父が姫路から歸つてブツ／＼言ふかも知れないが▲稻や棉や豆や胡麻や天地は秋氣である、記者は通り慣れた野道を初めて草鞋で通り、田井村の川口木七郎氏を訪ふたが不在、町田に鍛田氏を飾西に佐伯氏を訪ふた、鍛田氏曰く『要するに如何なる御用です』記者は『名高い方を訪問するだけで、別に要件は御座いませぬ』と答へたが、今迄ムツツリして居た先生、自分の名が東京まで聞えて居るのを喜んだか、急にニッコリ笑つて『私は新聞を買へとも言はれるのかと思ひ

ました』云々▲佐伯善八と云ふ仁は、十年來寸燐業を遣て居る、其話に據れば、飾磨郡では監獄で製造する寸燐の外に、飾磨津で遣るのと自分が遣るのみであるとの事、近來製紙(藪半紙、座紙など)に従事する者が多く、索麵製造業者が多くなつたので、職工は紙屋索麵屋へ雇はれるとを希望する、ソコで寸燐屋へは以前頭を下げて頼みに來た職工も今は此方から頼まねばならぬとの事▲寸燐の原料中、藥品は輸入するのぢやが、軸木はノブ、ドロ、朴の木などを用ゐる、箱は多く檜を用ゐのぢや▲寸燐製造の最も盛なのは過日の紀行に書いた通り、兵庫縣中明石郡を推すのぢやが、索麵製造は揖保郡が第一で毎年の収入百万圓、揖保郡でこれに次ぐ物は有名なる龍野醬油で、毎年の収入五十万圓ぢやゲナ、▲青山村で長岡和平氏を驚かして呉れやうと、ツカノ／＼入つて行つた、先生店先に座つて居つたが、暫く逢はぬのと服装の變れる爲め却々氣附かぬ、名刺を遣ると驚くと一方ならず、今度は何屋になつたんですと既に冷笑を滿面に湛へて居る▲聽て息子敬二氏が出て來たが此人は記者の學友であつた上に、親父ほどの虚飾家でないから快く話した、彼は記者に相變らず哲學を遣りますかと問ふから、此頃

は世間學を遣つて居るので出世間學は遣らないと大笑した▲中村治宗氏を訪ふたが、嘗て東京日々の記者をして居つた人だけに、話が田舎臭くは無い、且つ快辯縦横は此人の長所なんて……

八月廿四日

備前三石

榎樓にて

前便に書かざつたが、斑鳩いかりから龍野へ行く道で、阿宗神社境内の樹蔭に「糸だて」を敷いて臥轉んで居たが、何時の間にかウツラ／＼眠りかけた、此時カタ／＼と馬の駆け来るやうな物音がしたので、記者は半夢の境から飛び起きた▲所がこれは馬でなく人ぢやつたので記者の動悸は鎮まつた、動悸の鎮まると同時に何處かて見たとのある貌と心附いた、爾うして記者が思ひ出さうとして居る中に、先方から「アツ中村さん……私は梅林です」と挨拶した、成程此人は明石の長春樓で逢つた梅林吉兵衛氏で、龍野に於ける唯一の新聞賣捌業者ぢや、併し斯う云ふ處で、逢はうとは實に思ひ設けぬ事で、阿宗神社の神の引合せと言つても宜しい、氏は友人の家へ被放火見舞に行く途ぢ

やつたので、記者を昨夜の宿屋へ紹介した、龍野へ入つて最初に感ずるのは醤油の臭ひである、今朝、梅林氏の案内で、醤油醸造家原田宗兵衛氏を訪ひ、醤油庫を參觀した▲大麥を煮る釜二つ、小麥を煮る釜二つ、何れも頗る大きい、小麥も大豆も一釜で四石づゝ煮るので、一年に用ゐる所小麥千石、大豆千石、薪八万貫、一槽平均二十五石のが三百槽あるから、モロミは七千五百石ぢやが、液は四千五百石、沈澱したる下層を除きて査定石高四千石となるさうな▲麴室は十三間に四間の建築物で、麴米は三百石、赤穂鹽三貫入二万俵を使ふケナ▲揖保郡の醤油醸造家は、三千石以上が七軒、千石以上が十軒、千石以下が七十軒、都合八十七軒、醸造高は六万石に上り、収入は六十万圓(前便に五十万圓とせしは誤り)に上ると云ふとぢや▲聚遠亭と云ふ立派な貸席があつて、銀行會社を始め公私雅俗の會を催す處ぢやが、記者をして少しく餘裕あらしめば、梅林半子、三木篤水等と此亭に名吟を闘はして、樂天終に一句なしの譏を免れたかも知れない、憾らくは餘裕なきが爲め、遠く鞍懸島を海上に望み、近く城山の巒蒼たるを賞して一椀の苦茗を啜り匆々辭し去つた▲記者は半子に拉れられて、篤水

を呉服屋店頭を訪ふた、彼は二番息子で今茲僅かに十七歳ぢやが、其俳才は一番息子の興安嶺を凌ぐ程であるケナ▲正條の岩見銀行支店にて菊谷氏に逢つたが、同氏も半日の俳席を催し得ぬのを憾むと言つて居る▲今日は有年泊りだろうと思つたが、晝休みの必要を感じなかつたので、三時に有年て晝飯食ひ、七時半に當地へ着した、有名な船坂へかゝる處池畔に今上天皇駐蹕之碑がある、明治十八年に建てたので、大鳥圭介氏の書ぢや、重野博士の抹殺が誤ならば、此あたりは兒島高德が後醍醐帝を賊手より迎へ奉らんとした處であらう、

八月廿五日

備前岡山

中村春洋氏方にて

昨夜宿泊した三石は山間の寒驛である、停車場は寒驛の割合に立派ぢやが、乗客の出入は極々少數で、貨物(煉瓦、石灰等)の方が重らしい▲板樓と云へば、立派な料理屋らしくも聞えるが、先づ安宿に近い方で、記者が偶々小錢を持たざつたから、電報料を立換へさせた所が、女中ども何か私語ひそかごとて厭な顔して居た▲後て此處の停車場は夜の

八時過ぎ電報を取扱ひませぬ依て明朝になりますと申し出た、記者はイヤになつて、それぢや止めやうと言はうとしたが、電報料を立換させてあるので、エ、まゝよと打な棄つて置いた▲今朝起きて見ると家の傍に大きな榎がある、榎樓の縁起は判つた、停車場は軌道橋と云ふのを渡つて、十五六階の石段を築き、其上に新築したものである、近い峰巒から旭の光を浴びた寒驛は、空氣が冷かて爽かて餘程心持が可い▲昨夜少し寢心地が悪かつたので、今朝眼が澁かつたけれども、今日中に岡山へ來ないと兩替の都合が悪い(エライ金持ヤサカイ)、ソコで晝寝をせず遣て來た、頭痛岑々として耐らない▲片上はチョイト好い處で宿屋らしい宿屋が二三軒ある、伊部は備前燒の名所に於て盛に焼て居る、道の兩側に七八軒の陶器商があつて皆赤黒い陶器を陳列して居る、羅漢あり達磨あり布袋あり、道行く人を睨むが如く笑ふが如き様である▲下水其他に用ふ陶管は、伊部の專賣と言つても可い位で、其堅牢なると鐵管に匹敵すべく、時としては怪しい鐵管よりは遙かに安全なのである▲神社の前に飾つてある獅子を見

るに、多く伊部焼の獅子である▲香登村で晝飯を食つて、大内村一井氏庭内の臥龍松を觀たが、横へくと數十間も廣がつて實に立派なものぢや、維新前は藩主から年々此松に扶持が下つたゲナ▲長岡村から岡山城が暮雲の中に見え出した、城益々近く見ゆる二本松と云ふ處で、或店の少年が出て「貴君は中村さんですか、御父さんと弟さんが先刻まで迎へに御出になつて居りました」と言ひ、或履物商の老婦は「中村さん御歸りなされたか」と言つた、何れも記者を呑牛子と間違へて▲盆前で商家も農家も却々忙しい、麻の袋を肩にして書付を配り歩く者織るが如く、「盆の御入用品何でも大安賣、ふく岡水田」「來十三日(陰曆)までそへ物進呈致候」などの貼紙枚舉に追あらず、

八月廿六日

備前岡山

中村春洋氏方にて

昨夜岡山市へ入つたのは八時ぢやつた、呉服商などは最早忙しい時日を通り過ぎて、一番忙しいのが履物商、其次が小間物商らしかつた、總の下つた切籠燈籠を幾つも懸

けて買人を待つて居る店もある▲「脂松や脂松ツ」と叫びつゝ賣り歩く杣人が幾人もある、これは東京で「苧殼や苧殼」と叫びつゝ賣り歩くのと同じとて陰曆十三日に脂松(脂多くして善く燃ゆる部分を云ふ)で迎火を焚くので、それを賣り歩くのぢや▲小橋、中橋を経て京橋へかゝる、京橋は有名な朝日川に架つて居るが、朝日川の水量今は頗る少くして河心をのみ流れて居る、橋南の岸より水際近くまで出て居る露店の多いと、其涼風に搖ぐ紅提灯の美しいと、納涼客の群集せると、橋上に立つた記者をして茫然自失せしめた▲京橋以西、行人絡繹、異装の我は萬綠叢中の紅一點ぢやつたが、人群に埋まれた故か却て左程注目されなかつた▲西大寺町の角を曲る、電信柱が高く突ツ立つて居る、仰ぎ視れば半輪の明月皎々して冷光を放つて居る、異装の我は孤影を大道に描き出されつゝ紙屋町、榮町を過ぎ下之町へかゝつた、理髪店で問ふて右へ曲り、一丁ばかりにして内山下脇を左へ折れ、五軒目の家の前に佇立し、格子を少しく開けて「中村さんは此方ですか」と問ふた、確信して居ながら問ふた、老媪の聲で「へい何方……」と言はれた、記者は「二六新報の者で御坐ますが……」とて又も格子

を開けた、此時奥から「アッ先生善うこそ」とランプを手にして出て來られたのは年頃五十二三(實は四十四歳)、其面貌は確に三十年後の吞牛子其儘で、言ふまでもなく吞牛子の嚴君、老嫗は吞牛子の祖母君である、祖母君は盥に水を汲まれ、記者が脚絆や草鞋を解くに手をかけられた、暢氣な記者も大に恐縮した▲近所の湯屋へ案内され、一浴して歸れば、吞牛子の北堂と令弟二人は先刻行かれた親類先から歸られ、晚餐を饗されたが、令弟の喜びは一方ならず、吞牛子の歸つて來たのと殆んど同様に見えた、種々話してゐる中に十一時と爲り、記者は遠慮會釋もなく酔臥した、嚴君は却つて記者の遠慮なきを喜ばれ、裏二階に寝させられた▲今日嚴君に案内されて、岡山縣廳に證明を取り、中國民報記者今田猪太郎氏と三人で少しく歩き、山陽新報社を訪ふて、有森新吉、難波作平(葦川)二氏に逢ひ、關西新聞社を訪ふて北村馬骨氏に逢ひ、中國民報社を訪ふて、坂本義夫、田岡佐代治(嶺雲)草野蘆光、西崎一流、松本武正諸氏に逢つた▲五時半頃より嚴君春洋翁及び吉岡唯一氏と後樂園へ行つた、流石池田侯の庭園ぢやつただけに、眺望も好く樹石も整ふて居る、縣會議事堂の藁屋根は殊に面白い、鳥

城屹として南に聳えて居る▲翠明樓で三新聞社及び當地有志諸君が歡迎會を催された水に近き三層樓、風なくして自ら涼しいので、舞子の袖の翻るより、更に涼風を生じた▲昨今は舊の盆前で、當地方は殊に忙しい、のみならず精進で魚類を食はない習慣である、料理屋などは閑として客なきの時、記者が來て歡迎會を催された爲め俄に魚類を取寄せた位ぢや、徒歩記者も亦榮なりと謂つべし▲春洋翁の呉れられた和歌に曰く「きのふより待ちし一日は千秋にて君を迎ふる今日とはなりぬる」野路山路越え來し君の雄々しさに我子もかくやあれとこそ思ふ」

八月廿七日

備中倉敷

池田屋にて

今朝、中國民報の坂本義夫氏が見えて、庭瀬あたりまで送りたいけれども、頃日山野を跋渉して此通り豆を拵えたから御免蒙るとして、梅干大の豆を見せられた、記者は坂本君の跋渉家たるを喜び且つ其厚情を感じた▲東京専門學校の井口格次郎氏は送りた

いけれども差支あるに依り弟に送らせ申すとて、令弟竹三氏を紹介された、記者は春洋

翁及び翁の三男哲君(十六歳)、四男薫君(九歳)、井口竹三君に送られて話しつゝ歩いたが、翁と薫君には町端れて別れた▲我々三人は宗忠神社の前で晝飯を食ひ、其他三個所で西瓜を食ひ、五時半に倉敷へ着いた、愛文舎宇野和一郎氏方で、井口竹三君と中村哲君に別れ、此家へ案内され、當地紳士に歓迎された▲當地は秋山社長の郷里だけに一粒撰の紳士が集まられて、記者の面目此上も無い次第ぢや、ソコで記者は、最初こそ謹慎して居つたが、漸々野性を曝露して、肴荒らしを始め、大飯を食ひ、終に宇野氏の囑に應じて短冊に落書を始めた、其中十句ばかりは舊作で、席上の作は「花座に晝寝してゐる男かな」「西瓜喰ふ旅の二人や涼臺」だけぢやつた、俳人は飄逸と看做されて居るから、記者のやうな禮に嫻はぬ男は、禮儀を要する席上にはのみ俳人となるのが可い、随分横着な心掛で、

八月廿八日

備中笠岡

朝甚方にて

今日十時に倉敷を立つた、町端れまで送られたのは、林源十郎、宇野和一郎兩氏で、

林壽夫氏は玉島まで送られた、氏は社の林源一氏の令弟である▲氏と話しつゝ道は餘程拙取で、東高梁川、西高梁川の中間なる川内も何時の間にか通り過ぎた、此處は三島中洲翁桑梓の地で海近き峰巒が二水に夾まれ、遠く豫讃の山を望み得るなどは、却々好風景であるが、平生水少くして軟沙脛を没せんばかりの川が、一朝の暴雨に濁流滔々岸を壊り村落田圃を害すると殆んど年々なりとは、誠に歎すべきの至りである、水源の山林を濫伐するに因るとの事ぢや▲聽て畑山と海に挟まれた寧ろ畑山の間へ海水が鬱入して居る玉島港へ着いた、此處は讃岐の多度津、丸龜へ渡る要港であるが、近年は港底益々淺くなつて船舶の出入が大分不便になつて來た、のみならず、停車場まで二十餘丁あるので、四國へ往來する者の外は、此處を通過するものが稀である、ソコで此地は年々歳々寂れ行く傾きがある、四國との聯絡に注意する人士は、此地の爲めに計らねばならぬ▲林氏と飲食店を搜したが、何れもヒツソリとして用意がない様子、餘儀なく橋際の小さい穢い飲食店へ入つたが、飯は無くてマゼ鮓と索麵がある、先づマゼ鮓を食つたが、二人とも一碗食ふと無くなつた、尤も種々の客が來て皆マゼ

鮓を食つたから早く盡きたのぢや、ソッて素麵を食つた、林氏は一晩、記者は二晩、何程拂ふんぢやと問くと記者のが九錢五厘、林氏のが七錢五厘▲行く／＼甕江銀行と云ふ看板を見て、此地は故川田甕江翁の出た處と云ふと心附いた、全躰備中は漢學者の多く出た地で、西山拙齋、山田方谷、坂谷朗廬、坂田警軒等が出た、此四先生と川田三島二先生の外にも、尙あるだらう、悉皆思ひ出すとが出来ない▲林氏と玉島の町端れに別れて物淋しく感じつゝ、土手を行くと三十丁、大谷と云ふ處で金光教會の本部を見た、却々立派な構へて、東京大阪を始め各地に金持の信者を持って居るだけに、金光が見えて居る▲淺口郡の將に盡きんとする新庄と云ふ處で、一青年が懇慫に挨拶して『貴君は二六新報の御方ですか』と尋ね、記者の答を待ちて、『私は十二萬人の一人て、先刻からお待ち申して居りました』と語り出た、此人は縣立岡山中學校の岡正夫氏、次で岡山縣師範學校の岡本仁萬市氏と中尾孚一氏が歓迎された、此の時は日没して二十幾分を過ぎ、團々たる月は東山を離れて居つたが、樹陰の茶店にて西瓜ラム子等を振舞れた▲應て三氏に送られて笠岡町へ着し、警察署で、證明を取り、此家へ


泊つた、岡氏の學友仁科壯一氏も見えた、電報打ちに行くとは岡氏に頼んだ、

八月廿九日

備後松永

朝日野にて

笠岡は後に山を負ひ、前に瑠璃盆の如き灣を控へて居る、神島、差出島、高島(神武帝の行在所のありし所)など此碧灣を擁する如く擁せざる如く、列を亂して自ら好配置を成して居る▲近來笠岡に於て、有力なる生産の一となつたのは麥藭眞田で、到處麥稈買入所若くは麥藭眞田買入所の看板を懸けて居る、ソッて麥を作る農家では麥よりも藁の收入多きを思ひ、麥穂の未だ熟さない中に刈つて仕舞ふのぢや、これは麥穂の熟する頃は麥稈乾枯して脆弱と爲り、大に價格を減ずるからであるゲナ▲故森田思軒氏の甥にあたる森田晋三氏が笠岡に居ると云ふので、チヨット逢ひに行かうかとも思つたが、頃日笠岡の一部分に赤痢病流行し始め追々猖獗に赴かんずる勢ひあり、現に昨夜記者が警察署へ行つた時、卓上に赤痢病届の綴込やら患者宿所姓名簿があつた程なので、臆病風に襲はれ、匆々宿屋を立つた▲今日午後一時半頃福山へ來たが、東町に

賢忠寺と云ふのがあつて、福山開祖水野家歴代御墓所と云ふ看板を懸けて居る、大きな蘇鐵か一株あつて兩大枝を成し、更に數小枝を發して居る、蘇鐵に隣りて芭蕉に花咲けるあり、芭蕉塚なりとて『年々や櫻を肥す花の塵』と刻してある▲福山城へ上つて見たいと思つたが、扉に錠が卸してある、問ふて見ると近日修繕に着手するので、登城を禁止して居るとの事▲福山は山陽道の都會中、最も保守的風俗を存し、今日の如きは三十歳以上の壯年が七八歳の小兒の如く  形に芥子を置き、チュー／＼(頭の左右と後に一つまみの髪を存したるを云ふ)を置き、仁和賀ぢや／＼と踊り廻るあり菅笠被つて踊り廻るあり、十四五の女子をして高く裾を褰げ股を露出せしめて、三昧線彈きつゝ行かしまるあり、實に奇々怪々封建時代を想像せしむるに餘りある現象で、大浦警視總監に見せたい様ぢや▲何處の田舎にもあるとながら、昨今の盆休みを好機とし、半年の愉快を二日間に集めた氣になつて、徹宵賭博に耽つた手合が多い、曰く彼の男は一月の飲料を取つた、曰く彼の男は又負けたと、▲備中備後の境即ち岡山縣と廣島縣の境に境界標がない、昨夜賭博した話をしつゝある源の字と呼ばれた男

に聞いたが、彼は大門へ来る前に坂を越えさつしやつたらう、彼處の坂の上が境界です、一二年前までは棒杭があつたが今は無うなつて居るとの話▲備前備中の言葉で、をへぬ(ダメ)、つかさい(ください)などは、餘り珍らしくは無い▲備中では人を先生と呼ぶと他地方より甚しい、進對應接に媚ひ、典雅にして浮誇と云ふ傾きがある、

八月三十日

備後尾道

柳園にて

昨夜の宿屋朝日野は、瀛車へ乗降の客がチヨット休む家、停車場へ勤める人がチヨット飲む家、勞働者が情婦などを伴れて来る家なんぢや、昨夜は隣室に情夫情婦が泊つて痴話に餘念なくなつて居たが、少情少血の記者は、歩き疲れた上に紀行書くことに精力を集注して居たので、室を易へて呉れと注文する必要を感じなかつた▲痴話の一斑を寫し出したらば、チヨット面白いかも知れない、惜しいとは記者が紀行を書き終る頃、痴話は途切れて仕舞つた▲この朝日野で一つだけ氣に入つた事と云ふのは、テーブルに二三種の新聞が載せてあるのぢやつた、けれども大阪朝日だけが新らしいので、萬

朝は二日後れのがあつた、朝日は十日も以前の分から堆積してあつた▲今朝松永警察署へ寄つたが、署長は「廣嶋縣警部見玉得一」と云ふ名刺を呉れて丁寧に話を始めた。話は赤痢患者の追々発生しつゝある事、盆とか正月とかに賭博犯の多き事、柄津には鐵道がないので漸々衰微する事、松永の鹽業は先づ有望なる事などちやつた▲今津で休憩したが、今日の大阪朝日新聞があつて電報欄に「下田歌子、二六徒歩記者」の一項(福島發)が見えた、最早福島まで来たかと驚いた、呑牛子が福島へ着く日に我も切て廣島へ着きたいと思つて居たので▲今津から尾道への舊道は逢坂と云ふのぢやが、勾配は餘り急でなく、木蔭があるだけに涼しくて宜いから、それを通つた▲十一時に當市へ着き尾道新報社と六十六銀行との所在を尋ねたが、新報社よりは銀行の方が餘程近い、ソコで銀行へ行つて八木絢夫氏を訪ふたが見えて居ない、偶々一人の男が銀行の前へ来て「貴君は中村さんでげすか、私は柳園……で」と挨拶して記者を伴ひ去つた、記者は花井卓藏氏が過日まで柳園に泊つて居つたことを承知してゐるので、毫も訝る所なく成程と首肯しつゝ金公と云ふ男の後、跟て行つた、彼は嘉肴園と云ふ料理

屋の臺所口から下女を呼んで記者を此家へ案内せしめた▲大島魏氏が最初に訪はれ、次に八木絢夫氏と高垣松右衛門氏が訪はれ、各々懇懇に旅情を慰められ、夕刻より八木氏と高垣氏が見えて晚餐を共にせられ、大島氏も尋て見えた、それから尾道新報社の今福金風氏山陽新報社の特派員春日井良一氏が訪はれ前三氏が歸られてから、記者を竹半と云ふ家へ伴れ行かれた、此處で少し飲んで居るうちに醉魔と睡魔が一時に襲つて来たから横臥して仕舞つた▲今日午後晝寢醒めてから市中を歩いて見たが、藝妓が菅笠を被り若くは脇ばさみ、友禪の單衣ぞべり、しゃらりと踊りつゝ黄色な聲で「吉田通れば二階から招く赤い鹿の子の振袖が」と且つ唄ひ且つ三味弾きつゝ行くのに出逢つた、言ふ迄もなく其後から一群の老幼男女が跟て行くので▲尾道の街路は頗る狭い、車が通れば人は小さく左右の軒下へ附かねばならぬ處が多い、東西に貫通せる國道だけは稍廣いが、横町は概して狭い、路次の狭い處で行水して居ると、盥が路次一ばいぢやから、チョット御免と聲かける、行水して居る人は身を片寄せ肩をスポめてサアお通りと言ふ、行人は御免下さいとて盥を跨ぐ、實に不躰裁千萬なものぢや、

八月卅一日

備後尾道

柳園にて

今日は春日井良一氏及び尾道新報の中川氏に伴れられて、千光寺、西國寺、浄土寺、天満宮を見物した、千光寺山は巉巖巨石に富み、笠置には及び難いが、先づ山陽道中稀に見る所の奇山である、此山の巔に巉巖怪松を縫ひつゝ、三人が疾風細雨に蛇目傘(春日井氏)、番傘(中川氏)蝙蝠傘を且つ開き且つ閉ぢ、忽ち走り忽ち止まり、時として樹枝を曲げて猿猴の態を學んだなどは餘程の奇觀であつた▲千光寺へ登るには、幾百の石段を躡るのぢやが、西國寺と浄土寺は、それほど多くの石段を躡攀しないで行かれる、爾うして西國寺は修潔齊整、掃除や手入の行届けるを以て優り、浄土寺は由緒の多きを以て優つて居る▲浄土寺に如何なる由緒あるかと云ふに、豊太閤が征韓の歸路立寄つて種々の寶物(今から謂ふ所の)を残して行つたのぢやケナ、西國寺は昔の御祈願所であつたと云ふだけの事▲天満宮は五十五級の石段が、五十三級まで長さ三間の一枚石で續でないのが珍らしい、あと一枚ぐらゐ一枚石を用ひ得ない等はないので、

故と續いだのをやつたのだらうとの話、尤も一番上のは故と折つたか誤つて折つたかしたもので短いのを續いだのでは無い▲當地の産物は墨表、花筵、錨、石材、酢、澁(柿の)などで、天満宮、西國寺等の石段が立派なもの、當地に石材が多いからの事▲千光寺に桂文治翁之碑と云ふのがあつて一六居士の書であるが、『頓て踏む道一寸ぢの霞かな』の一句を添へて居る、浄土寺にも桂文治の肖像が掲げてある、『桂文治は落語家で』と兒童の口にも膾炙せる名人の名を襲て居るのぢやが、當地へ來て一婦人に擒にせられ終に歸らないさうナ▲當地は隔年七月十八日(陰曆)に吉和踊りと云ふのを遣る、百名近い壯漢が鬱金木綿の鉢巻をして、左の脇に太鼓、太鼓の大なる者は門閥家を懸け、右手に五色總 付いた八寸の棒を持ち、鐘た、きがカンカラくと鐘で合圖する毎に、一同ヤーショと大聲揚げて太鼓を叩く、其總指揮官(是は世襲で、第一の門閥家)とも云ふべき男は鬼の面を被つて先へ立て行く、實に奇觀であるが、これは文祿征韓の役、吉和村(當地より一里ばかり西の漁村)の漁夫が船夫となつて行き、凱旋した時の祝祭の形を今日まで變更せず遣るのぢやさうナ▲昨午後五時頃より玉浦

灣に舟遊びを催されたのは、當地の郊遊會員諸君で、各種の人を網羅して居る、小歌島に到着して一同寫眞し、船に歸て且つ飲み且つ食ひ、議論もあり雑話もあつて興趣百出した▲此郊遊會は、九年前から繼續されて居るので、毎月一回遠足を試みる、今の幹事は八木氏外二氏さうナ、

九月一日

藝州忠海

中井方にて

尾道に就て書くべき事がモ少し残つて居る、此地は淨土寺山と千光寺山と灣との間に挟まつてゐるので頗る狭いのぢや、ソコで鐵道敷設には餘程困つたと見えて、鐵道が千光寺と淨土寺の境内を通つて居る、兩寺とも石段を十級ばかり上ると鐵道を踏切るのである▲備後は一昧に掃除が行届かぬ方ぢやが、尾道は汚い割合に悪疫が流行しない、これは土地が山麓から灣に向つて傾斜してゐるので、汚水が停滞せぬからであらう▲尾道の海岸を歩くと干鰯臭くて耐らない、干鰯は無論北海道から來るので、此地の人は新聞を見るに北海道の記事を喜ぶ向が多い、新聞賣捌業は北辰社と見玉の二軒である

▲尾道の貸座敷は市中に在るが、三階の家は松鶴樓と云ふのだけぢや▲宿屋の重なるものは、濱吉樓、今井館、鶴水館で、柳園、嘉肴園などは皮肉な料理で聞えてるケナ▲尾道は魚類を大阪、京都などへ送つて居るけれども此間中は益て漁夫が休んで居たから、魚類が拂底して居つた▲西國寺に櫻松と云ふのがあゝ、古松の幹心朽ちたる處に櫻の寄生樹が生えて、其根は虚から地へ下つて居る、立石に作樂松と刻してある▲地方の蒸菓子に閉口するのは、其餡が駄菓子の餡の如く眞黒なとてある、所が尾道のは白餡である、柳園で食つた葛餅、千光寺で食つた餡麵包など何れも白餡であつた▲備後以西東京の左様だテ、姫路の左様やナアに對して左様ぢやノオと言ふのである、「ケス」は東京の半可通ばかりの言葉と思つて居たが、尾道でも何でケス、左様でケスなど言つて居る、播磨で雨祝ひ雨休みなと言ふのを、備後安藝では潤祝ひ、潤休みと言ふ、うるほひを早口に言ふのでうりと聞えるのぢや▲今日三原で晝飯を食つたが、飯屋の老爺は過日花井卓藏氏の演説を聴かされたのを残念に思ふ口振ぢやつた、花井氏は喋舌るのが巧いと褒めちぎつて居るから、そりや巧い筈ぢや、喋舌るのが商賣ぢ

やものと言つて大笑となつた、此地は花井氏の生れ故郷なのである▲田野浦、須波、佐江崎を経て忠海へ来たが、細雨冥濛として多島海を罩めて居る景致は高且つ美を極めたものぢや▲一年中の厄日とも言ふ二百十日は先づ無難で結構、『静かなる二百十日の潤雨哉』、『朝霧に装の雫や稻の花』、

九月二日

藝州竹原

山田屋にて

今朝八時に忠海を立つたが、雨歇みて淡雲時々日光を漏したけれども、餘り暑くないので能く歩けた、忠海と竹原の間は山に傍ふて多島海を眺めつゝ歩くのぢやが、群島の峰嶺蜿蜒起伏して迎ふる如く送る如く揖する如く、壘のやうに平かな静かな碧波を漁舟や帆船の坐する如く行く如きを見て、我は造化の大なる掌上に眠つた如くトント夢心地になつて仕舞つた、何時か人間であることに心付き、新聞記者と云ふ俗な人間であることに心付き、飯を食つて活て居るとに心附いた▲十一時に竹原に着き、書肆兼雜貨商で新聞を賣捌て居る松浦真祐氏を訪ふた、氏は記者を料理屋へ伴て行つたが、頓

田兼助、藤原鶴吉、村上輔一三氏が見えた、後で村上氏は今夜泊つて居る山田屋の主人と知つた▲當地の産業は、第一が醸酒、第二が製鹽、第三が養蠶である、暴風雨は先づ少い方で、明治十七年に鹽濱が海となつたとがあるだけぢやケナ、流行病も少い方で、明治十一年に虎疫流行した以來絶て無いケナ、宗教は眞宗が七分を占めて居るが、此頃法華宗が布教に勉めて居る、現に數日前の如き態々甲州三界から僧侶が三四人も来て當地法華宗信者の大會を開いたさうナ▲當地の高等小學は、町外より來る生徒を合せて六百名ぐらゐる、尋常小學は當町だけで千百名ぐらゐる、中學は忠海が近いので多くは彼處へ行く、廣島や福山へ行く者もあるとの事、▲頼家は春風、春水、杏坪三先生が出た時が最も盛な時代ぢやつたらう、山陽先生は名聲を一人に集て仕舞つたが、兄弟や従兄弟に聞えた人がない、今の俊直氏は一時代議士となつたが、今は金貸と鹽業、別家の鷹二郎氏は醸酒業との事、

九月三日

藝州川尻

生駒方にて

今朝竹原で頼俊直氏の前を通つたが、玄關に春風館と云ふ扁額が掲げてあつた、俊直氏は春風翁の後を繼いで居ると言ふまでも無い、鷹二郎氏の酒造場は直に春風館の隣である▲尾道以西、女の魚屋が多いが、随分重量のある盤臺を頭へ載せて歩く、それが習慣と爲り遺傳となつて、十二三歳の女子が鮎の皿鉢など入れた盤臺を頭へ載せ歩いてゐるが、其中心點を取に巧みなる、滅多に取り落すとは無いやうである▲松浦氏に町端れまで送られ、程なく吉名、木谷二村を通つた、此二村は周圍が賀茂郡なるに拘らず、豊田郡に屬してゐるのはサツパリ理由が判らない▲三津で十一時ぢやつたが未だ腹が減らないので、内海まで歩いた、此間の路は山の中や田の畦などの細い徑で、案内者がなければ殆んど判らないのであるが、幸ひ内海よりも一ツ先きの中切まで歸ると云ふ老爺と道伴になつて、幾度か『右で御座います、左で御座います』と言はれた、此老爺は記者を役人とも思つたらしく餘程尊敬して居た、先に立て行かせやうと路を譲つてもナカ／＼行ない、始終後から注意して居た、内海でラムチでも飲ませて遣らうと思つたが、振返れば彼は何處かへ立寄たと見えて居らなかつた▲内海から内海跡へ出たが、

路を間違へて海濱へ出て仕舞た、川尻までの路を聞くと、唯だ此濱邊を傳つて行けと教て呉た、其通り行きかけたが潮が未だ干て居ない處があつた、岩角を二つ三つ傳ふたが、肩から脇へ掛け九靴がフラン／＼するなど随分奇觀であつた▲晩の六時に川尻へ着いたが、此處では家毎に船を造つて居る、北に野呂山と云ふ高山があつて、其天然氷は川尻に於ける唯一の財産となつて居る▲宿屋二軒のうち一軒は廢業したとて斷り一軒は病人があるとして斷つた、餘儀なく此家へ泊つたが、此家は木賃宿である、老婦は記者を迎へて先づ米何合炊きましやうかと問ふた、記者は端なく十數年前、遠州掛川に於ての初經驗を腦底から喚起した、行水せよとて湯を沸して呉れたは可いが、鹽の底に着いてゐるだけの湯で、背や腹を碌々洗ふとが出来さつた▲主人に通過證明簿を見せると、頻りに感心して『貴君は東京市から月給を貰つて居られるか』との奇問に接した、呆れ返つて暫くは黙つて居たが、善く言つて聽かして解らして遣つた、

九月四日

藝州吳

和庄町三好樓にて

川尻と云ふ處は、生涯記者の記憶から拭ひ去る可らざる處となつた、生駒と云ふ家は忘れやうとして忘れるとの出来ない家となつた、と言ふのは無比の珍事があつた爲めでもない、記者が今朝四時から七時まで三瀉一吐したので▲内海で食つた魚が少し古かつたか、晩食の菜が悪かつたか、如何考へても爾うては無い、晩食に茶を飲み過ぎた上に寝冷したのである、通常の旅客は浴衣や單衣の一枚や二枚持つてゐるから、木賃宿で浴衣を貸さないでも不自由を感じないが、記者の様な着換の無い者は大に閉口する、シャツとメボン下で寝たが心持が悪いので之を脱ぎ、ヒヤヒヤ汗と垢とに汚れた蒲團を着たが、下は疊へ蕙を敷いただけなのでトウ／＼寝冷したのでちや、醫者に見せたら類似コレラとも言つたらう、二三日静養せよとも言つたらう、記者は九時まで昏々と眠り全身頗る疲勞したが、静養するにしても異が廣島でなければダメと思つて出掛けた、朝飯をと言ふのを辭退して、途中の小料理屋で鮮魚を焼かせ、押し鮮を拵へるとて鮮を混ぜつゝあつた飯を一皿だけ食つた、幾たびか休み西洋西瓜の新しいのを食ひなどして晝飯は食はずに四時少し前當地へ着いた▲川尻の次は仁方ぢやが、井が

淺くて水が清潔である、竹原でも三津でも仁方でも酒造家が多い、酒造家の多いのは水の好いとを證明して居る、水の好いのは結構ぢやが、閉口するのは一町村と一町村の間に必ず十五丁乃至一里ぐらゐの坂のあるとちや▲山陽道は一體に畑山の多い處で到る處素人の刈つた五分刈頭然たる山がある、中には半腹以上に樹林を存して以下を畑にしてゐるのもあり上の方一二分だけに樹木を存して其以下を畑にしてゐるものもある、爾うして此畑山が單獨の場合には無趣味ぢやが、高峯峻嶺を後立としてゐる處は高峯の高峻嶺の峻をして益々高峻ならしむるかの様で、餘程配合が妙である、川尻から觀た野呂山、阿賀から觀た灰ヶ峯などは、即ち此畑山を借つて自家の姿勢を雄偉にして居るのぢや、常陸山、梅ヶ谷等が襍擔ぎの後に泰然として控へてゐる様に▲蘇州の西南部は、一體に高峰峻嶺に富んで居る、阿蘇脈の飛火であらうか、大山脈の支脈か西南に向つたのであらうか、兎に角吳軍港をして關西唯一の鎮守府たらしめたのは灰ヶ峯脈と江田島とであるが、記者は此邊の地勢を細觀する暇がない、縦合暇があつて之を細觀したとても、之を細寫するとは國法の許さない所ぢや、

九月五日

藝州廣島

中野方にて

今朝九時に吳和庄町の宿屋を立つた、朝霧模糊として吳港に満ちて居たが、灰ヶ峯の巍然として雲表へ聳えて居るのが、頗る人意を強うした▲記者は健脚を鼓して、灰ヶ峯と熊ヶ峰間の坂路にかゝつたが、此坂路は曲折が少いので小佛の舊道以來の險路と覺えた、薪や肥桶を附けた馬が前後相踵いて登降して居るが、路の狭い處で行き合つては險呑なので、登る者も降る者もチョット避けて待合してるとが度々ある、のみならず、速く來いと叫び、緩々遣れと呼び、呼吸が餘程六ヶしい、若し經驗の無い馬子
▲記者は坂へかゝつて十餘丁の間、昨朝の病人何くに在ると云ふ勢ひで登つたが、それ以上には溢るゝ如き汗を拭ひつゝ、一歩々々老嫗の僅かに歩む如き態度を取つた、時の茶店に休んだ時、三碗四碗の茶を飲んでも、全身の水分殆んど盡きて居たので、焼石に水の觀あり、到頭ラム子先生に降參して仕舞つた▲峠を降つて行くと一里焼山村を

通り、又も山路にかゝつたが、今度は坂と云ふ程の坂でなく、處々の溪流に手拭を浸しつゝ極めて適意に歩いた、併し随分長い山路で矢野へ出た時は一時半ぢやつた▲矢野けチョット小料理屋もあつて氣の利いた村ぢや、此處の名産はかまじ鬘なので、毛髪を洗つたり干したり揃へたり揃つたりして居る家を多く見受けた、海田市町の名産は金魚と牡蠣ぢやさうだが、金魚屋を調べては見なかつた、二三の金魚賣に行逢つたが、却々立派な金魚を持て居つた▲常市へ五時に着き、増田兄弟活版所を訪ふて、三新聞社と新聞賣捌所へ案内を頼んだ、茲備日々新聞社で主筆早速整爾氏に逢ひ、廣島日报社で吉井鐵腸氏に逢ひ、途上て中國新聞社の山本三郎氏に逢ひ、終に早速氏の定て呉れられた此家へ投宿した、晩食して茲備日々の橋本實明氏に伴れられ集産場(勸工場)其他を見物し、十時半頃より早速氏に招かれ榮亭に橋本氏と三人で飲んだ、お茶羅、駒菊、光龍など云ふ婦人も見え、義太夫の名人三次先生も見えた▲新聞賣捌所で聞けば、社の小野松二郎氏が昨日吳へ行つて、昨夜は吳に泊つたとの事、同じ土地に宿泊しながら逢はなかつたのも亦面白い、

九月六日

藝州廣島

中野方にて

今日は縣廳へ行つて證明を取り、中國新聞社と廣島日報社にて催されたる晝餐を頂戴した、山本文藏と云ふ標札を掲げたる溝口方に於て▲午後、藝備日々新聞社の藤田雪浪氏に案内されて、舊藩主淺野侯の庭園泉亭と饒津公園を見物したが、泉亭は岡山の後樂園ほど修飾して無い、併しこれは比較上の評で、斯う云ふ庭園の多くが天趣を損するまでに修飾してゐるのは、誠に歎すべき次第ぢや▲「泉亭を拜觀せんとする晝は北向ひの事務所へ申出可相成候」と貼紙したるなどはチヨット滑稽である▲饒津公園は適美なる二葉山を負ふて、莊嚴なる饒津神社を取込んでゐる、其華表は嚴島のと同じく杵村のものぢや▲當地の名産は鬘附、牡蠣、柿などで、廣島の三カキと云へば誰でも知つて居る、牡蠣と柿の外に何があるかと云へば肴カキぢやさうナ▲倉敷以西の宿屋で入る風呂は、大抵鐵で浴槽が出来て居る、これは十圓ぐらゐて出来るので、木造の浴槽と價格は同じものぢやが、湯の沸くと非常に速く、薪は木造浴槽の半分ぐらゐて足

りるケナ▲過日、「さうぢやノオ」と書いたが、當地は、「さうてがんすノオ」と言ふのである、東京の女が「タント悪口を仰しやい」と言ふ場合に、當地の女は「エツト言ふてつかさい」▲「多く」が上に付く時は「エツト」、下に付く時は「多ゆ」、東京の「カラ」大阪の「サカイ」は、當地の「ケニ」と相通じて居る、農夫などに山路を問ふて、「二三度『タチ』と云ふ言葉を耳にした、『タチ』は峠である、

九月七日

藝州嚴島

龜福方にて

廿七八年の征清役は、天下の智勇才辯と財力を廣島に集中したが、今や廣島は何等の贏得せるもの無く、依然として牡蠣の廣島たり、傘の廣島たり、爾うして、より多く微毒の廣島たりと云ふ勢ひぢや、これは伊藤大勳位以下の罪であらうが、廣島人士たるもの大に慷慨發憤して匡濟の方を講じなければなるまい▲今日は、雪浪氏と吊影氏に某橋と某橋まで送られ、己斐、古江、草津と坦々砥の如き道を歩いたが、右は隣响峻増たる撥峰疊嶺、左は似島、江田島を眺めつゝ、歩くので實に心持が快かつた、爾う

して嚴島は雲烟縹渺の中から我を招いて居る、五日市廿日市あたりから、嚴島は漸々近く見えて翠色滴らんとし、人家翠微の間に隠見して來た▲四時に赤崎へ着き、暫く待ちて嚴島行の汽船に乗つた、此間は嚴島へ渡る最短距離で、碧水油の如くである、嚴島の巉巖も樹木も華表も五重塔も人家も悉く明白に描き出されて美觀を極めた、嚴島へ着するや、廣島の中野で案内して呉れた龜福方に投じ、此地には電信局は無からうと思つて横臥したが、何時の間にか眠つた、纏て晩食を運び來りし下女に起され、食後散歩に出掛けて電信局を見たので直に打電した▲御本社、大元神社、千疊閣などの古色蒼然たるは、人をして懐古の感に堪へざらしめ、紅葉谷に鹿の歩くを見れば、忽ち寧都を聯想せしめる、街巷は頗る狭く、兩側の店に竹木細工を賣つて居るには、日光を聯想せしめる、杓子の大なるは數石の飯を掬すべく頗る人意を強うするものあり、木皿、盃、簪、根掛に至るまで巧みに彫製し、彩色を施さずして美なるは、我々不器用者をして舌を卷かしむるものあり、記者は此嚴島の美を發揮するに陳々腐々たる漢詩を以てするを好まぬけれども、漢詩先生我をして古人の糟粕を嘗めしめんとするゆ

ゑ、ムクに斷るとも出來ず、陳莽漢を拈り始めた、曰く、「忽訝寧都海上浮、問人始識是嚴洲、水中蘸影大華表、雲裡變形古殿樓、鐘響沈々驚客夢、鹿鳴呦々引羈愁、不妨仙境多商肆、素櫛應梳宮女頭」、これは調に入らないから例の來城等は大笑を催すだらうが、記者は決して斧正を乞はないのぢや、春畝老爺言はずや乃公の詩は詩人の詩では無いぞ、記者は春畝老爺と全然性情行徑を異にしてるが、今はチヨット老爺の假聲を使ふのぢや、

九月八日

防周岩國

阿部方にて

藝州の加茂、安藝二郡は早稻の多い處で、總ての稻の中で早稻の半ば熟したものが三分程あつた、佐伯郡では半ば熟した早稻が一分以下となつて居る、佐伯郡の小方、大竹へ來ると見渡す限り棉畑ぢや▲廣島市と吳町との夜をして明燈々たらしむるものは、賀茂郡廣村の二級瀧である、以前火力電氣を使用して居つた電燈會社は、近來二級瀧と云ふ無盡藏を發見して、水力電氣を用ゐる事になつたのぢや▲會社と云へば、吳町

は何でも株式會社にして居る、劇場は言ふ迄もなく、遊廓も藝妓屋營業も株式會社で、怪物の支配を受けて居る、怪物が怪物の支配を受けるのは怪事でもあるまいが、聽て飲食店も株式會社となるであらう▲竹原警察署で調べて呉れた所に據ると、昨年度竹原町の生産價額は、清酒が二十五萬二千九百九十七圓、鹽田が十萬五千九百十圓、石灰が三萬五千圓、田畑の収入が三萬二千七百二圓八十八錢三厘、雜種地が二千五百八十五圓、製絲會社が二萬四千五百八十八圓四十六錢二厘、煉瓦が二萬三千六百五十圓、絞油が二萬三千百十二圓、煙草會社が七千八百五十圓、醬油が七千六百圓、漁業が五千六百二十四圓九十六錢、寸燐が四千七百五十圓、花筵製造が四千三十二圓、刻昆布が千八百四十六圓二十二錢七厘、蠶業が百六十六圓で、合計五十三萬二千三百四十四圓五十三錢二厘ぢや▲今曉は始めて冷氣を感じた、『朝寒に團扇忘れし道者哉』朝寒に鹿の立たる日向哉『旅籠屋の羊羹旨し今朝の秋』初潮の半ば鳥居を没しけり、何れも出鱈目ぢや▲今朝七時何分の渡船で、矢張り昨日の場所を渡つた、大野、玖波、黒川、小方、大竹を経て、小瀬川の大和橋へ來たが、此橋の中央から蘇州防州が別たれて居

るのぢや、言ひ換ふれば廣島縣と山口縣とが別たれて居るのぢや▲大竹に和洋御料理と看板かけた家があつたので、如何な料理が出来るか入つて見た、俄に牛肉屋へ走るやら魚屋へ走るやら大騒動をしたが、日本料理は吸物と魚軒、西洋料理？は牛肉と牛蒡と卵を煮たもの、酒を飲んで飯を食つて三十錢に足らない、實に氣の毒な様な次第ぢや▲赤崎より新港（周防）までの光景は、昨日の續て右は峰嶺林嶺、左は多島海、殆ど物淋しい程の美觀で、畫圖の中を行く心地がする、新港より右折して當地へ向ふと光景一變田園的趣味になつて居る、鹽氣を帯びた海風は變じて稻香一路客心快、人説今年又有年の稻香風となつて居る▲當地で書肆日新堂主人を尋ね、小野勇氏を尋ねたが不在、渡邊恭介氏方へ小野氏の令嬢に導かれて行つた、令嬢十二三歳、天神髻を戴き、浴衣着て赤白花緒の駒下駄はいて記者の前になり後になり、杉垣の屋敷町を幾度か廻つて渡邊氏の立關へ行き、『恭さんは御宅……』と呼んだ、友達でも呼ぶやうに▲羅漢然たる二十七八歳の恭介氏出て來られて、記者の旅情を慰められ、齒科醫松田實氏方へチヨット立寄つて、終に此家へ案内された、

九月九日 周防呼坂 淺屋にて

今朝、渡邊恭介氏と共に書肆日新堂主人白銀市太郎氏が訪はれ、錦帯橋と吉香神社へ案内された、錦帯橋が日本無雙の名橋たるとは言ふまでもなく、其構造等に就ては案内記等に詳記してある▲吉香神社は、天文年間舊藩主吉川家祖先駿河守元春、越州山形郡新庄村日の山城主であつた時、一祠を建て先靈を奉祀したもので、慶長五年吉川藏人頭廣家岩國に移封となつて、横山村に居館を構へたが、今の吉香神社境内であつた、後正徳年間に本社を越州の新庄村から、居館の西なる城山の麓に遷したが、明治七年四月吉川家の舊臣は吉川家始祖經義を始め、友兼、經基、興經、元春、元長、廣家、經幹の靈を合祀し、明治十九年本社を舊居館の跡に遷したのぢや▲岩國の物産は縮、生絲、蚊帳、半紙、松金油などであるが、昨年度の岩國縮は四十萬反許ぢやつた、養蠶事業は却々盛んで製絲會社が四個所ある、ソコで昨年も秋蠶が二三百石も剩つた、此處で引いた糸は横濱市場で好位置を占めて居る、半紙は粗製品歡迎の世の中に不向

と見えて稍々衰微の方ぢやさうな、松金油は物産と云ふよりは名物と云ふべき物で、其の産額の多少に拘らず、名高いのである▲渡邊、白銀二氏と散歩中に逢つたのは、馬關毎日新聞特派員三戸直樹氏と吉川家歴史編纂係藤田葆翁で、應て第二日新堂書店の二階に晝餐會を催されたが、舊吉川家々老たりし香川速氏も來合された▲岩國は小藩ぢやが、古來多くの人物を出して居る、徠門の俊秀山縣周南も出た、歌學界の清新派香川景樹も出た、明治法官中の傑物玉乃五龍も出た、爾して今日の軍人中には岩國出身の人が却々多い、陸軍中將男爵長谷川好道、陸軍中將井上光、同沖原光孚、陸軍少將有阪成章、同平佐真藏、同佐々木直諸氏は其重なる人で、大佐以下は枚舉に暇あらずぢや▲それから廣島縣知事江木千之、佐賀縣知事香川輝、圖書館長田中稻城、工學博士藤岡市助、同大屋權平、まつた實業界から政治界へも頭を出さうとして居る河上謹一氏も岩國の出身ぢや▲日新堂主人は新聞賣捌業を兼ねて居るので、東京の新聞は何が善く賣れるかと問ふた所が、『それは言ふ迄もなく讀賣新聞です、讀賣新聞の記者中井喜太郎、永田新之允二君は當地の出身ですから……』と答へた▲第二日新堂書店は、

敷丁を隔て、青山に對して居るが、其山が奈良の三笠山などに似て居るとして主人は頻りに有り難がつて居る▲十一時に岩國を立つて、六時に呼坂へ着いたが、峠を四つ越した、併し左程の險坂でないから、四つ合せても呉から灰ヶ峯の坂を越えた半分ぐらの勞ぢやつた、

九月十日

周防富海

佐渡屋にて

周防へ来てから面白い屋根を幾つも見る、岡山では上が藁葺て下を瓦葺にしたのが間々あつたが、周防では藁屋根の頂上をチョット瓦葺にして烟が藁葺瓦葺の中間から出て行くやうにしてある、▲周防は一體に中稻晚稻が多くて、早稻は藝州に較べると遙に少い、けれども其早稻の熟した程度は藝州に優つて居ると見えて、都濃郡戸田村の椿峠あたりでは最早刈つて来て扱いて居つた、尤も藝州の方も昨今刈り始め扱き始めたかも知れない▲周防では却々郡界が八釜しいので、東は玖珂郡西は熊毛郡、東は熊毛郡西は都濃郡、東は都濃郡西は佐波郡と一々規帳面に立石に刻してある▲岡山縣は一

里毎に岡山へ何里の立石があるが、郡界の八釜しい周防にこれの無いのは缺點ぢや▲安藝の南部は一輪の荷物車(小形)が多いが周防へ來ると一向見受ない▲安藝周防には醴を賣らないで、飴湯を善く賣つて居る、備前備中は善く醴を賣つて居るが、それよりも多いのは鯉鮓と索麵を賣る家ぢや▲周防へ來ると何しちよる何書いちよると云ふ風にちよる語の大勢力あるとが判る▲呼坂を今朝七時に立ち、久保、花岡等を早く通つたが、中稻の穂の長いのが露を受け旭光を反射して、紫光を發して居るのは實に美しかった▲徳川へ來たのが十一時過ぎぢやつた、チョット停車場の休憩所へ入つて見たが、新聞は馬關、三田尻のと九州のと大阪毎日とであつた▲徳山ホテル、貞木旅館は共に立派な宿屋ぢや▲富田、福川、戸田諸村を過ぎて椿峠に郡界石を見た、佐波郡へ入つて間もなく、富海町ぢやが、一軒斷りを喰つて、二軒目の佐渡屋へ泊つた、

九月十一日

周防三田尻

石田方にて

今日は富海とのかから三田尻まで二里足らずの道を歩いただけぢや、當地へ着て直に關西日

々新報社を訪ふたが、社主得富太郎氏は不在で、柳鴻堂、寺島雷浪、佐々木左川三氏に逢つた▲左川氏の案内で佐波郡役所へ行き、三吉赫氏に逢つて種々の話を聞いた▲氏の話に據れば、佐波郡は米の産地として聞えて居るので（尤も防州一昧に）、三十三年度の收穫が十萬五千石、裏作の重なるものは麥ぢやが五萬石ぐらゐるとの事、米に次ぐ産物は鹽であるが、鹽田が三百八十町で其産額が四十萬石、價格が五十萬圓ぐらゐるとの事▲米鹽に次ぐものは水産ぢやが、特殊の産物は干蝦で俗に「皮へヤ」と云ふ（皮を剝て干すから）、其産額一萬貫ぐらゐる、其價格は一萬八千圓ぐらゐる、水産物悉皆て八萬九千圓ほどぢやが、河川から出るのは三千圓ほどの事▲紙は古來徳地紙として随分鳴した物ぢやが、今は維新前ほど盛でなく産出價額十五萬圓位、追々土佐などに倣つて改善する筈グナ▲全郡山林の面積は一萬八千餘町で、山林から得る所は、材木一ヶ年十萬圓ぐらゐる、薪炭五千圓ぐらゐるグナ▲西浦焼とて赤味を帯びた素焼と眞白な素焼とがある、産額は少いけれども品質は好いので、一ヶ年の産出價額は四万五千圓ぐらゐるそうナ▲西洋手拭も産額は少いけれども品質が好い、縣下の需用者に供給して居る

のみならず、大阪神戸へも輸出して居る▲養蠶は郡の北部に於て稍盛んで、本年始めて郡全昧に及ぼした▲周防は一昧に氣候の好い方で、肺患などは少いのであるが、他より療養に來た者が肺病の種を時て行くので近來チラホラある、虎疫は十餘年前に流行（これは全國一般ぢやつた）した限で其後は無い、暴風雨洪水等は少い方ぢやが、昨年八月十八日富海にチヨトした海嘯があつた▲津守商會の「園の露」と云ふ菓子名物さうナ、併しこれは殆んど專賣特許と云ふべき物で、一般に通じた物は「外郎ゴロウ」である、これは周防全昧にある様ぢや、長門にもあるか如何だか、行つて見ねば判らない▲郡役所を去り、左川氏に晝餐を饗せられ、此家へ案内された、

九月十二日

周防山口

相原方にて

今朝八時半に三田尻を立つたが、相變らず好天氣で嬉しい、實は昨日午前の好天氣に反して夕方から少しく氣遣しい模様であつたが今朝になつて全然持直したのである▲左川氏は二三丁送つて呉れて東方に穩秀なる太平山を指し、北方に突兀たる右田ヶ岳を

指し、『佐波村と三田尻村とが合併しやうとの話があつた時、彼の山麓の人は多く同意したが、彼の岳麓の人は多く反對したです、山岳の人を感化すると實に恐ろしいとの笑話があつた位です』と、マサカそれほど現金に感化を及ぼしもしまいが、多少の感化は必ずあるだらう▲勝坂橋、嶽後橋を渡つて、有名なる佐波山洞道へ掛つた、此トンネルは長さ五六丁もあつて、丹波の老坂に在るドンネルに較べると三倍ぐらゐある、南方より入つて十四五間も行くと上から少しづつ雫が落ちて來るので、中は追々泥路となつて居るが、泥は益々深くなつて踵を没する位ぢや、素人眼には之をトンネルにしないで切通しにした方が宜さうぢやが、兩方の山から石や土が崩れて來る毎に道普請するのも面倒だらう▲佐波山洞道以北は吉敷郡ぢやが、小鮎村までは早稲が四分以上を占めて居るやうである▲矢田市の小島屋で晝飯を食ひ二時過ぎに山口町へ着き防長新聞社を訪ふて主筆作間久吉氏に逢つた、それから縣廳を襲ふたが、知事も書記官も不在なんで、小橋參事官に逢つて種々の材料を貰つた▲最近の調査に據ると、山口縣全体で米の産額が百三十二萬三千八百八十六石で其價額が千三百三十八萬二千百十二圓

麥の産額が五十四萬一千七百七十八石で其價額三百八萬一千三百十五圓、清酒が二百九十四萬八千九十三圓、石灰が百三十六萬三千二百十七圓、漁獲物が二百四十六萬七千八百七十七圓、別に遠洋漁業の所得三十五萬二千圓、水産製造品七十二萬百三圓、木材の總價格七十一萬四千四百十九圓、竹材の價格七萬三千六百六十四圓、煙草製造高四十六萬七千七百二十四圓、セメント製造高卅八千九百九十四圓、石灰製造高十七萬九千八百八十一圓、木蠟十二萬二千二十一圓、陶磁器十萬九千二百五十四圓との事ぢや、

九月十三日

長州車地

橋本屋にて

今朝、實業新報社の泉本仙太郎氏が訪はれて、龜山公園へ伴れられた、該公園は後に鬱蒼適美なる鴻ノ峰を負ひ、下に山口全街を瞰して、前に古熊山を睨て居る▲爾うして毛利忠正公を始め、徳山、清末、豊浦の三毛利と舊岩國藩主吉川子の五銅像を防長二州の形に造られたる公園上に配置したのは、稍雄壇の趣があるが、鴻ノ峰を背景として居るだけに、人を一して稍崇高の感を起さしめるのである▲記者が此地を去るに臨

んで一種の感慨に打たれたと云ふのは外でもない、薩長政府を極力攻撃したとのある者や、忠正公以下の勤王家を一時謀叛人と看做して居た者共が、今は俯首して此地に牧民官となつて居るのは、老來圭角を銷磨したからであらうか、前々内閣の山縣や前内閣の伊藤が己の郷里へ彼等を用ゐたのは宏量淡懷であらうか、幾分か侮辱の意味を含んで居るのであらうか、彼等相互の間には何等の意味なしとするも幾分の哲氣と詩趣を帯びた記者の眼には、天が人の運命を弄する如く觀えて、覺えず幾滴の涙を墮すのである▲泉本氏の案内で湯田町の温泉を參觀したが、其中の一軒の如きは第五師團負傷兵の爲めに貸切つて居る▲參觀して居るうちに一浴したくなつた、遂に二人で香錦泉に浴し、晝食を了り、泉本氏に朝田まで送られて、別れる時に茶店で喰つた茶菓子「外郎」と云ふもので、チヨット羊羹の様に見えるが、赤豆、砂糖、寒天の外に米か小麥の粉を含んで居るらしく覺えた▲園の露と云ふ菓子を昨夜食つたが、ポーロと殆んど同じ味ぢやつた、まだ池の月と云ふのがあるが、柚子の香ある干菓子で、形はチヨット煎餅のやうに平面の圓形ぢや▲呼坂と三田尻の宿屋では、客を浴槽中へ入らせ

ないで、浴槽に沸かした湯を盥へ取つて行水せしめた▲山口ではお嬢さんを「ゴーマー」と言ひ、坊ちゃんを「ダンボー」と言ひ來つたのであるが、近來は外來人に化せられて、追々お嬢さん杯言ひ始めた、福岡のシャン／＼（お嬢さん）ホン／＼（坊ちゃん）は改まりつゝあるか如何だか、

九月十四日

長州小月

筋屋にて



を書い

今朝、車地を立つて九時半に船木へ着いた、此處の名産は柿なんて、た看板が幾つも眼に觸れた、中には宮内省御用の五字を筆太に記した堂々たる看板もある、木曾路の葦原で賣つて居るお六柿は素地の儘で随分朴野なものぢやが、此處のは素地の外に綺麗に塗つたのがある、尤も朱塗が多い▲船木警察署長は何と云ふ仁だか、玄關近き窓に傍ふて卓を置き、記者が通過證明簿を鞆から出すと、「こちらへお出し下さい」と言つてサツサと自分で證明を書いて除けた、他の警察署長の様に首を捻つたり、澁々書記を呼んで書かせたりせぬのは却々敏快なものぢや、此仁の話に據れ

ば、船木は何れの停車場へも一里以上あるので、京阪から九州へかけての巨盗などを捕ふるとは六ヶしい、命令傳はつて二人曳の車を停車場へ驅つた所で、最早間に合はぬゲナ▲防州の道は多く軟土なんて、晴天が数日續けば、宛然粉の中を歩くやうに、頭の頂顛まで埃まぶれになる、長州は之に反して石逕が多いので埃は立たないが足に豆が出来る、草鞋が早く破れる▲葺葺屋根の上部を瓦葺にした家は、防州で間々見だが、長州へ來ると漸々多く見受ける、爾うして長州の瓦屋根は銅色が多い、これは黒瓦の屋根よりは堅牢で能く雪などに耐へる、加賀以北には此種の瓦を多く用ゐて居る▲船木から厚狭、厚狭から埴生と、無趣味な低い山や畑ぢやが、埴生へ出る少し前から山盡きて海潤く、鎮西の峯嶺、或は突兀として、孤高或は起伏して波状、爾して小月から馬關へかけて後に負ふて居る豊浦山脈は屏風の如く、遠碧は糺糊として煙を帯び、近翠は濃色滴らんとする好景人をして心神恍惚たらしめるのである▲埴生を離れて西へ來ると、海濱に幾株の蟠松ありて、清蔭慰ふべく盤根踞すべく出來て居る、ソコで記者は昨日泉本氏に入れて貰つた葡萄酒々錫盃について三つ四つ傾けた、海風

忽ち帽子を吹き飛ばすなど亦一興ぢやつた、平生一合や二合の酒に酔はない記者は、如何いふ加減か、三四盃の葡萄酒に酔つて、俳句や新林詩や七言絶句が頭腦中に湧き溢れた、而もヒールの池のやうに忽ち消えて跡方なく、天女降り來つて我頭上に雲錦の帽子を置いた様な想を臆氣に覺えて居る▲小月近くなつてから馬關毎日新聞社の通信員岡崎幸右衛門氏の出迎へらるゝに逢ひ、小月唯一の新聞賣捌所藤永幸藏氏方へ案内せられ、此に一茶して昨日の二六新報を瞥見し、聽て此家に案内されたが、藤永、岡崎二氏にて晚餐を催された、

九月十五日

長州馬關

錦波樓にて

今朝、岡崎幸右衛門氏に送られて、雑話しつゝ神田橋と云ふのへ來た、橋を越えて岡崎氏に別れ、長府村へ來ると十一時半なので牛屋へ入つた、未だ飯を炊て居ないと云ふので、飯屋へ行つた、鮎を作らせて飯を食ひ始めたが、副食が足りないので鳥賊の煎付を取つた、鮎が八錢、鳥賊が五錢、飯が三碗で六錢など書けば、平凡で冗漫で

讀者を倦厭せしめる▲平沙落日無王氣、血戰餘聲有怒濤の埓浦を横に視て、先づ馬關へ入ると阿彌陀寺町を通るが、今は阿彌陀寺が無い、山陽が「文字關頭澹夕暉、彌陀寺畔雨霏々、水濱欲問前朝事、唯有輕鷗背我飛」と詠じたのは此邊ぢやが、阿彌陀寺が無くては、大に懐古の感を殺がれる▲外濱の丘上に龜山八幡宮を仰ぎ視て、磴道幾十級を躋ると、祠門の扁額に「鎮西第一勝」と題してある、而かも金文字で▲俯して碧波に去來する布帆を視、前に豊州の青山を眺め、月影雁聲の下に古を偲び人を懐ふに於ては鎮西第一勝と感ぜないとも言へぬが、汽船黒烟を吐て大氣を汚し、ヒーロー、ピンヘット、アサロピールの廣告が青山を漬してゐるのを觀ると、如何しても鎮西第一勝とは思はれ無い▲入江町の山名曲江堂へ東京の新聞を買ひに行つたが、停車場へ持つて行つてゐるとの事で、態々停車場まで行つた、路狭うして路次の如く、處によつては三四級の石段がある位ぢやから、車で行く紳士方の困難は一通りて無い、尾道をして三舍を避けしめると謂つても可からう▲山名曲江堂は、其昔文人墨客が多く宿泊した家で、山陽は二年餘りも此家に下宿し、日本外史の稿は此家で書き始めたさうな▲

山陽道ではサ、ハ、サ、節を到る處で聴く、殆んど聴かぬ處はない、これは三味線に諧ひ易く、如何なる田舎藝者も弾き得るので、善く流行し善く永續するのぢやゲナ▲馬關の言葉はち出てナンセエ、ち上りナンセエと言ふので、多いとをゴツポオと言ふ、併し近來ゴツポオは減少して、近在の農夫に存する位さうな、

九月十六日

長州馬關

錦波樓にて

當地は言ふ迄もなく長崎神戸間に位する要港にして且つ要塞地なので、地勢の好いとは此上もない、當地の勢力は海岸に軒を列べて居る問屋と仲買と要塞兵である▲斯る土地には免れ難い事て藝妓三四百名、娼妓五六百名ある上に、無數の密賣淫があつて、常に風紀を紊亂して居る、けれども當地の人は伊藤大勳位を崇拜してゐるから、當地の警察は伊藤等に憚つて藝妓などの賣淫を嚴罰する事が出來ない、ソコで藝妓等の跋扈は甚だしいゲナ▲所が此家の亭主は耶蘇教信者なので、客が藝妓を聘ぶとを拒絶する、藝妓の方でも錦波樓などへ行つて遣るものと睨合になつて居る、ソコで隣座敷で

ドンチャン騒ぐのを厭がる者は多く此家へ泊る、記者も其一人ぢや▲今日、大阪朝日の馬關受持記者宮崎勇熊氏が訪はれ、次て馬關商報の吉川潤二郎氏が訪はれた、吉川氏は我々の出發以前に名古屋の新愛知社から立寄れと言越されたのぢやが、當地で相逢ふとは思ひ設けなかつた、何となく一見如舊の感がある▲午後四時より宮崎氏に案内されて、安徳天皇御陵を拜し、春帆樓に登つて日清媾和談判のあつた大廣間を歩き、李鴻章の旅館に當てた引接寺をも見た▲春帆樓の三階はチヨット眺望が好いのぢやが對岸の淺野セメント工場の煤烟と青山の廣告が目障りてならぬ、醇いやうぢやが▲馬關の街巷の狭いとは前便にもチヨット書いたが、或旅客の如きは、船て馬關の汽船宿へ上り、道路へ出て見て馬關の裏小路は非常に廣いと言ひ、それから又これは、したり本通りがないと言つたゲナ▲今夜、積翠樓で晚餐會を催されて、關門新報の遠山竹茂氏、門司新報の寺山仁作氏、馬關商業通信社惣川操吾氏、大阪朝日の宮崎勇熊氏、馬關商報社の土岐鉞太郎、梶間春三、吉川潤二郎三氏が見えた、島崎亭の七五三、對帆樓の小力が來たが、『馬關對帆樓小力仕親至孝、幽婉而解韻事』と曾水氏の書いたのを見れば、小力が尋常一様の妓でないことが判る、

九月十七日

長州川棚

於多福樓にて

今朝、福岡日々新聞社門司受持記者丁吉治氏が訪はれた、記者は民友社に於て氏と相識つて居たが、殆ど十年も逢はざつたのぢや、今朝、電話で十年前の聲を聴き、一時問ばかり經てから、十年來の面を合せた、記者の面は十年前と少し變つて居るかも知らぬが、丁君の面は餘り變つて居らぬ▲次て吉川曾水氏が訪はれ城貫一氏が訪はれた(病を勉めて)、吉川君は記者を川棚まで送つて呉れらるゝ約束なので、記者は丁君にも川棚温泉まで同行を勧めた、チヨット送つて呉れられよと強迫した様にも聞えるが、出立を急ぐ記者は勢ひ斯く勧めざるを得ざつた▲丁君快諾して三人同行したが、洋服の二人は確かに役人、記者は何とも譯が判らないので行き逢ふ人々皆首を傾て居つた▲安岡驛で『樂天さんですか』と店頭から呼止めた人があつた、此人は二六の愛讀者磯部吉太郎氏て三人を呼入れて安岡饅頭を御馳走され、羽織を着て十二三丁送つて來られ

た、氏の話に據れば、安岡の産物は魚類と布^{よりの}、其次の横野、福江兩村は野菜を多く作り、馬關門司を始め福岡邊まで野菜を供給して居る、野菜を擔つて馬關へ行く者は大抵女で、着物の裾を高く塞げて脚絆を穿て居る、其男と共に رفتる者は、歸路男から蝠傘をさし、かけられたり、男を我肩へ倚らせたりして居る▲福江で晝飯を食つたが鯖の魚軒と鯛の煎付などあり、飯が足らなけりや索麵を食ふ約束ぢやつたが、飯の足りたに拘はらず三人とも索麵を食つた▲鳩島と云ふ島のおあたりは、却々の好景で六連島を左手に眺め、遠く筑前の連山を見るのぢや▲今夕、此家に着いて、三人温泉に一浴し來つて、一飲したのは最も愉快ぢやつた、

九月十八日

長州栗野

温泉場にて

昨夜泊つた川棚温泉は、餘り世間に聞えて居らぬが、浴室の構造など却々立派に出來て居る、浴室の周圍は花崗石で疊み、二階の窓から水蒸氣が出て行く様にしてあるのでチヨット氣が利いて居る▲今から五年十年と經つ間に、此温泉も俗了して嬌歌艶舞の

場となるかも知れないが、今日の所では、絃歌の聲を聴かうとしても聴くことが出來ないので、實に静寂清淨、一週間も此處に居たらば、仙人になつて仕舞ふだらうと思はれる位ぢや▲吉川氏は四年前此温泉に二週間ほど療養したことがあるので、於多福樓の亭主や主婦や近所の人達から頻りにお辭儀された▲海までは二十幾丁ぢやが、魚類は不自由な方なので、鶏肉を食ふとになつた、三人鼎座、適意に飲み、適意に食ひ、適意に語り、適意に眠つたが、今朝、吉川、丁兩氏に別れて餘程淋しく感じた▲道路は言ふ迄もなく國道が一等道路、小月から萩へ出るのが二等道路、記者が歩きつゝある西海岸から北の方へ廻るのが三等道路ぢやが、安岡から小串までの道は、一等道路にも優るほどの埴土路で石もなく埃も立たない、湯玉近くなつてから小砂利の路で大豆ほどの礫が時々草鞋と足の間へ入るのに閉口した▲小串と湯玉の間は海岸ばかり歩くのぢやが、清澄透徹底の見ゆる碧波が山根の片麻岩を洗つて居るのは實に心持の好いもので、願くは大魚となつて碧波に跳らんと叫ばしめるのぢや▲南に鳩島や六連島を遠く近く濃く淡く望み、西南に兩筑の連山雲の如きを望めば、恍然神往、俗界の仕

事が厭になるのである▲二見と云ふ處は伊勢の二見のやうに大小二岩の間に七五三繩を張つてある、此邊も眺望絶佳であるが、好景に見とれてる記者の傍へガサ／＼と音して落ちた物がある、驚き見れば一束の柴なんて、仰ぎ見れば屏風を立つたやうな山腹に柴刈つて居る夫婦の者があつた▲百戸ばかりの二見村へ着て晝飯を食つたが、奥襟然たる二婦人が、「一日一夜汽車と人力車と馬車に乗りつめちやて、ケツ(腎)が痛たうてならぬ」と話して居る、此二婦人は竹皮草履を買はうと言つて居ながら、却々容易に買はない、一人前三十五錢の馬車に乗らうか乗るまいか經營最中で一錢の草履も無駄には買はぬのである▲聽て小串の馬車は來たが、二婦人は乗つたか乗らないか、記者が粟野へ着くまで馬車の追付かないのを見れば、歩いたのぢやらうかとも思つたが、記者が着いてから三四十分も過て馬車は着いた、二婦人を載せて來たか如何か判らない、

九月十九日

長州深川温泉

清音亭にて

昨夜泊つた粟野温泉場は、冷泉を沸かすのぢやが、此頃釜が損じて休業して居る、記者が粟野橋を越えて二三丁行つた處で、一老嫗に湯場を問ふた時、彼は斯う答へた『釜がメゲてヤウぢよる』とヤウは止の意、『よしぢよる』と譯すべきであらう▲田舎の子供ほど憐れな者は無い、『己れも役人を見たぜ、湯場て見たぜ』と其友達に誇つて居る者さへある▲駄菓子屋で休憩したが妻は一生懸命に機織りつゝあつて茶を汲まうともせず、夫は蠟燭製造に忙しいので挨拶もしない、癪に障つたから、『蠟燭は随分麻かる物でしやう』と言つて遣つた、スルト『誠に利のカスイ物で御座ります』と答へた▲『三千世界の鴉を殺し主と朝寝がして見たい』の都々逸を残した外には、餘り要領を得ないので、高襟連から東洋豪傑の標本の様に看做されてる高杉東行の墓は、厚狭郡吉田にあるのぢやが見るとを得ざつた▲今朝粟野を立つて人丸峠までは五六人しか行き逢はざつた、半島遠く西へ突出して、海水深く灣入せる頭の人丸神社があるので、正二位人丸大明神でふ金字額はチョット難有くも見える▲古市で晝飯を食つたが、又も鯖の魚軒ぢやつた、一昨日からこれ三度晝飯の副食物を同ふして居る▲伊上と云ふ處で

菓子を食べうとしたが、餡と皮との間に虫を發見して棄てた、ソコで葛落雁を嚙つたが、これは虫臭くは無かつた▲正明市から北方の海上には、一大島即ち青海島が横はつて居るが、人丸神社の西北に突出して居る半島と同じ位の大きさて、何れも半ば林巒半ば畑山ぢやが、彼は半島、此は純島だけに青海島が面白く見える、

九月二十日

長州萩

吉原屋にて

昨夜來風雨で、流水清音物外心と題してある清音亭は却て悪音亭ぢやつた、今朝は風雨を冒して立つたが、午後一時半から風歇んで雨ばかりになつた▲昨夜の深川温泉から正明市までは、同じ道を重複するので、温泉に入りたい一心から二里二十丁の道を餘計に歩いたのぢやが、温泉に入浴ると全身打たれた様にダルクなる、加之に風雨と來たので、今日の進行は餘程骨が折れた▲宿屋で寄附して呉れた草鞋は澤江で破れ、此處で穿き換へた草鞋は三見で破れたと云ふものは單に雨天の爲めばかりでなく、砂利路と坂路が多いからである、宗頭から萩の手前の山田村までは、往くが如く復るが如

き坂路でチヨット方角が判らなくなつた▲併し一峯去つて一峰來り、送迎に違なき松峰杉嶺草山赭岳を烟雨横さまに過ぐる光景は壯絶快絶で、夕陽僅かに顔を出して、大虹萬山を跨つた光景は絶美であつた▲豊原で晝飯を食つて、最初役人扱ひされて居たが、大茶碗に四碗食つて、キマリの魚軒（今日は鯖ぢや無い鯉か何かぢやつた）の外に石決明の砂糖煮を注文して平げて仕舞つたから、呆れ返つて役人扱を中止した▲當國では風の歇むとを風が落ちたと言ふ、又た湯の溫度を酒の爛と混じて、お爛は如何で御座いますと問ふのぢや、最初はお加減を早口に言ふのぢやらうと思つたが、爛が微温う御座りますと温泉で言つたので、明白に爛と言ふのが判つた、餘程上戸の跋扈する國と見える、けれども感心に「御酒を上りますか」などと宿屋の方から持ち懸けないで、一杯飲まうと思ふ時でも唐突に飯を持つて來る、ツイ面倒臭いので飲まぬとが多い、質樸と謂つて可からうか、商賣が下手ぢやと謂つて可からうか▲萩では未だ調べて見ないが、小月では宿屋が料理屋を兼業するとの出來ない爲め、*ンの申譯ばかりに棟を別にして兼業して居る、爾うして藝妓と云ふよりは賣淫婦と云ふべき者が

珍重されて、風儀は随分亂れて居る、一體に寄留民が多く、殊に労働者の寄留多き爲めに風俗を壞亂されることが多い▲大津郡の重なる産物は米と鯨である、米は長防一體ぢやが、長州では大津郡が一等さうな、又鯨は此郡と阿武郡ぢやが、重もに此郡で捕獲するゲナ、

九月廿一日

長州地福

岩見屋にて

慶長寛永以來鬱積磅礴して居つた毛利家の不平は、嘉永安政以來尊王賤霸の機運に乗じて、雲蒸龍變の勢を逞ふし、長州の僻地に松陰東行以下の英傑前後輩出したは可かつたが、今では死せる噴火山となつて居る、特に今の所謂元老等の出た萩の城下は酷いもので、木樵や枳殻の破れ垣と傾いた半ば毀れた家が残つて居るばかり、荒廢を極めて亡國の感を生ずる▲近來青年會と云ふものが、各郡各町村に設けられて居るけれども、東京へ遊學して居る者を夏季に迎へて秋季に送る所の送迎機關たるに止まり、何等の研究をするでもなく、ノンベンクラリとしたもので、誠に愛想の盡きる次第ぢや

ゲナ▲「里を離れし草の屋に二人の外は虫の聲……有明の消えて嬉しい窓の月」と萩の宿屋で唄ふて居たのを聴たが、草の屋に虫の聲、幽霊でも出さうなのが今日の萩である▲けれども萩の地たる、山口へ出るにも、津和野へ出るにも、馬關へ出るにも羊腸たる山路を越えねばならぬ不自由な地だけに、兵要上頗る着目すべき地である、此地に要塞兵の置いてないのは遺憾である▲殊に遺憾な事は、萩から津和野へ出る間の山が多くは裸林で雜草菁々の間に岩角の露出してる位に止まり、樹木頗る少き事である、併し生雲いぶきに近い小山に點綴してる岩石は概して墓碑の如く庭石の如くて天然の大庭園を爲し、一種の美觀である▲播州邊でヤニコイと云ふ言葉は、卑濕若くは汚穢に當るが、長防では道路の險惡なるをもヤニコイと言ふのぢや、奈古、宇田の海岸線を行かうと思つたが、日本一のヤニコイ坂路だからとて、宿屋で頻りに止めたので、津和野の方へ出るとにした▲萩の東の松本から山路にかゝるが信州の鹽尻峠ぐらゐである、この松本峠の外は小さい坂を二つ三つ越えるだけぢや、

九月廿二日 石州津和野 山崎方にて

昨夜泊つた地福は、チョット好い處である、都會として好いのは無いが、萩以來草山の多いに拘らず、地福は後に鬱蒼たる山を負ふて居る、尤もこれは低い山で高山は大概草山である▲地福から徳佐までは、百年以上も過つた並木や潤葉多き灌木や、半ば、熟した稲田で、空氣の清淨なること比類なき程ぢや、唯だ厭なのは前逕後叢蛇の多いとて、これは此頃の朝寒に日向ぼつこしてゐるのであらう▲徳佐には小松屋、平野屋、河内屋などの宿屋があつて、私設駐車場に馬車人力車の用意十分である▲徳佐と當地との間は、電信柱百五六十本で、長門石見の境界には矢張り大きな棒杭が立つて居る、爾うして石見になつてから十四五間歩くと、茶屋が二軒ある、此處で休んで例の餅を食た、何處でも峠の茶屋に餅があるから、例の字を用ゐたのぢや▲餅の中には蕨屑もあり、餡の中には甘蔗の皮もあると云ふ梅鹽で、馬子か牛追ひてなければ食へた物ぢや無いが、貴族的紳士的大々贅澤的の記者も此頃は田舎の食物に慣れて馬子の食物を食ひ得る様になつて居る▲當地へ着し直に晝食をしたが、最早一時半であつた、

郡役所と五十三銀行を訪へば、少しは要領を得る筈ぢやが、日曜ぢやから駄目である▲ソコで例の通り警察署を襲ふた、當直警部に種々質問したが、産物は紙と茶、養蠶も少々遺つて居るとの事▲一體この地は昔氣質の人が多し、それで彼は士族、彼は平民、彼は大きい士族、彼は小さい士族など言つて、數年前までは随分縁談なども面倒ぢやつたが、近來は餘程斯る風習を脱して來た▲士族は所謂神道を以て冠婚葬祭を遣り、平民は佛教特に真宗の信者が多い▲初等教育は一般に普及して居る方で、各縣の比較を見ても一等の部へ入つて居る▲衛生には随分注意する上に、空氣の好い處なので、流行病は先少い方ぢや、赤痢患者は頃日一名だけ出來た▲富の低いと同時に、生活も一體に質素な方で、當町の風俗は他縣に比べて優て居る、併し村落の方は當町に比べると遙に劣て居る▲賭博犯も折々はあるが、社會制裁の嚴なる士族が一勢力たる當町では甚しいとは無い▲當町から出た人物は、故西周氏、福羽美靜氏、森林太郎氏、小藤文次郎氏等である、

九月廿三日

石州益田

大谷屋にて

昨夜泊つた津和野町の山崎は、師團長(廣島)旅團長(山口)聯隊長(濱田)等の泊つた爲めに上を下への大騒動で、殆んど徹宵眠らない様子ぢやつた▲ソコで記者等にも、此等軍人諸君と同様の膳部を供したと云ふものは、安眠を妨害したからそれを償ふと云ふ趣旨ぢやが、實は残肴が澤山あるから我等の膳にも付けたのらしい、爾う判つて仕舞へば馬鹿々々しいやうでもある▲長州から津和野へかけて「あかー」と母親を呼んで居る、津野和町までブツ付けにヤア電信は無いと奥様風の婦人も遣つて居る▲木曾路や美濃の東部で農夫や大工が「カルサン」と云ふ物を穿いてるのを見たが、津和野邊でも矢張り盛に行はれてるが、津和野で之を何と云ふかと問ふたら、猿袴と云ふとの事ぢや▲高角と云ふ長橋を越えて高津の柿本神社へ詣つたが、小高い丘上の森に朱塗の高殿があるのは、チヨット莊麗の感を浮ばしめた、唯だ獨判斷辻占と云ふ大きな塗箱を拜殿に備へ付け、氣運縁談待人失物などを占ひたい者は、一錢を上穴から入るれば辻占が下の穴から出て来る、誠に早や興の醒めた次第ぢや▲「名所月」と云ふ兼題で、

来る廿九日午後より柿本神社の樓門に歌會を催すとはチヨット面白い▲石州は一哩の鐵道も無い代りに道路は却々立派なものぢや、松江より五十七里と云ふ杭が津和野にあつて、一里毎に漸々減るのが記者には愉快で耐らぬ、爾うして津和野へ一里七丁九間四分と云ふのが初めて、五六里の間は一里づゝ増して七丁九間四分が付いて居る▲日原で晝飯を食つたが、三十七八の男と十八九の娘と二輛の車を驅つて勢よく付けたので、茶屋の者どもは之を奥の間へ通して頻りに首を傾け私語き合つて居た、チヨット判らないが駈落とは見えない、山口か馬關へ雇れて行く女らしく、それを連れて歸る男らしく見えな▲青原から少し来ると、岩角多き崖下に鹿足郡と美濃郡の境界杭が立つてるが、下は津和野川の清流で鮎釣る五六人が同じ向きに竿を列べて立ち、青原以南の林縊低くして青野ヶ岳其頂を露出してるのはチヨット面白い、青野ヶ岳は津和野の東に兀然と聳えてる高山なんである▲横田から少し来ると、青野ヶ岳と相對して居る高山が見える、これは長州阿武郡の生雲地福の間に聳えてる大藏ヶ岳で、此二山が煙靄模糊たる間に對立して、其中間の低い處は、津和野、地福、山口、小郡、小月、

馬關に通じてると思へば、低徊願望の感に耐へない、

百六十二

九月廿四日

石州濱田

大和館にて

今朝、益田を立つた時、四五間ほど記者に先つて行く人があつた、其人は麻の半纏に縮緬の兵見帯を締め、脚絆ばき草鞋ばきで、脚力却々強挺、逢ふ人毎に三隅まで参りますと誇り顔に言つた、宛然今の時節に三隅まで徒歩する者は無からう、己の健脚を見よと吹聴するやうに▲記者は此の先生に跟着行かうと思つて、大に骨折つて見たが、見る／＼二三丁後れ、五六丁後れて、其後塵を拜するとも出来なくなつて仕舞つた▲所が土田と云ふ處へ來ると、例の先生茶屋の椽に休んで御座る、休んで御座るは可いが、三隅まで歸り車と云ふのに二十三錢で乗つて仕舞つた、後に残つた二人の車夫の評が面白い、三里近い處を二十三錢ぢや餘り廉いが、あないに裝束を固めてマケな歩くと言れると、ついマケて仕舞ふテ▲遠田と云ふ處で、土方が五六人仕事して居たが、二丁ほど離れた處で、記者を囃した、『好う似合ひますぜエ、好う似合ひますぜエ』と「絲

だて」を着たのが、善くうつると云ふ意味ぢやが、無論これは反語で不似合なりと嘲つたのである、何國も同じ土方仲間の口の悪さよ▲今日の道は津和野益田間に較べると坂があつて登降が多かつたが、決して悪い方ぢや無かつた▲遠足した中學生らしき五六人を周布て見たが、村の若者にも安う参りましょかとからかはれて三錢なら乗るとなどと笑ひとよめいてズン／＼行つた▲記者が六時過に濱田の瀬戸見町まで來ると、向ふから兩紳士が見えた、年少の方が先づ帽を取つて樂天君ですか、今迎ひに出る所で……と挨拶された、此仁は豫て立寄れと言越された松原英一氏で、年長有髯の方は濱田日報社の村上百太郎氏である▲記者は二氏に導かれて此家へ泊つたが、濱田日報社の原啓、山田信太郎二氏も訪はれて、旅情を慰められた、

九月廿五日

石州濱田

大和館にて

當地の港は底が深いに拘らず、極狭い方なので、貿易港にはなつて居るが、輸出入は極々少い方である、氣候は極暑極寒と言つても大したとは無いが、秋から冬へかけて西

百六十三

北の風が始終吹くので不漁が多いと云うナ▲一昨年八月の調査に據ると當地の戸數が二千五百四十六で、商業七百十二戸、漁業四百七十八戸である、漁業者の多いこと此通りて、漁船は百七十二艘あり、其内百十四五艘は遠洋漁業に従事してゐるが、對州近海に出漁する者が最も多い、山口廣島二縣の漁業者が對州近海へ一番多く出掛けるが、其次は島根縣であるさうナ▲歩兵第二十一聯隊は石見村(當地と家續き)に置いてある聯隊長は歩兵大佐竹中安太郎氏で、過日第五師團長山口素臣氏と津和野の山崎方へ宿泊したのは此人なんである▲當地は廣島の感化を受くるとが最も多いので、廿七八年征清役以來軍人熱に浮されてると廣島と同じで、苟も娘を持てる親達は軍人を婿にするのが無上の光榮、能はざる者は指を啣へて最大耻辱と心得て居るゲナ▲去る十四、十五の兩日、當地に於て招魂祭を舉行したが、實に前古未曾有の盛舉で、それが爲めに當町へ落ちた金額は七万圓以上との話ぢや、尤も費つた金額も随分多いだらう▲當地の言葉に面白いのがある、齒の痛むとを齒が、ハシルと言ひ、下さいを遣んさいと言ひ、耐うしなさいを耐うしんさいと言ひ、着なさい、來なさいは、何れも、キンサイと言ふ

▲本日松原氏につれられて龜山へ上つたが、西北は渺茫たる大漠を眺め、西南は巍然鬱然たる大麻山を睨み、濱田外浦二港を眼下に見下し、何とも言へぬ壯觀である上に、風雨横さまに龜山城趾に濺ぎ來て、當年の兵燹を憶起さしめ、壯極まる處悲痛の感を、惹起さしめた、

九月廿六日

石州江津

八神方にて

今朝、濱田日報社へ行つて村上浮沈氏に謝辭を陳べ、濱田警察署へ行つて證明を取つた、濱田には藝妓四十三人、娼妓六十二人ありて、密賣淫も随分多い、賭博犯も随分多いとの話▲島根縣へ入つてから俵を見ると、皆な益田第何號、濱田第何號と記しありて、往々百何十號と記したのを見るけれども、これは濱田近在益田近在のを合せた數で、濱田町では昨年の調べて人力車が七十二輛、今は八十輛にもなつて居るだらうとの事▲宗教は大抵佛教で而も眞宗ぢやが、濱田には東本願寺派の信徒が多く、江津には西本願寺派が多い▲江津の産物と云へば、江津焼と瓦ぐらゐの物ぢやが、此處は貨物を

製造するよりは、集散する場所である、材木薪炭等は邑智郡の山奥から江ノ川を下つて馬關、門司、若松、福岡、大阪などへ行き、鯖、鰯、烏賊、鰯、干鰯などは江ノ川を溯つて備後へまで行く、舟は三次(備後)まで上下するのぢや▲今日は松原氏に二十一聯隊の建築物のある石見村まで送られたが、其途中に於て三好と云ふ理髮舗へ立寄つた、此處の亭主は却々の二六最負で、二六新報を原價の儘で取次がうとまで熱衷したとの事である、記者の想像では氣焰不可當男だらうと思つたに、極めて老實な男であつた▲松原氏に別れてから、山間を紆餘曲折した道ばかり歩いたが、道の曲折多きに關らず光景の變化は極めて少かつた、畢竟六曲の屏風、平々奇なして、二宮と云ふ處の海濱へ出て、怒潮岸を拍ち飛沫雪の如きを見た時だけ壯快であつた、▲濱田江津間の農夫などが脊負ふて居る籠は、蕎麥屋のザルの様で、上開き下すぼみ、背に當る所だけ平で、他の三面は稍膨れた形の物ぢや、尤もこれには籠ばかりでなく、竹を骨として細て編んだのもある▲當地では甘酒を甘粥と言ひ、物の賣切れたことをミチましたと言ふ、東京の商人がドーも生憎様皆になりましたと言ふやうなものぢや、

九月廿七日

石州温泉津

吉田屋にて

昨夜、松原英一氏の紹介して呉れた中谷昌左氏に逢つた、同氏は教育家だけに教育に就ての談話が多かつた、氏の話に據れば前の江津村長は非常な教育熱心家で全力を教育に集中したと謂つても可い程であつたゲナ▲今の江津村長も前村長に劣らない教育熱心家で、村の有志者も此等村長に感化されて、旅行する毎に高等小學教育に必要な土産物を買つて来る、曰く地圖、曰く動植物の標本、曰く體操器械、其他種々雑多の物▲今日は此中谷氏の紹介を持って温泉津へ來た、温泉津と云へば、其名を示す如く石州唯一の温泉場である、五百戸許りの處に五六十戸の温泉宿があるのを見ても其盛なのが判つて居る、苟も電信局を置かない石州に於て、態々温泉津に電信局を置いて居るのを見ても温泉の勢力が判る▲當地温泉宿の下女等は大抵給金なしで働き、客からの貰ひを給料の代りにして居る、故に往々客の機嫌を取り過ぎて風俗紊亂となるさうナ▲中谷氏の紹介で逢つたのは森山鼎、木島是一の兩氏である、森山氏は醫者で木島氏

は教師ぢやが、森山氏の家へ逢つたのが、備後尾道近在の青柳庵如水と云ふ宗匠で、社の豹隱居士を知つて居るさうナ▲この宗匠温泉津へ入浴に來てるうちに出來た弟子が十幾人、今夜は觀月會を兼ねての俳句會(否開卷會)を近所の家へ催された、記者は森山氏に誘はれて開卷會を拜聴に罷り出て、名句を澤山に拜聴し、酒の出る時分に辭して歸宿した、決して酒を恐れはしないが、温泉に二度はいつて眠むたくなつて居るからぢや▲今朝、江ノ川を渡つて少し來ると一商人と道連れになつたが、此男は頻りに當地方の不景氣を説き、且つ江ノ川沿岸を除けば瘠地で、米も野菜も出來が悪いと話し、何を問ふても嘆息の聲を帯びて答へた、爾うして頻りに昔の長州征伐を説き、記者が長州征伐は未だ生れない前の事ぢやから善く知らぬと言ふを聞いて、若いナア／＼と記者の顔を見詰め、長州征伐を知らないでは話せないと云ふ意味を満面に表白した、併し記者は此男何者かのなれのはてだらう杯とは猜しなかつた、無學なる上に、談話が野卑で、最初に先づ記者の給料旅費などを問たから▲或る茶店に休んで、記者が茶を飲んだだけに五錢置いたとて、彼は『立派になさるナア』とて頻りに感歎し、此地方の

者は休む時に一錢の菓子食や一錢拂ひ、二錢の菓子食や二錢拂ふだけで、茶はタゞてすと話した、成程爾うであらう、休憩する時に何も食はないと店の者が喜ばない、中には何ぞも食べなさいと勧める者もある、五錢の茶代に態々店前へ出て丁寧に謝辭を述べ半丁も一丁も目送して居るのがある▲黒松で晝飯を食つて居た時、一人の壯年が二貫目餘りの風呂敷包を背負つて來て、車に乗らうか荷持を雇はうかと言つて居たが應て荷持を雇うとに決し、近所に行く者は無いかと尋ね、飯屋の娘が隣へ行つて叔母(我親と同年位の女を叔母と呼ぶ)さんが行きますとの事で、壯年は自分より十二三も年長の女に荷を背負はせて行つたが實に意氣地なく見えな▲其談判が面白い、江津まで行くんぢやが足が痛いケニ、妾も足が痛い貴郎脚氣か如何しとるエ、膏藥貼つといた、其荷を負ふて貴郎に隨いて行くんかい、左様ぢや何ぼて行てや、何ぼテ大概世間並があらうがナ、世間並いふたて此邊の並と私等方の並とは違ふやろケニ、何ぼでも貴郎の心持で可いがナ、イヤ拙者は任せられるが一番つらい、先づ以上の様に話し合つたが彼の女が支度に歸つたあとで、飯屋の主人が十五錢なら宜からうと言つて居た▲何

故をナシテ、「斯う云ふ風に」を「斯う云ふシヨに」と言ふが、シヨは趣向だらう、少年に道を問ふた所が「半里とア多ゆうあります」と答へた、

九月廿八日

石州太田

楫野方にて

今朝、森山氏に温泉津の宿外れまで送られ、直に山一つ越えた、此山は極々低い山であるが、林は海に迫り海は谷に迫ると云ふ勢ひで、其谷其林は九分通り雄松である、勁直なる雄松が海風に吹かれて、其幹は海に背いて稍斜めに、其枝は稍下垂して居るに拘らず、依然として勁直の性を損しないのは實に美觀で、松の根は二三尺の熊笹や裏白を以て掩ひたる處もあり、稍黄ばみたる白土或は白砂を露出せる處もあり、秋空一片の雲なく、乾淨なる日光が此清寂なる林谷に満ちて、松氣颯神經を刺戟するのは記者が最も愉快に感じた所ぢや▲此山から前の一山を隔つて二個の屹然たる峯を認め、これは氷上山である、湯里村へ出て、次の坂を越えると二個の奇峯は直に前に現はれるが、箱根の双子山に較べると尖つて居るのが美觀で、氷上山と云ふだけに氷山の形なんてある▲氷上山の北麓に在つて海に沿て居るのは馬路村で、此村から大森へ越える嶮坂を降露坂と云ふのぢやが、記者は此坂を越えなかつた、此馬路村の道路は軟沙塵を没するばかりで却々歩けない▲馬路村の次の坂へかゝつたが、此坂は低いに關らず、地勢が餘程好いので、氷上の兩奇峯相對峙せるを眼前に觀るのみならず、濱田三隅間の大麻山を煙霭の間に望み、江津の西南なる星高山を大麻氷上の中間に觀、右は浩渺際なき大溟を控へて居る▲應て仁萬村へ着き、飯屋を搜したけれども無いので菓子を食ひ始めた、これから大森までの間に飯屋があるかと問ふたが無いとの事で、宅で炊いたのがあるケニ上れと言つた、ソコで食ふとになつたが、副食物の茄子は旨いけれども、肝腎の飯が米の粗い上に冷えて居て一碗しか食へなかつた▲仁万から大森までの路は稻田の間を通るとが多いが、大森の直ぐ後なる坂はチョット骨の折れる坂で、仁万から大森二里と云ふのに三時間以上かゝつた、如何も電信線のない路は知らぬ間に時を費やして居るので困る▲大森警察署長の話に據れば大森銀山の坑夫雜役など總て三百名ばかり、銅ヶ丸銅山の方は坑夫雜役など千四五百名も居るので、此規模

は遙に彼に及ばぬとの事、記者も豫て大森銀山は小仕掛にして居れば麻かる、大仕掛にすれば却て損すると聞て居るから、其規模の小なるこそ當然と首肯いた▲大森から太田までは餘程近く感ずる路である、安谷橋と行恒橋の間から辰の方(東から少し南へ偏る)に見ゆる大山は有名なる三瓶山で、形状頗る富嶽に似て居るが、頂上が廣過るので格好が少し悪い、俗に見える、富嶽の形を俗なりと言つた論者も、三瓶の方が雅であるとは言ふまい▲今夜、微酔を冷風に吹かれつゝ、人を訪ふて、十六夜の月を眺めたが、晝間見て俗なりと感じた三瓶は、明月に美化せられて、月夜の富士を箱根から観る心地がした、

九月廿九日

雲州今市

太田屋にて

大森銀山を採掘し始めたのは、餘程古い事で、大同年間である、初めは山の上の方から採掘したものと見えて、頂上に近い所に金糞かねくそが残つて居るさうナ▲足利の末世に及んで、雲州の尼子と越州の毛利が大に戦つたが、大森銀山を取ると否とは、各自の財

政問題即ち生存問題なんて一生懸命ちやつたゲナ、これに較べると川中島の戦争などは演劇めいて居ると説く者あり、何だか故福澤翁の口吻に類しちよる▲大森銀山が古い歴史を持つて居るだけに、大森には羅漢寺を始め名高い古寺が多い、併し今は昔に較べると餘程減つて居る、と云ふのは焼けたり倒れたりしたのを再建せずに打棄てたからぢや▲大森附近四萬五千石は幕府領ちやつたが、天明の飢饉に井戸平左衛門正明と云ふ代官が甘藷を植ゑさせて餓死を免れしめたので、農民は今に至るまで深く其徳に服し、薯代官の碑が至る處に在る▲今朝、太田で縣會議員福岡貫造氏を訪ふた、彼は醫者で牛乳屋を兼ねてゐるが、以前は殖牛會社を設立して失敗したことがある▲三瓶の裾野は、石州の安濃、邇摩二郡、雲州の箆川、飯石二郡に跨つて居るので、志賀重昂先生等が舌を爛して説くまでもなく好牧畜場であるのぢや、福岡先生、志賀先生ほど書物は讀まないが、実行力に富んで居ると見え、安濃郡をして盟主の位地に立たしめて三瓶牧畜組合を組織してゐるさうナ▲ソコで安濃郡の産物は牛、米、甘藷、鱈、鱒、鰯、烏賊、鰯となるのぢや、鰯を酢漬にしたり罐詰にしたりするとを解せず、餘つた

分を悉く腐らして肥料にして仕舞ふのは惜しいものぢや▲安濃郡の多額納税者は、恒松登太郎、竹下弘ぢやが、太田村には大地主が四五人居る、戸數五六百の處に大地主が四五人も居るのは鳥根縣では太田だけさうナ、▲福岡氏を辭して應て波根西、波根東に來たが森々として際涯なき碧嶽は、往々怒號し來つて岡陵岩窟を嚙斷すると見え、山裂け浪侵したる痕跡歴々として存して居る▲雲州の境に近くなつて、赤土山に雌松の多いのは、宛然京都附近の山のやうぢや▲雲州に入つて十餘丁の處は、田儀と云ふ漁村ぢやが、此處に糞食して冷飯に閉口したが、鳥賊は新鮮な上に肉厚くして柔かて餘程好いのであつた▲田儀から小田の手前までは海岸の道ぢやが、強風に激して雪を蹴へす如き荒海は實に凄いやうぢやつた、帽子は十たび以上吹き飛ばされたが、風は海上から來るので海中へは飛ばなかつた、一度は稻田の中へ飛んだが農家の竿を借りて取つた、▲軍人の跋扈と云ふほどでも無いが、兵卒には無學の者が多いので、到る處宿屋料理屋などを荒らし、道路に立小便などして警官等を馬鹿にして居るとの噂、濱田溫泉津等に聞えてる▲濱田には山口中將閣下御旅館と云ふのがあつた、軍人崇

拜熱の程度が判る、

九月三十日

雲州平田

福島方にて

大社は東北西の三方を山で圍まれ、前は地の稍高い杵築町であるから、冬は餘程暖かであらうが、夏は随分暑さうである▲大社には三つ鳥居があるが、一の鳥居は地の高い處に在る、一の鳥居の前に立つと、三瓶其他の高山が悉く眼中に集まつて却々快瀾である▲長州、石州は一體に平地の少い處で、道路も山と山との間を曲折迂回して居るが、雲州になると餘程平地に富んで居るので、東は伯州に通じて山の見えない處がある▲平田町は簸川の土手から稍北に偏して低い處ぢやから、眺望は餘り好くないが簸川の土手に立て見ると、西南に三瓶山、東南に伯耆の大山が見えるので眺望絶佳である▲杵築から當地までの間に山彙があつて、中ほどの嵯峨たるものは鷄鳥帽子山ぢや、それから東の方には鱈淵寺と云ふ名刹があるけれども、山路で日が暮れるだらうと説く人があつたので行かざつた▲石州の車夫は、往々畑をしながら人に勧めたり、

大工の手傳ひをしながら人に勸めたりして居るが、雲州へ來ると左様いふ車夫は居らない、けれども人の通るを見る毎に車を勸めてうるさいと此上なしてある▲雲州は一體に物價の廉い處ぢやが、宿屋及び車夫などの人氣が甚だ卑しく見える、昨夜の宿屋は、宿泊料の外に菓子代を請求したが、これは待ち設けて居た茶代を遣らないからであらう、高が五錢か六錢の菓子代を宿泊料に籠めて置けば可いのに、客の立ちがけに店頭で請求するなどは興の醒める次第ぢや、

十月一日

雲州松江

皆美館にて

今朝、平田の宿屋を立つて秋鹿の方へ行きかけた、宿屋の主人は秋鹿まで三里、秋鹿から松江まで三里、都合六里の道なりと言つたに拘らず、十四五丁も歩いてから聞けば、小境まで二里あつて、小境から秋鹿まで二里半もあるとの事▲ソコで記者は五分間も佇立して考へた、電信線のない道は正味六里でも八里歩くほど時間を費すとは從來の經驗で判て居る、正味七里半も八里もある處を歩いては、電信線のある十里以上の

道を歩くと同じだらう、晝飯は秋鹿で食ふ積りぢやが二時三時となつては困ると▲斯く考へたので、十四五丁歩いたのを反古にして平田まで引返し、道を宍道湖南に取つた、莊原までは田圃の間の路なので幾度か問ひつゝ歩いたが、これからは國道で、宍道村から、松江までの間は、湖畔に沿ふて歩くから實に心持が好い、萬里の碧海、濤怒つて岸を噛み喰ひやうな光景を見た記者は、此宍道湖に對して美人に對する想がした、萬里の碧海が英雄のやうで▲特に落日湖上に近く、水面金色銀色紫色暗紅色を錯綜して居る横に已に日光を受けざる蒼然黝然たる林巒ありて、其上に鼠色の天主閣を畫き出して居るなどは人をして神仙境の遠からざるを感ぜしめる▲けれども一秒一分毎に進む我足は我を仙境に導かずして俗境に導いた、荒物屋、薪屋、理髮舗に始まり藥種屋呉服屋菓子屋種々雑多の店は左右より記者を迎へて應接に暇あらざらしめ、何時の間にか記者を導いて天神橋を渡らしめ、郵便電信局に入らしめ、山陰新聞社を訪はしめ、大橋を渡らしめ、皆美館に入らしめた▲東京の王子より來つて數月來此家に滞在せる齋藤直之助氏先づ記者を迎へて旅情を慰められ、次で山田金太郎氏が訪はれた